・上原長門守尙近・上井伊勢守覺兼・北郷一雲、評議豊後征伐及可防羽柴下向之夏、此日賜饗膳、其座次第、中座　太守公、左一雲、次家久、次久倍、次覺兼、次久治、次親貞、澁谷對馬守等也、右川上上野介信久、次忠長、次忠棟、次光宗、次本田紀伊守、次尙近也、

96

「義久公御譜中」

天正十三年十月十一日、使本田下野守親貞、爲肥後州警衛致首途也、北郷入道一雲家臣上洛、有頃下國者曰、羽柴殿軍衆下向有增必定也、

天正十三年十月十四日、從肥後州、新納武藏守獻書簡曰、豊後州南郡入田氏、先是雖得罪於大友氏、五六ケ年前、被許出頭、然而未得如元所帶、因茲屬薩摩方、有欲散胸霧之隱謀、其事既露顯、由是從豊後發軍衆襲來于南郡、于時入田氏構搖木之城、一門士卒六千許輩楯籠、將及窮困之旨、自坂梨有注進也、然則不可不發救兵、達士卒催促散狀於領國中矣、

97

「御文庫廿二番箱四巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「御書案文　鎌刑御使節之刻」

未申馴候之処、對伊集院右衛門太夫・本田下野守御傳書加披見候、御懇情長悅此事候、抑　関白殿被治天下掌之段、諶非所及筆舌候、殊去夏之比、被成芳檄候、便宜之爲躰候条、于今申後候、慮外之至候条、爲可伸回礼差上使節、幽齋迄申試候、自然之刻、可然樣御取成所仰候、仍生糸拾斤進之候、聊補微志計候、恐〻謹言、

十月廿日　　義久

羽柴美濃守殿　御宿所

「上書ニ有之」
「天正十三年
御書案文」

鎌刑御使節之刻」

98

▽拾月

一朔日、看經等如常、此朝打立、歸宅申候、新武暇乞ニ御座候、只今從隈部殿註進候、山下之事も一着候、未何方之御番衆指籠之由者きこえぬ由也、此日八城德之渕へ着候、蓑田信濃守へ秋月殿・龍造寺殿・筑紫殿、今度勝軍之一礼可申候、飛脚使僧可被仰付之由申候、意趣聞にとて被遣候、東狩野介召烈被來候、尤信濃守可參候へ共、養性出合候間、代を以申述由也、酒肴持

せ預候、即使僧へ意趣申、明日書狀可渡由申候也、森
但馬拯処へ宿申候、亭主種〻会尺共也、
一二日、早朝村山舍人助酒肴被持來候、朝食寄合候也、
又莊嚴寺酒肴持せ候て御座候、即參會申候、甲斐大和
守使遣候、此方へ着候哉、萬端向後身躰之事賴由也、
織物一持せられ候、秋月殿・龍造寺殿・筑紫殿之書狀
認候て遣候、村山舍人助へ持せ候、并甲斐大和守へ御
物十俵合力候て可然之由、是も村山方にて蓑田信濃守
へ申候也、此晩水俣へ着船候、地頭代より酒肴持せら
れ候、明日夫丸等合力可有之由申候、輙由返事也、
一三日、払曉毘沙門へ看經別而仕候、夫丸・乘馬等、地
下より合力候間、軈而打立候也、此晩山野着候、別當
所ニ宿仕候、地頭税所越前守殿、食籠肴にて御酒持せ
拙宿へ被來候、即參會申候、明日夫丸等不如意候ハヽ
可承由也、就夫賴由申候也、
一四日、跡より陸路來候衆、於山野待合候、忠棟より去
月廿七日之書狀、八城天龍寺持被來候、比奈久にて陸
路來候衆行合、請取候由申候て持來候、即披見候、中
旬比迄御番ニ逗留候様ニ御賴之由也、然共爰元より又
罷立ハ不事成義候条、其侭如かこ嶋打立候、日向之衆
ハ皆〻直ニ歸候也、此晩湯尾舟津田之村ニ留候、
一五日、早旦打立候、夫丸等不如意ニ候て、有川へ留候
て地下衆賴候也、然処ニ鹿兒嶋大膳房眞幸へ被參候と
て通にて候、拙者やすらひ候由被聞被來候、當年入峯
之義共物語也、次ニ飯野へ參之通候間、有川雅樂助殿
迄御跡ニ御舟へ罷居、今日こそ如かこ嶋可參爲、爰元
へ越申由申上候、并筑紫殿より進上之書狀、新武より
八城まて持せられ候、定而御談合ニ　御着之由定候つ
る条、其時上候する覚悟にて持せ申て候へ共、無其義
候間、有川殿まて屆られへき由申候て、大膳坊へ渡候
也、此晩加治木役人中へ使遣候、明朝出船申度候、舟
之儀可被仰付之由肝付藏人殿まて申候也、此夜有川へ
留候也、
一六日、早朝打立候、加治木より迎之夫丸なと預候也、
加治木町へ片時やすらひ候、肝付藏人殿御酒持來候て
会尺也、亭主も御酒振舞候、然処從白濱迎船來候間、
軈而乘船申候、如敷祢荷物等遣候、彼船ハ加治木より
合力也、未之刻計白濱へ着候、暫塩風呂なとに入候て
慰、軈而打立、かこしまへ參着候、敷祢かりやニ今夜
ハ留候、△

一七日、▽早朝出仕申候、白濱次郎左衛門尉殿を以肥筑表御靜謐御祝言申上候、并就御談合直ニ祗候之由候間、參上申たる由申上候也、卽被成　御見參、此間辛労申たる由　上意也、肥筑表之樣子なと御尋被成、有侭一〻申上候也、△從昨日御談合始候、御意趣等稅所新介・伊地知伯耆守にて被仰聞候、彼兩人御談合之御使也、御談合衆、先中書公・秘書公・北鄕一雲・忠棟・光宗・久倍・親貞・伊集院野州・上原長門守・拙者也、御談合題目、豊州表御弓箭之事、并羽柴筑州下向之由世上風聞之儀共也、▽此晩談合衆へ御被下候、御座躰中座　太守樣、客居北鄕一雲・中書公・町田出羽守・拙者・本田下野守・伊集院下野守・澁屋對馬拯、主居川上上野守殿・秘書・忠棟・平田美濃守・本田紀伊守・上原長門守也、澁屋召烈たる衆皆罷出乱舞也、深行まて御酒宴共也、

一八日、中書公御宿へ參候、從夫秘書御宿へ參候也、此日も終日御談合也、此晩秘書御宿へ從御談合所直ニ被召烈候、稅所新介・白濱周防介・伊地知伯耆守・拙者也、御酒御振舞也、

一九日、早朝忠棟にて寄合被成、座躰、客居中書・北鄕一雲・拙者・澁屋對馬拯、主居椛山玄佐・本田紀伊守・忠棟也、澁谷同心之衆各罷出乱舞也、今春なと罷出太鞁仕候、良久酒宴也、從夫直ニ御談合ニ各指出被成候、△

一十日、玄佐・一雲御宿へ參候、上原長州同心申候也、▽此日御談合、殿中ハ御隙入事候て、眞幸御假屋にて談合也、寄合中ハ吉田作州在所へ御座候て、懸引被聞せ候、中書公御談合前ニ拙宿へ入御候、御座躰客居中書・上原長門守、主居本田紀州・拙者也、良久御閑談にて御酒也、此晩吉田作州各へ御酒振舞被成、種〻之儀共也、△此日長崎之伴天連より忠長・忠棟・拙者へ使書にて被申候、當年上洛之志候處、御留被成候、笑止ニ存由也、從羽柴殿大坂ニ寺家預置候、爲一礼上洛申候処、御留無納得由共也、各へ白濱防州にて申候、南林寺客殿作之事、拙者へ被仰付候、併在陳最中にて、急〻難事成存候、殊ニ若輩分別迄にて難成所存計候、▽誰寄合中今一人御相添候樣にと御侘申候、儘者平田濃州被指加之由也、吉田作州にて從　御前蒙仰候、南林寺作被仰付候、番立時分難成事者御校量にて候へ共御賴被成、急〻事行候樣ニと被仰候、　御意之分各へ

談合申、御返事可申上由申候也、△

一十一日、出仕申候、本田野州肥後御番ニ御打立被成、南林寺作之事、涯分入魂ハ可申候、併年内中にハ難事成存候由、吉作にて申上候也、此日も於殿中終日御談合候、豊後へ御弓箭之事、御神慮之儀も當年春御伺被成候ニ、肥州表可然之由候て其分に候、然ニ年中ニ又御鬮なと御申候する事ハ御納得無之候、又從今莵角と候ハヽ、天然來春ニ可罷成被思食、其内諸口より計策肝要之由　上意候、左も候ハヽ、自然ニ見え來へき事も可有之欤之旨被仰出候間、其分ニ定候、御談合衆、中書・河上殿・北郷一雲・吉利殿・伊集院下野守・本田紀伊守・白濱周防介・吉田美作守・上原長門守・本田刑部少輔也、寄合中者別座にて承候、御使伊伯・税新也、▽此日中書公与秘書御領内ニ六ヶ敷事候、左様之義拙者御頼にて候間、白周にて寄合中へ御談合共申候也、將亦一昨日十日、從忠棟八木越後守にて承候趣、中書公、拙者娘、吉利殿を以御所望候欤、斟酌申候条、忠棟御頼被成候間、御意次第之由、早ゝ申上候て可然之由也、不紛吉利殿にて兩度左様ニ蒙仰候、併　太守様御近ゝ之御事にて候処、憚多存候、拙者も忠棟を頼存申候、被聞召分候様ニと申候也、△此日一雲内衆上洛仕候、頃下候、必定羽柴衆下向可仕有増之由申候段、御申共也、從筑後表鹿嶋右衛門尉被罷歸候、秋月・龍造寺・筑紫なと意分共被申候、秋月より橘城未落去候間、彼城へ一御行被成、麻生・宗像之事、御所勘被成候様ニ御才覚候て、其後豊州へ被召懸へき事可爲肝心之由也、▽莵角先彼堺御治被成候て可然之由共也、

一十二日、從夜中薬師如來看經仕候、今日御談合衆爲見物可爲御能候、其前御寄合可有候、取成可申由候て早朝出仕申候、然ニ天氣惡候て御能ハ留候、御寄合之御座躰、上座ニ御座候、主居中書・吉利下總守・拙者、客居秘書・北郷一雲・本田紀伊守也、終日御酒宴也、澁屋一類祗候申候而乱舞也、金春又二郎太鼓罷出仕候、此夜中書御假屋へ澁屋被召寄、御慰共也、吉利殿・拙者沈醉申たる由申へく候へ共、頻御使預候間參候、深行まて酒宴也、甲斐大和守書狀越候、忠長・忠棟・拙者へ也、主身躰之儀共也、相應返事申候、

一十三日、福嶋之富松方元服被仕候、拙者取成申候間、礼ニ被來候、御酒・祝物共預候、此日於殿中御能候、翁与吉郎渡候、能組難波・梅・春栄、澁屋對馬仕候、

其後於御前御酒被下、退出候刻御太刀拜領させられ候、伊集院左近將監被渡候也、鞍馬天狗与吉仕候、御椽まて參候ていろ〳〵しまへ共仕候、花かたミ・檪塚・御惱・楊貴妃・くれはのきり、此等にて候、脇宗次郎ニ御腰物被下候也、北郷殿御酒持參候而、能合狂言之時分參候也、此夜肝付彈正忠殿より使者預候、并加賀酒預候、使者与參會候て賞翫申候、△

一十四日、▽忠棟へ可參之由候間、其分に候、吉利殿・拙者也、奥にて寄合被成候、此日於殿中御談合也、△新納武州より昨日書狀到來候、豊後南郡入田方牢〻候て、五六ヶ年已前、又大友殿被召直候、併領知等如本〻無之候故、此度此方へ申入、可散意霧企候処、豊後より被取懸候故、ゆる木と云城取構、入田方一類六千程楯籠之由、坂梨より註進仕由也、一定此儀にて候ハヽ、御發足も可有候、先〻諸方へ續之義可被觸之旨候て、廻文被認候也、▽南林寺東堂殿中へ御參候、客殿作之談合共也、此晩拙宿にて各へ寄合申候、客居吉利殿・町田出羽守殿・上原長門守・本田刑部少輔、主居忠棟・吉田美作守・拙者・伊地知越中守也、此夜珠長・可丹・本田信州被來、深行まて閑談也、一王大夫來候て、小唄なとにて酒宴也、△

一十五日、▽夜中ニ看經別而仕候、一王大夫所へ茶湯之由候間行候、秘書・拙者也、頃眞壺求得候間、見せ候する爲也、其後出仕如常、△此日終日御談合也、肥後口・日州口、衆分之御盛共也、▽中書与秘書御領内就六ヶ敷事、伊集院野州・白濱坊州にて左右方へ寄合中御意見共被成、二方御承引無之候て懸引共也、此夜顯娃殿宿へ秘書入御被成候、拙者も可參之由候間、其分候、深行まて酒宴共也、△

一十六日、▽出仕如常、△此日從筑後表伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守被歸參、彼表之樣子共被申上候也、此日も終日御談合也、

一十七日、▽早朝鎌田刑部左衛門尉殿、頃御勘氣にて福昌寺へ被居候、無沙汰申候但御酒持せ行候、從夫御談合ニ罷出候、肥日兩口衆盛等事成候也、昨日忠棟より中書公御賴被成候とて、拙者娘御所望之儀、伊地知伯州にて被達　上聞候、然者拙者前よりも彼儀最前ニ申上候すれ共、寔不相應之事候間、中書へ御侘申候条、きこしめしわかれ候すると存、蒐角不申上候処、御披露之由候間、迷惑申たる由、拙者も伊伯賴存候て申上候

也、御返事、さてハ拙者子にて候者、中書御所望候欤、一段目出被思食候由也、此日南林寺へ可参覚悟にて打立候処、留守之由承付候間留候、從伊野州同名肥州・猿渡越州、拙宿へ被來候間、閑談にて御酒なと也、此夜從忠棟、頻中書被仰義領掌申候て可目出之由、八木越にて再三承候間、さてハ何と様にも忠棟御校量法第、御返事可有之通申候也、

一十八日、觀音へ別而讀經等申候、此朝中書・秘書口事邊之儀、寄合中左右へ御意見共被申候へ共、御承引無之候間、被達　上聞候、中書楚忽之儀を被成候条、寺家へ御座候て可然候、秘書ハ然与御座候て肝要之由也、此由秘書へ被仰候へ共無納得候、然者不及是非候、併今少各吴見被成候する由也、拙者ハ善哉坊京都へ御使ニ可被登候間、左様之早ゝ可申調之旨候て御暇被下候也、中書御宿へ参候て、口事邊之義、從最前吾ゝ御頼之由候つる事候間、可承合存候へ共、被仰付事候条、御暇申候、無首尾之様候、乍去　上聞共被成たる儀候間、如何様目出事果可申候由申候て御暇申候、御酒なとにて良久御閑談共也、南林寺へ参候、山田越州同心申候、御客殿作之事談合申候也、御酒持せ候、参會候て漸久物語申承候、平家座頭有合候て平家語候、此夜出船申候、少白濱ニやすらひ候て、軈而敷祢へ着船候、休世より即使預可参由候へ共、明朝可参由申候也、

一十九日、早朝休世へ参候、種ゝ御振舞過候へハ、打立候、休世大塚之原まて御送被成、御酒御持せ被成候、此晩嶋戸へ留候、

一廿日、早朝打立、薄暮ニ宮崎へ着候也、

一廿一日、衆中・寺社家衆、酒肴共被持來候、銘ゝ参會申候、此晩越ニ立候、直ニ瀬戸山大藏丞呼候間、彼処へ行候、種ゝ会尺共申候、衆中なとあまた同心申候、

一廿二日、朝越ニ立候てやかて歸候、野村右近將監にて善哉坊申候趣、昨日関右京亮にて申候処、彼方於中途落馬被仕被歸候、然間又ゝ申候、兼日京都御使僧被仰付候、來月始必ゝ打立之由申候也、其次中國へも可被仰子細有由申候也、此日も寺家・衆中なと被來候、各酒肴持せ也、

天正十三年拾月

一廿三日、善哉坊被來候、昨日使を以承候、京都へ御使僧之儀、寔兼日被仰付置候、併頃上國之事者俄之様ニ難成存候、殊更世上風聞にも、爲豊後与力、羽柴衆當

國へ下向之由申候、かゝる砌ニ上洛申候ても被請付候
する事茂不存候、彼是迷惑ニ候、然共御奉公にて候間、
何と様にも御意次第候、儅者種〻訴訟可申事等候、そ
れさへ調候ハヽ可罷登之由也、卽參會申候而御酒寄合
候、持せ之御酒なと賞翫申、閑談候也、先〻京都御使
僧之事、御意次第之由肝要ニ存候、御意分共者近日中
鹿兒嶋へ使節進上申候条、一〻ニ可申上之由申候て歸
し申候、△
一廿四日、▽地藏菩薩へ別而看經申候、△羽柴衆下向之
由世上申散候間、一所衆・諸地頭起請文進上被成候て
可然之旨、今度於鹿兒嶋御談合定候、然者所〻へ此由
申渡候、▽并南林寺作材木、來月中彼御寺へ御點(懸カ)合油
断有間敷之通、使節・書狀なとにて申渡候、△此日拙
者も神文相認候、条書之趣、一羽柴衆就下向之儀、御
家景中運計策之由風聞候、不可致与同其黨事、一右之
衆令下着、可及御防戰之刻、縱當病出合雖難成步行、
私宅ニ罷居間敷事、一到拙身上於有聞召掠条者、速被
仰聽、愚意亦可申披事、如此候、神文等如恆、▽此晚江
田住吉御祭礼ニ參候、諸事如舊例、衆中各同心申候、
皆馬上にて候、神迎ニ參候て、御輿之御供申候て、直
ニ大宮司処へ行候、会尺等如例、
一廿五日、祈念別而申候、種〻会尺共也、碁・將碁・双
六思〻ニ慰候、申刻計御社へ參候、祭礼如例年、又御
輿御供申、直ニ大宮司処へ行候、殊之外会尺酒宴也、
例年者一兩日逗留申候へ共、急用共候間罷歸候、直ニ
越ニ立候、此夜池田志广拯処へ留候、
一廿六日、朝越ニ立候、池田志广拯所にて殊之外会尺也、
衆中五六人同心申候、從其直ニ町口普請させ候て終日
見申候、比志嶋殿より使預候、美〻津へ栫取被成候す
る、曾井之人衆召烈、彼処へ在城可申之通、一兩日前
承候、各難成存候、併かこしまへ祗候候て、御侘等候
ハヽ、御申可然之通拙者申候条、其校量被成之由也、神
文・南林寺材木兩条、被得其心候由也、從財部使也、
肥州へ長〻辛勞申候て罷歸候、目出由也、并御神文・
南林寺材木、其校量被成候、御神文案文申候て可進之
通承候、案文進之候するニ不及候、羽柴衆計策ニ入せ
られましき一ケ条にて候、吾〻之案文物語申候て、使
者歸し候、
一廿七日、從清武使者也、是も御神文・南林寺材木之事
にて候、神文之案被乞候へ共、如前返事申候也、此日

柏周・鎌源・野大、茶湯申候て慰候也、藤村堪丞より茶椀下候てくれ候、さ樣開候て各へ見せ申候、

一廿八日、御崎寺御越候て、講讀如恆、泉長坊弟子當年初入峯にて候間、祝言ニ可來之由候条、其分候、終日会尺也、罷歸候刻、及薄暮ニ候処、柏周直ニ語候へと承候間、彼館にて深行まて各雜談共也、

一廿九日、從佐土原高崎越前守被越候、趣、鹿兒嶋より頃被歸候、中書より承候、先日我〻存申候秘書と御六ケ敷事、于今も秘書無御得心候間、福昌寺門前へ御斟酌被成候、如何樣此上者御納得候すらん、先〻如此由被仰候、次ニ者、我等肥州へ罷登候て留守中に候間、高知尾之質人之事、鎌雲へ御談合被成、都於郡・佐土原へ被召置候、拙者見參可仕由也、卽見參仕、御酒寄合候也、兩質人より喉輪一懸・柒十筒預候也、此晩より觀千代爲祈念供養法企候、滿願寺申請候、非時參會候、如恆候、三檀にて不動法卅三座御修行候、終夜之御勤也、△

99

起請文

一度〻申談儀、倍於向後無愍變可致入魂事、

一至被抽忠貞者、知行等之儀、年寄衆江申達、御案堵不可有疑事、并於貴所許客人茂同可申調事、

一近隣之人衆可被相催才覚、是又一稜之可爲御眞実事、

右條〻若於令違犯者、

▽上者梵天帝尺四大天王、惣而日本國中六十余州之大小神祇、殊者當國鎭守阿蘇大明神　薩州新田八幡大菩薩開聞正一位　霧島大權現　豊州惣廟田原八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬、神罰冥罰可罷蒙身上者也、仍起請文如件、△

新納武藏守
忠元判

天正拾三年霜月朔日

丹後入道宗和
玉林老

100

「正文在新納次郎四郎忠饒」

度〻軍労無比類之處、今度到其堺長陣之儀、一段神妙者也、弥可被抽忠貞事、專要候、仍狀如件、

天正拾三年十一月六日　　義久(花押)

新納武藏守殿

「上包」
新納武藏入道殿　　龍伯

「此御書、忠元譜中ニアリ」

101

從前代、入田三田井家之事、深甚被相談、御重縁等被仰結、于今無變化候事、千秋萬歲候、彼首尾於永ゝ、聊不可有別心候、仍今度諸境之弓箭、無是非次第候、悴家爲連續到嶋津家申合候處、別而御懇之御入魂候、每札申通旨共候、御丁寧恐悅候、且隣山、且先例之覚、當方上下至其元、尽未來際無他心、可得貴意候、縱世上如何躰ニ轉變候共、申談旨毛頭不可有相違、爲證文飜寶印之裏申入候、御同胸所仰候、

右之旨一言半句茂於有僞者、

▽上者梵天帝釈四大天王、下者堅牢地神、惣日本國中六十餘州大小神祇　伊豆　箱根大權現　松尾　平野　賀茂御社　春日大明神　八幡大菩薩　兵法九万八千之軍神　阿蘇十二宮大明神　當所八十九社之明神　天滿大自在天神御罰、各於身上可罷蒙者也、仍起請文如件、△

天正十三年乙酉十一月八日　　甲斐長門入道宗攝（花押）

興呂木新左衛門尉武富（花押）

馬原右近太夫

入田殿　　重昌（花押）

參人ゝ御中

102

「義久公譜中」

（本文ハ一〇六号記事ノ前半ト同文ニツキ省略ス）

103

「御文庫拾六番箱四巻中」「義久公御譜中正文有トアリ」

連ゝ御心底、無別儀故候之哉、頓御神文、殊到隈本質人被指出候之事、諶珎重候、此等之御悅先ゝ以一人令申候、仍太刀一腰并織物一端進入候、必近ゝ從鹿兒嶋感懌之段、可被仰通候之欤、委曲期來喜候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「天正十三年」十一月十六日　　親貞（本田）（花押）

蒲池殿　御宿所

104

「正文有之」「義弘公御譜中ニ在リ」

義字事遣之訖、得其意、忠功肝要、委細輝元（毛利）可申越、猶兩人可申候也、

「朱カキ」「天正十三」十一月十八日　　（義昭）（花押）

嶋津兵庫頭とのへ

「上包有之」
嶋津兵庫頭とのへ

105

「義弘公御譜中」
「正文在手鏡」
（本文書ハ二一二号文書ト同文ニツキ省略ス）

106

「義久公御譜中」

天正十三年十一月廿日、前日遣佐土原・三城（塩見・門川・日知屋）、宮崎之士往高知尾、其中宮崎之士田中筑前歸來曰、入田氏歸心於薩摩者必矣、以故來廿四日、可爲豊後之敵、然則同日同時、梅口・佐伯口發出薩摩軍衆所以冀也、

107

▽十一月

一朔日、夜中ニ滿願寺へ御粥參相候、辰刻計供養法御成就也、御時參會候、衆中五六人相伴ニ頼候て種〻御会尺申候、酒宴共也、本尊之布施百疋、滿願寺へ木綿十端進入申候、香花・燈明・檀引、其外供物等如常、此日縣へ遣申候敷祢越中守被歸候、從彼方こそ無沙汰候処、使進之候、祝着之由也、其外条〻堺目等之義申渡候、被得其心候段也、道正宗与下向申候、於中途敷越被逢候、拙者へ用段之儀共候間、明日必此方へ可來候、先〻誂候眞手桶隨身候て罷下候、定而急ケ敷候らん、先〻遣由申候也、聽而見申候、天下一仕候間、中〻無申計候、此晩加江田へ打立候へ共、及薄暮候条、谷口和泉拯処へ留候、種〻会尺共也、

一二日、又谷口種〻会尺仕候、從夫聽而打立候、大渡まて酒肴なと持せ候て良久慰候、從夫漸加江田へ着候、△

一三日、▽毘沙門へ看經如常、恭安樣へ參候、種〻御会尺也、御伊勢御祭礼爲見物打立候処、宮崎より申來候、夕宗与宮崎まて來候、今日必此方へ參候由也、さてハ先風呂会尺申候すると存、圓福寺へ參、風呂燒せ候て入候処、△宗与來候間、風呂にて会尺申候、忝由共申されて候也、京都之物語共にて候、先〻羽柴衆爰元へ下向之義風聞候、如何之由尋候、不紛其分申散候、乍去此方御弓箭にハ少ためらハるゝ段物語也、豊後をさへ早速被召崩候ハヽ、迚も下向者可難成之通共也、▽此晩御伊勢大宮司所へ行候、宗与同心申候、種〻会尺共也、悉皆京物語にて候、過半茶湯之事也、

一四日、天氣惡候間、宗与今日ハ逗留之由頻申候へ共、大向之御物等、從宮崎直ニ如田野遣候、然者田野迄急

ケ敷通被申候間、会尺申候て田野まて送候也、此晩祖三寺へ拙者ハ留候也、

一五日、早朝恭安へ參候、御会尺如恆、茶湯所可作校量にて、安藤土佐拯召寄候間、切符なと校量申候也、并地なと見候て、普請させ候て見申候、

一六日、如前寺家衆なと酒肴共被持來候、

一七日、折宇迫鹿藏狩ニ登候、

一八日、藥師如來へ看經別而申候、此日鎌田源左衛門尉殿被來候、和田刑部左衛門尉にて鹿兒嶋へ申上候条〻、御返事聞得候也、善哉坊京へ御使僧之事領掌候哉、肝要ニ被思食候、さてハ早〻可被參之由候条、書狀にて此由申遣候也、此日座の石なと居させ候て見申候也、

一九日、鎌源なと同心にて終日遊山共候、

一十日、內山之鹿藏狩せ候、鎌源鹿一被射候、終日遊山也、

一十一日、鎌源ハ被歸候、拙者ハ普請なと見候て慰候、此夜青嶋へ水鳥多候間、早朝ねらひ候する爲ニ罷渡候て、拜殿ニ伏居候、神主召烈候間、ね覚候て物語申候ニ、霄より深候てハ、波音しつかなる由共申候まゝ、

波に覚し夢をもむすふ氷かな　と申候、神主少連歌共意得たる者にて候まゝ、卽脇なと仕候て慰候也、又

独ねハむさゝひなれや夜と共に鳴明しつゝ鳥をこそまて　なとゝあまりのさむさに戯候也、

一十二日、早朝起出見候へハ、嶋山の松計青やかに、下草も眞砂も白妙に霜雪降つもり候まゝ、

陰青しまつより外や夜はの雪　と申候て、やかて罷歸候、此晩狩のため小目井矢野大炊左衛門尉処へ行候、種〻会尺共申候也、

一十三日、宮之浦之大宮司酒肴持來候、卽見參仕候而酒賞翫仕候、從夫狩登候、鹿二取候、此夜ハ富土へ留候、

一十四日、ふとの狩藏ニ登候、鹿二取候、伊比井より酒肴なと持來候、彼正祝近日神舞仕候間、頻可立寄由申候条、其分候、恭安も御出也、種〻会尺共也、其座ニ高本坊とて法花宗被居合候て色〻雜談也、恭安も拙者も法花持經申由物語申て候へハ、中〳〵悅喜候、寔歡喜踊躍之躰候、但樂受持大乘妙典、乃至不受餘經一偈、此物語なと也、

一十五日、伊比井大明神へ恭安御參詣候て御歸帆也、拙者ハ野嶋へ行候、大宮司処へ留候、種〻会尺也、從田野使來候、卽見參申候て御酒寄合候、堅志田番前にて

候、去三日替之由候つる、于今無其儀候、如何之由尋也、都於郡衆替前之由候、侘なとゝ候つる侭、其故遅ゝ候らん、彼方へ被聞合候て可然之通申候也、

一十六日、野嶋之白鬚大明神へ早朝參候て見候へハ、神墻の松枝古て、言語道断不申及候、松か根の緑苔も見えぬ計霜ふかく候まゝ、過半祈念にと存候て、

むす苔の緑もみえす霜ふかしむへ白鬚の神墻の松

波洗舊苔鬚、と哉らんより思出候也、此朝も見籠候て山へ登候、神九郎殿鹿被射候、從夫折宇迫より迎船來候間、如紫波洲崎歸帆仕候、財部比喜之大宮司一公房御酒被持來候、即參會申候、別条にも無越候、頃地頭与六ヶ敷事出來候、趣者、比喜之宮山にて南林寺御材木と候て過分ニ被取せ候、是者神木と申、留山にて候間、可被指置之由其衆へ申候へ共、頻材木之事うはひ執候、然者漸道具を留置候、地頭より案内なとも不承、如此之振舞、必竟二三ヶ年對地頭不和之樣候間、其故候、殊ニ翌日、比喜領之者共、野ニ萱苅ニ出候を地頭内衆悉鎌なと取候、其上散ゝニ打擲共仕候、此上之恥辱有ましき由也、就夫者御祭礼も留候、又來御祭礼も罷成間敷通承候也、儀者其分ニ候哉、委承置候、鎌田筑州よりハ未蒐角承候、明日彼方へ事問、御返事可申候、殊ニかこしまへ參上候て彼段披露之由候欤、尤可然存候、併鎌筑返事到來迄、中途ニ被相待候て可然之由申候也、何と樣にも拙者校量次第ニ清武へ可相待由也、

一十七日、鎌筑へ書狀を以、一公房承通細碎申渡候也、此晩柏原周防介・和田刑部左衛門尉同心ニ被越候趣、從都於郡、堅志田御番猶ゝ難成之儀、又ハ定德院僧之事、高知尾へ金乘坊被遣候事共、荒田讃岐守にて宮崎へ鎌雲より承候由ニ付越着候、委意趣承、聽而会尺共申候也、此晩彼兩人同心申候て、明日十八にて候間、御崎寺へ參候、終夜閑談仕候、酒宴なと也、

一十八日、早旦御崎觀音御堂ニ參候て、別而讀經申候、さて於寺ニ種ゝ會尺也、和田刑部左衛門尉都於郡へ憑候て返事申候、堅志田番之事、是非共御問目肝要之通申候、金乘坊高知尾へ被遣候欤、是又可然之由申候、定德院僧嘱之事、先日聽而和刑にてかこ嶋へ得御意候、御返事之侭ニ申候也、柏州・和刑被歸候、於中途綱引せ見せ申候、魚種ゝ入候条、於中途賞翫共申、良久慰候也、

一十九日、加治木源六矢開狩仕候間、打立候処、鎌筑越之由、一昨日飛脚歸候て申候侭留候、聽而越着候、恭安へも御礼可有之由候間、彼方にて參會申候、恭安・拙者へ銘〻ニ御酒持預候、賞翫共申候也、一公房被申候通、凡同篇候、併似たる物之似ぬ物にて候也、委承由申候、会尺之内ニ日暮候間、此夜ハ留被成候也、△

一廿日、▽拙宿にて鎌筑寄合申候、御酒過候へハ歸候也、此日去三日、ちふくの湊にて内海之船破艘候、然者荷物等如常留置候、　武庫樣御料所にて候間、内海假屋へ樣躰役人前より申させ候趣、御物等載候ハ、御役人中へ談合之儀も可有之候へ共、無其儀候条、是非を不申候、然者、彼荷物等ぬれ候て可損候条、其覚悟申へく候、然者案内申由申候也、彼舟之事、無余義寄船迄候、されハ俵物四十余候欤、其内十計ハ讃岐拯荷物に候、餘者木工助と申者之つませたる荷物に候、彼者當時留守に候条、御物共私用共不存之由也、さて荷物ぬれ候間、損し候ハぬ樣ニ故実候するハ、何と樣にも此方校量次第候、蒐角彼舟破艘之義無紛候間、吾〻可被下荷物にてハ無之候由申候也、△此晩宮崎より加治木雅樂助來候趣、從佐土原承候、先日御談合を以、高知尾へ佐土原・三城・宮崎之衆被指遣候、其内田中筑前守罷歸候、入田方此方へ一致ニ可申入之由必定候、就夫來廿四日豊州へ手切可仕候、然者梅口・佐伯口へ同日同時ニ御行奉賴之由也、即承候て、堺目之儀候間、諸篇可申付存、如宮崎罷歸候、▽一番鳥之時分宮崎へ歸宅候也、△

一廿一日、▽早朝中村内藏助を以長野下總守殿へ申候、高知尾之樣子、筑前守罷歸申候欤、委承候、併猶〻相尋へき子細候、此方へ筑前守可被遣之由申候、返事、筑前守ハ中書かこしまへ御座候間、彼方へ參せられ候、於樣子ハ先使を以承候同篇之由也、就彼義拙者かこ嶋へ參上之企候欤、先〻宜使者にて申上候て可然候、若〻中書与風歸被成、拙者境目へ同心なとゝもや候すらん、利口なから承由也、△和刑從都於郡被歸候趣、堅志田番侘之事、得其心候、定德院僧之事、是も納得候、高知尾之儀、田中筑前守罷歸候趣、同前ニ承候也、丸田左近將曹佐土原衆へ指添高知尾へ遣候、歸來候、諸篇者田筑被申候ニ不違候、入田方豊後へ手切日執之事、來廿四日とつれ共、御圖を申されて、來卅日ニ定由也、▽此晩加治木治部左衛門尉処へ可來之由申候条、

罷下候、種〻会尺共也、

一廿二日、勝目但馬守にて鎌雲州へ相尋候趣、高知尾より註進之義、來卅日ニ相定候由候、惣而拙者存候処者、如此心底無別儀段顯然候上者、今少御談合共候て、御用ニ一途可罷立時分、手切可然存候、於爰元如此之分別納得不申候、先〻日執を可申據存候へ共、中書定而御校量候らん、其上後判如何存候、雲州分別同懐にて候ハヽ、申留度存候、已後にハ用ニ不立事候条、談合之爲申由申候也、殊更豊州とハ當時御一和之事候処、彼義迄にて人數可被打出事、更ニ所存之外之由申候也、縣口より人數可指出之通、從土持殿飛脚使にて承候へ共、是又曾以得心不申候条、是非共此節人數可被指出事、曲事之由申候通申候也、此晩勝目殿歸候、雲州返答、さてハ此方より高知尾へ遣候衆罷歸候欵、田中筑前守口、必竟同前候欵、拙者如申候、入田方此節手切之事、被仰據候ても可然候、乍去後判之遠慮共候、尤候、此方より手切与被仰ニハ違候、彼仁分別にての手切ハ不苦候欵、其故ハ後日彼方与豊後之義ヲ無事ニ被仰調候する行も可有之候、勿論縣口人數被打出候する事ハ可悪存候、旁以拙者校量之外有ましき由也、　太守樣、正八幡爲御社參ニ大隅へ御滞在候間、使を以右之儀共可申上ため、中村内藏助・上井右衛門尉申付置候、彼兩人召寄、雲州意分直ニ聞せ候也、從夫申上候意趣、兩人へ申聞せ候、高知尾續之道次等見償之爲、中書之内衆一兩輩被指遣候、拙者も一人可指越之由、從佐土原承候間、丸田名字之者差遣候、彼仁罷歸候、田中筑申候趣、少も不違候、入田方手切之事ハ、來卅日ニ御圖を以指延候、蒐角然〻之手切たるへき樣にハ不聞得候、然者此節之事申據度所存にて、鎌雲なとへ談合申て候へ共、彼方も拙者分別次第之由候間、中書御校量与申、後判如何存候而無其儀候、蒐角入田右之分別にて之手切迄を、一行にて、梅口・佐伯口へ人數被打出候する事ハ、我〻ハ曾以納得不申候、田中筑も中書當時御方へ逗留被成候条參候、定而中書御前より巨細申上候らん、我〻ハ此度之義一も承留処無之候、併何分ニ校量可仕欵之由申上候也、

一廿三日、大隅へ上候兩使打立候也、堀四郎左衛門尉を以、　武庫樣へ同申上候也、

一廿四日、地藏菩薩へ看經別而申候也、此日西方院風呂燒せ候て入候、院主者清武勢田寺灌頂ニ被行候て留守

也、心靜ニ風呂にて慰候、然処知事御酒なと被振舞候、
從夫、兒・若衆然与共新發意達、可香聞之由被申候て
張行候、香過候て、御酒宴中ニ、
　色深き梅の立枝を尋ても香をたに振ぬ袖の哀さ
如此書付、老僧へ渡置候て退出候也、
一廿五日、天神へ別而祈念等申候、此日終日碁・將碁な
とさせ候て見申候、
一廿六日、本田越後守殿被來候、久無沙汰候、上井右衛
門尉宿からせられ、拙者へ御酒たへさせられへき所存
にて越候へ共、右衛門尉留守にて候間、不及是非候と
て大酒預候、猪丸なと持せ也、即城内之衆中なと呼申、
寄合候て御酒賞翫仕、閑談候、飯野へ上候堀四郎左衛
門尉被歸候、御返事、高知尾堺より、入田方、到豊後
頃手切之由候欤、委被聞召候、從大隅比志嶋宮内少輔
以、　太守樣より被仰越候、趣者、一向相吳候、佐土
原之田中筑前守、宮内へ祗候申候て申候趣者、去十六
日、入田方豊後へ手切被仕候て、南郡之事悉破滅候て
煙中ニ有由申候、さてハ先年日州打入之砌も、正宮へ
御社參被成候刻、直ニ御出張候、今度もケ樣之義目出
被思召候間、直ニ可爲御發足候、　武庫樣も御支度肝
要ニ被思召由也、然者拙者申上候処相吳之樣ニ候、併
此說一定さうに思召之由也、蒐角中書も近日定而御歸
宅たるへく候間、寄〻劫者なと涯分談合肝要之由也、
此晩齋藤讃岐拯可來之由申候間、本越・堀四なと同心
にて罷下候、種〻会尺共也、今夜ハ彼処ニ留候、
一廿七日、此朝又讃岐拯會尺種〻仕候也、正光寺呼寄申、
高知尾より申來事共、周易之卜賴候て承候也、從夫歸
宅申候、此晩福富權五左衛門尉祭礼閇目申候、其酒吾
〻ニ振舞候、本越・柏防なと寄合候て賞翫申候、△
一廿八日、▽御崎寺御越被成講讀也、此朝柏原周防介殿、
本田越後守殿今日被歸候間、会尺候、拙者も可來之由
承候条、其ことくに候、種〻会尺酒宴共也、△此日大
隅まて進上申中村内藏助・上井右衛門尉歸候、於曾於
郡拙者申上旨、稅所新介殿にて具申たる由也、御返事、
入田方豊後へ手切之事、委被聞召候、先田中筑前守、
留守殿ニ御光儀被成御会尺之最中、与風參候て、白濱
次郎左衛門尉を以申上候処ハ、去十六日、入田方豊州
へ被致手切、南郡ハ無殘所燒却候て煙之内ニ有由申候、
然者日州御退治之時正宮御社參、直ニ御進發候、今又
ケ樣之儀到來候、誠〻御佳例目出候間、早〻御出張之

由、忠棟へも早船を以被仰遣候、さてハ定而拙者御一左右申上候らん、是を御待被成候処、使節進上申候、御祝着候、此趣、田筑申候にハ相吳候へとも、宮崎より高知尾へ遣候者ハ一兩日跡立來候、是說必定さうニ被思食候、愚意之分委被聞召候、▽御校量ニ伺候、尤ケ様にとこそおほしめされ候へ、堺目より何条宜儀を申來候共、鹿兒嶋へ御談合申候ハて、楚忽ニ軍衆打出し候する事有間敷之段、被仰候、中書公へも此由自身參候て可申之由也、彼田筑ハ入田殿へも面談申たる由被申上たる由共也、言語道断、無首尾無申計候、此晩鎌源所より拙者夫婦可來之由候間、其分候、種〻会尺共也、

一廿九日、普請なとさせ候て見申候、

一卅日、町口垂なと立させ、普請させ候て見申候、從佐土原長野下總守書狀被遣候、趣者、内端之御出勢之事ハ、大方來二日ニ定候、爰元油断候ハぬ様、さてハ美〻津兵船勸にハ川上左近將監只今差越候、吾〻油断申候ハぬ様にとの儀也、今朝同名右衛門尉にて長野下總守殿まて申趣、大隅へ高知尾說之義申上候、田中筑前守申上候分、餘〻相吳之由候、此分申事候、又從境目何条宜事等申來候共、楚忽ニ軍衆打出候する事、曲事之由蒙仰候通申候也、然者右之返書ハ不入事と存、菟角使節にて今朝申候間、御納得肝要之由申候也、

拾二月

一朔日、看經等如常、鎌源・上井右衛門尉処なとへ久無沙汰申候但、礼ニ行候、種〻会尺共也、此晩從大隅御使僧被下候、念佛寺時衆也、即參會仕、御意趣承候、就入田方之儀、先日兩使を以申上候条〻、尤被思食候、于今御思案候処も、菟角楚忽ニ人數打出候てハ可惡おほしめされ候、中書公へも、自身拙者參候て此由可申入之由也、御使僧へ御酒寄合申候也、此夜くさニ振付、散〻之式にて臥居候也、

一二日、くさ氣不醒候条、御使僧會尺、柏原周防守賴候て仕候、御返事も防州にて申候、御使僧忝之由、又堺目何篇宜事等申來候共、軍衆楚忽ニ打出し候ハぬ様にと蒙仰候、其分別堅固ニ可仕之由申上候也、

一三日、此日くさ然〻さめす候て伏居候也、柏原防州佐土原へ中書御歸宅之由聞え候間、參せ候、次從御前上意之儀共自身參可申候へ共、くさ氣散〻候間、先〻柏防にて申上由申候也、此日中書より御使書被下候、來

六日御談合有度事候、可参之由承候、又拙者娘御所望共候、就夫、従東郷両使被指越候、吾〻隙次第被指遣へき由也、御談合ニ可参之由候欤、御意法第可参候由、貴報申候、并東郷より使者之儀、是又御方吉日次第、可目出之由申候也、

一四日、如常、

一五日、和田江左衛門尉殿當年頭役共成就候、其後打續拙者留守にて候キ、然者祝言ニ御酒寄合へき由候之間行候、終日種〻会尺也、

一六日、早朝佐土原へ参候、即御使給候間、軈而指出候、食籠肴にて御酒進覧候、奥へも同前、御談合衆、鎌田出雲守・山田越前守・拙者也、柏原周防介・都於郡衆高橋肥前守被召出、聞せられ候、先〻高知尾境之儀共也、入田方手切去卅日ニ相定候へ共、此方より此節御見次難有之由候間、先〻指延られたる由也、此談合最中、從都於郡高知尾へ被遣候衆中一人被歸候、此口も同前也、蒐角近日入田方質人、高知尾より可被請取有增之由也、中書此度眞幸へ御参被成候、爰元様子御談合被成、飯野迄委細御申候する、彼方より鹿兒嶋へハ様躰御申被成候て可然之通、御約束御申之由也、然者從高知尾者追〻ニ彼義可被申候、其時者何分ニ當國衆分別申、返事共申候て可然候する欤之由、飯野まて先〻御意を被伺候て可宜之通御談合定候、種〻御会尺共にて、深行ニ我〻宿へ歸候、弓削太郎左衛門尉処へ留候也、御せかいへも食籠肴にて御酒進覧申候、

一七日、早旦佐土原打立罷歸候、新名爪長福寺へ久無音申候間、礼ニ行候、種〻會尺也、拙者も御酒持せ候、亭主賞翫共也、彼処佐司なと御酒くれ候也、

一八日、薬師へ別而祈念申候、勿論佛名会にて候間、三世諸仏ニ、現世安穩・後生善所之祈共申候、此日井尻伴五郎矢開仕候とて種〻酒宴共也、恭安様御越被成候、御酒なとくたされ候、賞翫申候、

一九日、恭安様へ御会尺申候、此日從佐土原東郷殿御使とて被來候、東郷又八郎殿・白濱刑部少輔殿也、意趣、忠棟以媒介、拙者娘、東郷殿重縁定候御祝礼也、折三對・樽二荷、拙者へ太刀・織物一、内へ織物一、娘へ織物一重、恭安へ片色一、二堞へ織筋一、鎌源へ片色一、神九郎へ百疋、右衛門尉へ百疋、對屋へ織筋一、かつけへ織筋一、女子共ニとて帶五長、加治木但馬拯役人とて百疋、包丁人山本備前へ百疋、谷山仲左衛門

尉・加治木雅樂助三献之配膳申候とて木綿二、内之役人ニ木綿二、納戸へ百疋、谷山仲左衛門尉・奥右京亮祝物共取成候とて兩人ニ又木綿二宛、諸篇見廻候五六人へ木綿一宛、新房へ木綿一、此分也、會尺之樣躰、二条居瓶子如常、三献同前、座配客居東郷又八郎殿、次敷祢越中守殿・有川右衛門尉殿佐土原衆・上井右衛門尉殿、主居拙者、次白濱刑部少輔殿・柏原周防介殿・有川左近將監殿、是も佐土原衆也、終日酒宴也、點心之時、野村大炊兵衛尉殿・弓削太郎左衛門尉座ニ呼候、拙者前より兩使へ織筋二宛進之候、佐土原よりの兩人へ織筋一宛、弓削太郎左衛門尉へ木綿五、中間衆兩人へ百疋宛、其外各之供衆・夫丸等まて木綿一宛くれ候也、関備後守へ各宿也、

一十日、恭安樣御歸之由候間、早朝御会尺申候而御打立也、此晩西方院之風呂へ參候、大門坊にて先種〻会尺被成候、從夫風呂過候て、又西方院会尺共にて閑談申、深行ニ罷歸候、此日紫波洲崎へも祝言之御酒持せ上候也、此日鹿兒嶋へ書狀進覽候趣、今月朔日付之書狀一昨日到來候、殿中御番、今月宮崎・清武・田野にて候、失念申候哉之由承候、驚入候、當年三月右之所〻にて閊目申候、其後ハ蒐角承事無之候、從今申付被參候共、中旬ニ可及候、然者半月なり共可申付候之哉、又來朔よりたるへく候哉、得御意由申候也、又南林寺作釿立、正月十一日之由候、得其心候、上葺御弓箭中と申、板葺ハ可難成候、先〻萱葺之由候、是又御意次第候、併追而可申入之由申候也、

一十一日、明日舟おろしさせ候する爲、海江田へ罷越候也、蘇山寺へ留候、根來法師有合、曲共申候て酒宴也、

一十二日、藥師へ別而祈念申候、紫波洲へ參候、恭安樣種〻御会尺也、塩時來候て舟おろさせ見申候、酒肴共諸人持來候て各へ御酒振舞、舟祝也、船大工紀伊湊之者也、圓福寺・蘇山寺被來候、酒肴預候也、根來法師被召烈候、茶湯之座にて会尺仕候、終日閑談にて酒宴也、

一十三日、早朝恭安樣拙宿へ御出候、御酒御持せ被成候、茶湯之座にて御会尺申候也、從夫恭安樣へ參候、今日之祝言如恆例、安樂阿波介城へ移候間、行候て見候、忝由申候て会尺共也、此晩圓福寺之風呂ニ參候、然処、從佐土原川上左近將監・高崎越前守にて被仰候、聽而風呂よりあかり候て、圓福寺にて御意趣承候、高知尾

書狀到來候、去六日對豊後手切候て、一兩日相働、被得勝利候、然共諸口無何事候、猛勢續合候て敵懸候処、一戰候て敵餘多討捕候、被陳取候処然ゝなく候間、高知尾衆ハ引退候由也、入田方にハ不被取合由也、入田方質人ハ高知尾ニ請取たる由也、從爰者入田方も高知尾も難儀たるへく候間、早ゝ御見次之由被申候、されハ山中の衆なと、先ゝ高知尾へ指續候てもや可然候すらん、又此等之段、鹿兒嶋へ拙者前より御註進可申之由被仰候、即御返事申候趣、さてハ從高知尾、豊後へ去六日手切候哉、一向納得不申候、かこ嶋よりハ此節人衆一圓ニ何条候共出申ましき由、堅被仰候、然者高知尾御見次と候ても、人衆彼堺へ被續候する事ハ不可然候、先ゝ鹿兒嶋へ佐土原・都於郡御談合被成、御註進尤令存候、拙者前より先日も申上候旨趣、佐土原より御申にハ相異候て、如何敷存候、我等前よりハ、かこしまへ此節人數指出共申候するや、又何と宜事等候共、一圓ニ人數出申間敷候哉之由、可伺御意候、此度手切之事ハ、御方より御申肝要之由、返事申候也、此夜ハ圓福寺へ留候、

一十四日、雨不艶降候間、宮崎へ歸宅之事難成候て、加江田へ留候、

一十五日、看經等如常、此朝安樂阿波介鹿兒嶋へ參せ候趣、高知尾より到來候書狀、爲御披見持せ申候、又入田方も高知尾も爰より難儀たるへき由被申候、然者日州衆見次可申候哉、又滅却ニ及候共、此方より手切申され候へとハ不被仰事ニ候間、指捨可申候哉、菟角御地躰承置、可得其心之通申上候也、此日宮崎へ歸候也、鎌田源左衛門尉殿かこしまより昨夕被歸候、肥後口より新納武州御註進申され候、入田方被申事ニ、頃中書より豊州へ手切可仕之由候間、其分之由候、笑止ニ被思食候、是非共此節者可悪候、人數此口より御出候ハぬ樣にと鹿より被仰候間、拙者へ尋ニ及す候まゝ、佐土原へ參候とて此夜被來候、中書御傳言共委承候、菟角近日中御談合たるへく候、先日拙者佐土原へ參候間、今度ハ此方へ御出候する由也、

一十六日、関備後守を以中書へ申候、一兩日已前、加江田まて御兩使忝候、高知尾堺之儀、到拙者も書狀來候条、鹿兒嶋へ忰者にて申上候、先日如申候、御方より然ゝ御申、可目出候、就夫爲御談合此方へ御越之由候、此節者作事ニ取乱候、其上憚多候間、御用候ハゝ、佐土

原へ可参之由申候、兼又御内儀ニ申事候、かこしまよりハ何条宜事共候共、境目へ此節人數可被指出事無益之由候条、御地盤者大方聞得候、左候処、爰元にて御談合候ても、一途可被申仁不存候、只中書公、是非共ニ此節豊州へ被召懸候ハてハと思食候ハヽ、當國衆にてなり共、彼高知尾之事御見次候する通、御評定肝要候欤、蒐角一稜御内存定候て、其上之御談合專一候、大方にハ如何ゝ由申候也、又中書御子息樣御一兩人疱瘡御煩之由候間、ケ樣之儀如何之由共申候、

一十七日、関備後守、夜前從さと原歸候由候て被來候、就高知尾境之儀、御内儀尤被思召候、蒐角今少御思案被成、此方へ使を以可承之由也、此日就殿中御番之儀、かこしまへ進上之書狀返札到來候、半月なりとも閊目可申由也、衆中指揃、御番之盛之談合也、清武・田野へ此由申渡候也、從佐土原御使也、又七殿御兄弟三人、疱瘡御煩被成候、蘇香圓所持申候ハヽ、進入可申之由也、

一十八日、佐土原へ野村右近將曹を以申入候、御息樣疱瘡御煩之由、笑止ニ令存候、尤自身參候するを、定而御心安御養性にて候らん侭、遠慮申、先〻使進入之由申候也、

一十九日、昨夕より滿願寺申請、拙者來年四十二ニ罷成候、其祈念申候、十一面之法廿一座御修行候、其御会尺共申候也、檀樣・檀引・供物等如常、本尊之布施百疋、滿願寺へ木綿三端、同宿衆へ二端宛、此日鹿兒嶋へ番衆進上申候、税所新介殿まて此由書狀相副候也、

一廿日、都於郡へ來正月元日より殿中御番たるへき由、永山兵部少輔にて申候、當時肥州御番、彼方より被成候、其上俄と申、難成之由侘也、又書狀を以申候、就肥州御番、殿中御番侘之事承候、是者諸公役ニ不取合、所〻閊目被成候、其故者、去秋肥後御出勢之刻、大口之殿中御番前にて候キ、新武を始大口衆、各肥へ被罷居候へとも、殿中御番者無足衆なとにて被閊目候、然者其例共候間、是非共御閊目肝要之由申候也、此晩江田之轟木隼人佑、可下之由申候間行候、路次にて鉄放にて鶴射候、彼所へ留候、種〻会尺也、

一廿一日、隼人佑会尺申候、彼近隣之衆酒肴なと持來候、隼人佑子ニ名付候、祝物なとくれ候也、歸候砌、從佐土原御使高崎越前守被來候、奈古之前にて行合候、然者泉境坊にて御意趣承候、高知尾堺之儀共也、從鹿兒

嶋飯野傳之御狀、爲披見持せ被成、又拙者へも寄合中より別紙到來候、いつれも高知尾口之事共也、

一廿二日、本田越後守鹿兒嶋へ歲暮ニ參上之由申付候間、意趣可被聞とて被來候、御酒預候、卽寄合申候、意趣申候、南林寺作之事、高知尾堺之事共也、又昨夕、安樂阿波介かこしまより歸來候、御返事共承候、高知尾堺手切之事、一向無御納得候、蒐角、人數彼境ニ遣候する事ハ有ましき由也、誰然ゝ之衆指遣、彼方之樣子見せ申候て、眞実之御左右可申上之通也、中書御息樣疱瘡、于今然ゝなく候て、種ゝ御祈禱共被成之由本越物語候条、佐土原へ參候、柏原周防介同心申候、卽御見參被成、御酒御寄合候、其刻、高知尾より拙者へ書狀到來候、甲斐長門入道・興呂木新左衞門尉・甲斐左近將監、彼三人連署也、折角之躰候条、爰元見次賴由也、頃阿蘇家中高森方、豊州へ相付由共也、返書、年内之事ハ山中雪深候侭、軍衆高知尾へ指越難成候、來春一行可有之由申候、年内之事者、中書御内衆近日中可被指越候、左樣之衆へ談合候て、堅固之才覚肝要之由申候也、近日中爲計策、豊州家中へ拙者忰者餅原名字之者指通候する由、中書へ伺御意候、尤可然之由被仰候也、佐土原より夜入候て罷歸候也、

一廿三日、平田新左衞門尉殿歲暮ニとて越候、次ニ穗北衆中氣任ニ共候、今分にてハ御公役難成候由候、儀者、何たる衆中取分氣任之振舞候哉、承候て其扱可申由尋候、寺田名字之者、就中無了簡之由承候間、曲事之由、近日使者を以可申理由申候也、從都於郡高橋肥前守使ニ被來候、殿中御番侘共候つれ共、何と樣にも閇目候する由也、又羽柴衆下向之由、世上風聞候、就夫神文之事、諸地頭申渡候、爰迄遲延候、拙者へ持せ之由也、卽披見候、各鹿兒嶋へ直ニ進上候、雲州事も其分可然通申候也、

一廿四日、地藏菩薩看經別而仕候、奈古・岩戸・爪生野八幡へ參詣申候、從夫馬洗せ候て見申候処ニ、從金剛寺風呂燒せられ候、可來之由候間、參候て入候、然処從飯野御使被來候由候間、聽而罷歸候、御使者長野仲左衞門尉殿也、　又一郎殿樣御元服已後、御祝物等不被下候間、御音信被成之由也、御太刀一腰・御馬一疋、月毛、印三目結、卽拜領申候而、從夫御使者へ会尺申候也、△

一廿五日、餅原大炊左衞門尉へ巨細申含、豊州家中へ計策ニ遣候、從佐土原御使也、三原宮内少輔殿也、一兩

日前参候御礼、又高知尾表之儀也、阿蘇高森手替之様子ハ、稲富新介・仁田水左衛門大夫・村山丹後守同心にて彼宿所へ被行、質人之懸引共候処、仁田水・村山を城へ呼入、仁田水ハ生害させ、村山ハ親類にて候つる間生捕、新介も生害させ候する校量にて候つれ共、何分にて候哉、彼方へ被落延候由也、言語道断之通御返事申候、▽此日従東郷殿、娘へはこ板給候、使鳥原左近將監也、はこ板二・織物一・同裏衣一・へにむくりうなと也、使者之会尺、加治木但馬拯へ相伴させ候て已後、拙者見参申候、使者祝礼計ニ木綿三、中間衆へ二遣候也、△此夜従中書御使書被下候、并高知尾表より之數通御持せ候、即披見候、高森手替一定也、稲富新介より金乗坊へ之書狀も候、仁田水方生害必定之由也、豊州衆高森館ニ打入たる義共也、稲富新介ハ以粉骨被延候由之書狀也、

一▽廿六日、早朝數祢越中守を以中書様へ申候、高知尾説〻、如到來者、此口も一行肝要候欤、左候ハヽ、先〻鹿兒嶋・飯野へ使を御進上候て肝要候、又爰元地頭なと御揃被成候て御談合たるへく候哉、菟角一途御校量候ハてハの時分に候由、申候也、△

108 如示預、其表被致通達候之處、相居候哉、于今滿足不少候、殊更肥州表無殘所属案利候事、本懐此時候、隨不其(而カ)境豊陣悉敗北之段、御大慶察存申候、此方以御同前候、弥無別心、種実以一致、對當邦向後可被厲忠貞事、不及申候、兼又実信・經重可申談候旨、不可有疎意候之間、可御心安候、仍大切之矢尻送預祝着候、拙子茂年内必〻八城迄可罷越候条、互可申通候、恐〻謹言、

「天正十三年比欤」
十二月七日　　忠棟判

星野伯耆守殿
御返報

109 雖未申馴候、令啓候、仍於高知尾入魂之由、度〻承及候、肝要之儀候、如御存知、実之住宅候之間、弥於無二心者、至薩州可致取次事、不可有疎略候、扨者隣所之人數江被廻計策、同心之方多〻出來候之様、分別專一候、殊至尊以神文被仰含之段、是又頼母數存候、尚期後喜候、恐〻謹言、

「天正十三年」
十二月九日　　家久判

入田殿
御宿所

110

態染筆候、抑去秋

禁裏御近所江堂上衆被遷殿候、家門之儀同前候、然者、諸式不如意之儀候条、匠作江差下古川主膳入道候、此節以馳走助成可爲祝着候、次者夏比候哉、段子壱端到來、懇意之至候、猶進藤筑後守可申越候也、かしこ、

「天正十三年」十二月十三日　（信輔）（花押）

「古川入道十四年三月十八日至宮崎、見上井日記」

新納武藏守とのへ

111

進藤筑後守

「上封」新納武藏守殿　御宿所

長治

追而、去夏比候哉、御家門方段子壱端、即令披露候、被成御祝着候、次拙者へも壱端送給候、過分至極候、以上、

爲御使被差下古川主膳入道「宗忍」候条、令啓候、仍御家門御殿之儀、禁裏被移御近所へ候、然ハ諸事御不如意故、難調候、毎度被仰越儀も乍如何、此節之事ニ候間、被成御助成候樣、御取合賴思召候、別而御馳走之段、可爲御祝着由、猶從拙者相心得可申旨候、恐〻謹言、

「天正十三年」十二月十三日　長治（花押）

112

「御文庫三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

新納武藏守殿　御宿所

諶其後無音之躰、非本慮候之處、芳書到來、歡悅至極候、仍此刻到豊筑、可被渡諸勢御催候之哉、豊薩防戰之立柄、先年以京都之御刷、和睦之筋、于今無變易候、雖然彼國中之黨、構逆心楯籠由、必定候、萬一及錯乱候之者、案外之儀可出合候欤、隨而去春柳澤（元政）殿爲　上使被成下向候、且者御礼、且者熟談之儀爲可申入、眞連坊（賴俊）指登候、旁用口上令省略候、恐〻謹言、

「御譜ニ天正十三年ト朱カキ」拾二月十三日　修理太夫義久「判ナシ」

謹上　毛利右馬頭（輝元）殿

113

「串良衆堀口長左衛門藏」

謹上　毛利右馬頭殿　修理太夫義久

「上包裏ニ有之」「天正十三年十二月　從中國飛脚之　御返案」

態染筆候、抑去秋禁裏御近所江堂上衆被遷殿候、家門之儀同前候、然者諸式不如意之儀候条、匠作江差下古川主

膳入道候、此節各以馳走助成可爲祝着候、隨而扇子三本進之候、猶進藤筑後守可申越候也、狀如件、

「天正十三年」十二月十三日　（信輔）（花押）

北鄕彈正忠殿

114

「義久公御譜中」

天正十三年十二月十三日、島津中務大輔家久、自佐土原遣兩使至宮崎、達上井伊勢守曰、從高知尾寄捷書云、去六日、對豊後爲仇敵、兩日相働之際、多勢敵兵懸付挑鬪、則漸衆兵敗、得數多敵首、然而無結一陣之地、而引退高知尾矣、自今以後入田氏與高知尾可迄窮困、請速賜援兵、入田氏之質來在高知尾云云、

天正十三年十二月十五日、從肥後州新納武藏守忠元注進曰、入田氏有言曰、依中務大輔家久之言、已對豊後爲敵矣、吾聞此言曰、此時手切不可然勿發援兵、日州亦同達此旨也、

天正十三年十二月廿二日、高知尾甲斐長門入道・興呂木新左衛門尉・甲斐左近將監遣連署書於上井伊勢守曰、被逼大友氏窮困之至也、速可賜救兵、又阿蘇氏家臣高森氏頃爲大友氏旗下矣、伊勢守報書曰、發救兵欲增勢、而年内山中深雪、何之如乎、中務大輔家久旗下之兵、近日可至其地、凝評議運籌策、勿怠警衛、越年俟春温之佳期、可及一行也、

天正十三年十二月廿五日、阿蘇家臣高森氏依有意違、使稲富新介・仁田水左衛門大夫・村山丹後守往高森之城、問質人諾否之際、招入仁田水氏・村山氏於城裏、忽屠殺仁田水氏矣、村山氏者爲親戚、故爲生捕、新介亦將誅戮、然而致粉骨得退去也云爾、

115

「御文庫廿二番箱十一巻中」

起請文之事

今度龍造寺政家改先非、當邦可爲幕下之由、對秋月種実内訴之条、難澁止厲懇望者也、然間、倍互連綿之儀、又者縱雖有讒言之人、忽可相糺実否事、

右之旨若於有違犯者、

「末紙ニ」「天正十三」龍造寺政家へ　神判草案」

（表紙）

義久公
義弘公

天正十四年

後編 舊記雜錄 卷十七

「忠元勲功記」

一天正十四戌正月七日、右ニ付忠元市來下總守与家來立本玄蕃等召列大口打立、九日、三船江參着、則致手分家來弐人を坂梨江遣、新納四郎左衛門忠秀（入道慶雲）、大口衆有村隼人忠正・薗田丹後守等を矢部へ遣、野心之者共何れも加成敗、其時野尻城ニ陰謀之聞得有之、新納慶雲与有村隼人を差遣、城主之親類を人質に取置、左候而此月廿三日、高森城可攻崩日取吟味之節、伯囿樣御日柄不宜与爲申人も御座候由、然共　伯囿樣ニ者、誠ニ軍神御座候付、却而御擁護こそ可有之与、忠元ゟ申論、終ニ其日ニ致決定、爲被攻取由御座候、

一同年十月、大友家之儀、此前ニ者伊東方救として、日州高城を取囲ミ却而及敗北、今又　大閤に訴へ、其力を借り薩摩江可討入企被仕由、就而者被滅置可然与之御吟味中ニ、豊後住人入田丹後入道宗和・志賀入道道益等近隣之士、被致催足此御方江賴上、却而怨を大友方へ相報度所存有之由、八代住人蓑田信濃守・高橋駿河守等、此御方へ御注進申上、　貫明樣御感悅思召、則忠元へ何卒可廻智計旨被仰付、直ニ仙鏡坊与申山伏を、入田城ニ差遣、一先聞合させ、其後忠元家來中馬源之丞与三船住人勘丞与申者を右之城中ニ差遣、猶又令探聞之、自彼方も吉良甲斐守与河南勘解由とを八代まて差遣、忠元取成ニて　松齡樣へ御目見迄被仰付、左候上、楢木右京亮与家來中馬源之丞を志賀城ニ遣、右之実否を聞合爲仕、自彼方も大塚右馬介・新野新助を差上、弥御奉公可仕旨申上、盟約之證狀等被取替、左候得共、入田方夫程眞実之手形見得兼候ニ付、又候大口衆有村隼人佐忠正に、檢使平田豊前守宗祇・濱田民部左衛門經重を被差添、入田城ニ被遣、其上　松齡樣より忠元江被仰付、兵道之作法共執行ひ、野村與三

117

「忠元譜中」

右衛門与忠元家來尾崎彦兵衛・中馬源之丞を志賀城ニ差遣、右秘法之針を爲埋置、左候而此月中旬、　貫明様八ケ國之大軍を被爲催置、豊後江御發向、　松齢様・中書様先陣之將として、肥後与日向与兩路より御討入、忠元儀者　松齢様ニ相付、肥後路より豊後之南郡へ致乱入候處、志賀・入田之兩氏も千餘之兵を召列内應仕候間、此等を案内として、同十二月廿一日、高城を攻取玖珠表に打入、其比忠元筋氣差起候故、次男弥太右衛門忠増に人數相付、平田豊前守宗祇等与先ニ爲致進發候處、權現城・城ケ尾・那女利城等に押寄せ、皆爲攻取由、今一手者、大口衆有村隼人忠正に人數三拾六人相付、房ケ畑城・舟ケ比良城に押寄させ、皆共攻取、小島刑部左衛門等戰死仕、此手も四五ケ所爲攻取由、左候而房ケ畑者隼人江在番爲仕置、其年者　貫明様茂於日州塩見城一説野山、御超歳、　松齢様者朽網城、中書様者府内ニ而新年爲被爲迎由御座候、

忠元遣忠増率兵及平田豊前守宗祇等倶往攻、權現城・城ケ尾城・栄飯城等皆陷之、此行忠元遣有村隼人忠正率大口士三十六人、襲房箇畑城・舟箇平城等四五城取之、小島刑部左衛門死之、乃使忠正戍房ケ畑城、土人謀伐戍衆忠正隊、卒内田某・紫村某・山元某・池田某等十八人死之、

118

「義弘公譜中」

「正文在頴娃右京」

「牛王」起請文之事

連〻入魂之辻、於向後忘失有間敷候、久虎無相違者、自是茂不可存疎略候、世上如何躰之讒言等雖在之、互可糺実否事、若此旨有相違者、

梵天帝釋四大天王、惣日本國中六十余州大小神祇、殊者當國擁護妻万五社大明神　一二三之宮　白鷺六所大權現薩摩鎮守八幡新田大菩薩　天満大自在天神部類眷属、神罰冥罰可罷蒙身上者也、仍起請如件、

天正十四年丙戌正月　日　　忠平（花押）

頴娃左馬助殿

119

▽天正拾四年丙戌正月

一元日、早旦様躰如恒例、奈古八幡へ社参申候、奉弊(幣)等如舊式、参錢百疋持参候、三献等如常、衆中各同心候、聽而下向仕候、隨例發句、

咲て待けふや神代の花の春　覚兼

年内十八日ニ立春にて候キ、然者庭の梢〳〵も未開なから色めき候まゝ、如此申候、寔祝言計候、如舊規鎧着始候、三献等如常、其後山本備前拯吾ゝ前にて包丁仕候、式之餝也、從夫恒例之三献にて候、慶賀來候而、二条居瓶子なと如例拜領候也、鎌田源左衛門尉(兼政・政徳)殿父子被來候、如早晩三献寄合候、衆中有足・無足被來候、城内之衆なと無余儀衆へハ三献寄合候、從夫種ゝ常之肴にて、各へ御酒寄合候、衆中過半酒肴預候、銘ゝニ賞翫申候、皆ゝ自酌にて候間、拙者も各へ酌取候也、終日酒宴にて候、内ゝへ御酒預方も候、然者無隔心衆ハ内座へ呼申候て、又御酒寄合候也、各被歸候て、節供之躰如恒例、不及記、悴者共も皆ゝ夫婦共ニ酒肴持來候、酌共申候て種ゝ酒宴共也、此夜鎌源へ礼申候、御酒如例持せ候、三献等会尺賀例之ことし、從夫柏原周防介(有閑)殿へ礼申候、是も同前にて候也、

一二日、任佳例吉書始候、三献等如常、老者衆・入道衆なと被指出候、酒肴共被持來候、如例御酒寄合候、此日猿渡(信光)殿・上井右衛門尉(兼成)殿・長野淡路守殿・関備後守殿・野村大炊兵衛尉(豊綱)殿・長山兵部少輔殿へ礼申候、衆中各隨身仕候、爰彼種ゝ会尺也、拙者も銘ゝニ御酒持せ候、

一三日、早旦毘沙門へ参候、此日佐土原へ参候、衆中皆ゝ同心申候、中書(家久)公奥せかいへ、籠肴にて御酒進入候、中書元日より疱瘡出合候由候て、長野下總守相伴にて御三献給候、鎌田雲州(政近)・山田越州(有信)被参相候間、同座也、從夫中書御休候処へ参候へ、御見参候する由也、斟酌申て候へ共、頻と承候間参候、散ゝ之御様躰也、聽而御前退出申候而、三原宮内少輔を以申候、從かこ嶋年内承候ハ、武庫(義弘)様明日四日御光越被成、可爲御談合候、鎌雲同心申、早ゝ参上之由候、然者昨日も打立可申候へ共、定而此口之御談合可出合候欤、左候ハ、中書御存分如何之由共御尋可有候条、先此方へ参候、必明日打立可申覚悟候間、御用等又者此堺之様子、如何御存分共承候て、祗候可申之由申候也、御存分者、旧冬已來度ゝ被仰候趣、無吳儀候、此節者御病中蒐角難御弁之由也、聽而御暇申、弓削太郎左衛門処小宿へ歸

候、長野下總守にて卽御礼承候、其刻鎌雲被來候て、良久閑談、酒宴共也、從夫罷歸候、中途まて佐土原町之者源左衛門(秀元)と申、酒肴持來候て賞翫申候、柏原防州・唐仁原藤七兵衛尉、高知尾境爲見償指遣候、被來合候て、門出共祝候也、此晩恭安樣(上井薫兼)より、神九郎(上井)を以御祝言承候、酒肴なと如例被下候、海江田悴者共、此日恒例のことく來候、拙者息疱瘡煩候(觀千代)へ共、餘ゝ輙候て、彼衆ニ見參申たる由也、△

一四日、此日寺家中御礼承候へ共、鹿兒嶋へ打立候条、重而御出之由、昨日同名右衛門尉にて、御祝言彼是申入候、滿願寺之事者、觀千代祈念共別而賴存候間、容易疱瘡煩候、目出被思候由候て入御候、如例三献參會候、御崎寺・木花寺、其外加江田之聖家衆被來候、同座ニ寄合候、各如例年酒肴預候也、福永藤六殿被來候、酒肴持せ也、從清武伊作州(伊集院久宣)、佐多紀伊介(忠長)殿を以、年頭礼義承候、籠肴にて瓶子預候也、善哉坊(面高賴俊)自身者、爲御使僧、鎌田刑部左衛門尉(政広)殿同心ニ年内上洛候之条、弟子連長坊被來候、如例三献寄合候、御酒預候也、當所之山臥衆も被來候、酒肴預候、是も同前ニ見參仕候、從夫打立候て、漸田野へ着候、行司山本越後守処へ宿申候、卽亭主御酒振舞候、大寺殿より、自身礼義可承候へ共、定而心安居候らんとて、子息源六殿被來候、酒肴持せられ候、衆中少ゝ同心也、此朝吉利(忠澄)殿・山田越前守殿へ申渡候趣、年内鹿へ進上申候書狀返事、夜前到來候、御兩所も御談合可有子細候、早ゝ御參上之由也、高城へハ寺田壱岐守にて御祝言、此由兩条申候、吉利殿へハ當年祝言柏周にて申候間、書狀を以申候也、從鹿、當年者元日計烏帽子上下にて候、諸家以、從翌日者肩衣袴に候由承候条、此義も申候、

▽一五日、長藏坊酒肴預候、弟子なと見せられ候、始にて候間、祝物預候、聽而田野打立候、中途まて梶原方御酒持せ被來候、賞翫共申候也、此晩高之牟礼へ着候て留候、

一六日、早朝打立、未計敷祢へ着候、休世齋(敷祢賴賀)へ御礼申候、如恒例酒肴なと持せ候、御会尺も如例、種ゝ之儀也、三郎五郎(敷祢賴元)殿も來儀候而会尺也、酒肴なと預候、敷祢掃部(賴長)兵衛尉殿も被來合候て、閑談共也、此晩小船にて、拙者計白濱へ押渡候、彼処にて會尺如賀例、

一七日、敷祢より可來衆相待、心靜ニ白濱へ罷居候、百性種ゝ会尺申候、家景之者共、思ゝニ酒肴等持來候也、

從夫かこ嶋へ着船候、加治木假屋ニ宿仕候、聽而平田(光宗)濃州へ使を以申候、只今參上申候、今日吉日にて候間、罷出度存候、今日濃州御椀飯に候条、其前御執成賴存由申候、可罷出之通御返事也、聽而罷出候、支度袴肩衣也、如恆例御太刀・百疋進上申候、太刀持參申候、町田五郎(忠綱)太郎殿奏者也、御三献如舊例、御盃被下候也、其後御椀飯參候、御座躰主居　太守(義久)樣、御次秘書(忠長)・濃州、客居　武庫樣、御次頴娃左馬助(久虎)・拙者也、種々御肴參候て御酒宴也、伊集院之慶賀、如恆例參候而仕候、春御酌ニ參候、　御兩殿(義久・義弘)御肩衣被下候、祇候衆も召出之御酒給候て、聽而肩衣脫候也、澁屋大夫參候て乱舞也、　武庫樣御内之衆も一兩人被指出、御酒被給候也、△

120

「義久公御譜中」

天正十四年丙戌正月廿二日、請豊後入御闔於護摩所、大乘院法印役焉、然則肥後・日向入於兩口、而有利矣、

天正十四年正月廿三日、羽柴殿去年任關白舊冬賜奉書、今日裁返書、充細川兵部大輔入道、書日付於正月十一日也、

天正十四年二月五日、從高知尾甲斐長門入道宗攝、至宮崎寄使書於上井伊勢守曰、高森入道依異心、新納武藏守已下騎步馳向彼館、即時誅戮、宗攝亦發向其地、高知尾之士獲高森入道之首矣、其外敵人切捨、故不分明、然而一處敵首殆乎二百許、實見之之旨談話矣、

關白秀吉公賜去年十月二日之書、未能返翰裁披露狀、充細川兵部大輔入道殿、如左、

抑依令天下一統靜謐云々、「左ニ從前写載置故略」

121

「見上井日記有之」

抑依令天下一統靜謐、從関白殿九州之鉾楯可停止之段、殊更綸言相加候欤、則属　勅命候、隨而ハ先年以信長公才覺、大御所樣被仰刷、豊薩和平之姿罷成候以來、聊無隔心之處、從豊者度々愀變雖有之、守右一諾之筋、于今無干戈之催候、然処、頃到向肥之國堺、數ヶ所被致破壞候、如此弥於被執懸者、自今以後之儀等難測候、必竟可及相應之防戰候哉、少も不可爲當邦之改易候、以此旨被成御用捨、宜預御披露候、恐々謹言、

正月十一日　　義久在判

細川兵部入道殿

「此書、上井日記參照ノ爲專ニ載置也」

使鎌田刑部左衛門尉、赴京師巨細可述渠之早舌也、「本マヽ」

122

「義久公御譜中」

天正十四年二月十六日、自豊後入田宗和至宮崎差使節、從高知尾田那邊主水者爲指南來、謂上井伊勢守曰、志賀道益者道輝之息也、盗取大友左兵衛尉義統所仕之一臺、被勘氣籠居稱菅迫之地、由是與入田氏堅一味約、當春中被發向軍衆者、豊後州容易可入手裏、且復圖繪豊後州中來、說彼此之巨細也、

天正十四年三月晦日、先是肥筑之諸士早速達可出質人之旨、秋月氏・龍造寺氏無違意矣、唯筑紫氏匪啻不出質、報與同豊後之旨、義久聞之深憤、速欲退治之廻計策也、

123

「上井覚兼日記」

一八日、▽早朝　武庫樣御假屋へ參候、御太刀・百疋進上申候、致持參候、本田源右衛門尉(親商)殿奏者也、御三献被下候、如恆候、△昨日より御談合始にて候、今日も同前、御談合衆河上上州(久隅)・秘書・忠棟(伊集院)・久倍(町田)・親貞(本田)・光宗(平田)・拙者・鎌田出雲守、御使伊地知伯耆守(重秀)・税所新(篤和)介、豊後へ御弓箭之御談合專一也、▽平田新四郎(増宗)殿御礼申候、如恆例酒肴持せ候也、

一九日、出仕如常、忠棟へ　武庫樣御光儀被成、御三献如常、忠棟御太刀・百疋進上候、持參也、さて御座躰主居　武庫樣、御次頸娃左馬助・忠棟、客居秘書・拙者・有川雅樂助(伊勢貞真)、主居之末座ニ澁屋大夫參候、終日御酒宴也、折肴にて御樽御持せ也、已後女中懸御目之時賞翫也、我〻始而忠棟へ參し候間、如恆例籠肴にて瓶子持せ候也、

一十日、早旦、有川長門守(伊勢貞末)茶湯ニ被呼候、秘書・拙者也、從夫直ニ出仕申候、　御料樣へ御祝言、伊地知右京亮(重則)にて申上候、如恆例御酒并肴進上申候、聽而奥へ被召寄、御見參被成、御三献御寄合被成候、持參之御酒參候時、御酌申候、即又　御酌にて御盃頂候也、從夫女房衆又ハ納所衆、被在合候衆へ、拙者酌にて候也、此日武庫樣へ御寄合にて候、御座躰主居　太守樣、御次川上上州・忠棟・光宗・親貞、客居　武庫樣・秘書・拙者・澁屋大夫也、御めし過候へハ、定舞臺にて御能也、式三番如恆、翁澁屋与吉也、高砂・田村・二人靜・盛久・鞍馬天狗也、御能合ニ狂言之時、御點心度〻ニ參候而御酒なと也、從　御兩殿折紙、大夫へ被下候、

各千疋宛也、今春又次郎大皷仕候、是へ　太守様より
千疋被下候也、薄暮まて御酒宴也、△
一十一日、出仕如常、御吉書如舊例、御座躰主居　御座
候、御次忠棟・光宗・親貞、客居秘書・久倍・拙者也、
御右筆八木越後守(昌信)也、文言、一、神社・仏閣造営之事、
一、可専勸農事、一、國〻年貢徴納之事、(徴)聽而於御前
筆者被讀上候也、先御判被成候を、筆者硯之蓋ニ請持
廻、御座之衆、三度頂戴申候、硯・紙ハ連歌文臺ニ被
請、御右筆持參候て、やかて一重ニ被書候、上卷ニハ、
吉書ト二字計被書候也、其後御右筆も御座ニ被參候而、
御加三献也、御座衆ニ百疋宛被下候、各拜領申候而已
後、退出申候也、此日御梡飯從永吉參候、如御賀例、
▽此日御假屋へ罷出候、秘書御供申候也、即御見參被
成、三献御寄合被成候、兩人共ニ持參之御酒御酌申候、
又御酌にて御酒給候也、此日も終日御談合共候也、
一十二日、藥師如來へ別而看經仕候、此朝御鎧之餅參候、
御座躰主居　太守様、御次秘書・光宗・親貞、客居川
上上州・忠棟・拙者也、御酒一篇參候也、從夫寄合中
武庫様御宿へ祗候可申之由兼而被仰候間、其分候、御
座躰主居　武庫様・忠棟・親貞・伊地知越中守(重隆)、客居
秘書・光宗・拙者・伊地知伯嗜守(者)也、種〻御会尺共也、
此日も於殿中御談合也、
一十三日、出仕如常、　武庫様御宿へ、　太守様御光儀
候、御三献等如恆候、已後御座躰主居　太守様、御次
金吾公(歳久)・喜入攝州(季久)・忠棟・拙者、客居　武庫様・秘書
・本田紀伊守(董親)・澁屋大夫、種〻御会尺共也、深行(更)まて
御酒宴也、澁屋同心之藝者各參候、今春又次郎も參候、
種〻乱舞也、皆銘〻ニ祝物等被下候也、御姫參候て御
酌共申候、點心之時御座ニ參候也、澁屋ハ不罷居候、
一十四日、福昌寺其外爰彼へ御礼共申候也、
一十五日、出仕如常、從殿中罷歸候砌、親貞可參由候間、
其分候、秘書御供申候、茶湯之座にて会尺也、手前親
貞被成候、此日　武庫様へ祗候申候、良久御物語共也、
拙者悴者豊後へ耳聞ニ遣候、歸來候間、其趣共申上候
也、此日秘書拙宿へ御出候、幸若在合候て、一曲共申
候、此日、明日御連歌之一順共仕候也、
一十六日、御連歌也、御座躰主居　太守様、御次金吾・
喜入攝州・珠長(高城)・宗運(瀧聞)・可丹(岩永)、客居　武庫様、御次川
上上州・秘書・忠棟・拙者・永純也、御連歌過候て、
澁屋与吉・一王大夫(河野通貞)參候、種〻御酒宴共也、此日南林

寺客殿作釿立被成候、拙者可参之由住持承候へ共、御連歌ニ可参由候て、無其儀候、祝等拙者申付調させ候、大工福昌寺之大工也、二条居瓶子・銚子提等如常、其外折席(席)・折敷・土器・米・銭なと少ゝ入候、三百疋にて候、伊地知伯州・白濱防州(重政)使衆にて候間、拙者代として参せ候也、拙者就御連歌不用之儀、同名玄番助にて申候、彼者も座へ被召出候つる由申候也、

一十七日、終日御談合也、

一十八日、払曉、觀音へ看經申候、早旦、金吾御宿へ各被召寄候、座躰主居金吾・忠棟・光宗・親貞・伊地知備前守、客居秘書・久倍・拙者・周琳(中江意温斎)・三原下總守(重隆)也、種ゝ御会尺共也、從夫各出仕申候て、直ニ終日御談合也、

一十九日、御談合遲延候、笑止之由　上意候間、早朝調候て、終日談合也、伊集院野州(久治)昨日参着候条、御談合ニ指出也、

一廿日、出仕如常、種ゝ御談合共也、山田越前守昨日越着候、御談合被承候也、出仕歸ニ、忠棟茶湯会尺之由候間参候、秘書御供申候、和泉之境之者にて候、宗除与申、紅梅之未開之朶一立候、座敷之模樣常ニ相替、面白さうに見え候、手前忠棟被成候、松尾与四郎宮仕(給)にて候、後段ニ、又御酒にて候、宗除も指出候、種ゝ戯言なとにて御酒也、秘書御愛酒之故候欤、吾等ハ下戸にて候、從夫各御談合ニ罷出候也、　御兩殿茂御對面処ニ御座候て、御談合之趣被聞召候、評定所へ南蛮御酒被下、各賜候也、

一廿一日、出仕如常、宮崎衆中、御酒進上被仕候、樽十・丸猪・水鳥二・鯛一懸、如此候、各召出之御酒被給候也、金吾明日御歸之由候、然者いつも御礼被仰候、秘書御代として、御使ニ金吾御宿へ御参也、此日町田出羽守殿在所へ御光儀也、御三献等如常、瀬戸口安房介、靏御前にて包(庖)丁申候、各祗候申候て見申候、其後御座躰主居　太守樣、御次金吾・忠棟・久倍、客居武庫樣、御次秘書・拙者也、終日御酒宴也、澁屋大夫一類参候て乱舞共也、羽州御酌之時、馬進上候、夜入候て御歸被成、△

一廿二日、早朝出仕如常、於護广所、談義所御圖御申被成候、樣子、肥後口・日向口兩口より豊州へ召懸候する哉、又日州口へ諸軍衆被着合、一方より可被執入候哉、兩条之御神慮伺被成、只兩口より被懸召候て可然

由之御圖、をり候也、從夫　御兩殿被聞召、各目出由也、日州口へハ　太守樣御進發相定候、肥州口へハ武庫樣御發足相定候、日州へハ本田野州(親貞)・平田濃州・拙者、肥後口へハ秘書・忠棟・町田出羽守御供之由被仰出候、其外諸軍衆兩口之衆盛被成候、肥州表之事者、秋月(種実)・筑紫(広門)・龍造寺(政家)、此外國衆之質人、銘〻ニ被召捕候ハてハ御無用心候、然者忠棟早〻肥州へ出國之由、被仰出候也、此日於拙宿日州口衆盛、其外御行之談合申候、其衆、伊集院下野守・上原長門守(尚近)・山田越前守・鎌田筑前守(政心)・同名出雲守・拙者、御右筆長谷場筑後(純辰)守也、談合過候て、深更迄酒宴也、▽此日　武庫樣御歸鞍被成候、拙宿へ御路次支度にて、御礼被成候、御太刀・百疋被下候、拜領申候也、軈而中途まて御供申候、△

一廿三日、出仕如常、此日も終日御談合也、旧冬羽柴殿(秀吉)より書狀到來候、并細川兵部太輔(藤孝)入道玄旨・當時之茶湯者宗易(千)、兩所よりも副狀あり、羽筑去年関白ニ被任候、然者書狀之趣、就　勅諚染筆候、仍関東不殘奥州果迄、被任　綸命、天下靜謐之處、九州事、于今鉾楯之儀、不可然候条、國郡境目相論、互存分之儀被聞召

屆、追而可被　仰出候、先敵味方共双方、可相止弓箭旨　叡慮候、可被得其意儀尤候、自然不被專此旨候者、急度可被成御成敗候之間、此返答、各爲ニ者一大事之儀候、有分別可有言上候也、

拾月二日　　判計也、名乘等ナシ、

當ところ、嶋津殿(義久)、といかにも早〻書候、此御返書、関白殿へにて候へハ、勿論其通に相應之可爲御請候、乍去羽柴事ハ、寔〻無由來仁と世上沙汰候、當家之事者、賴朝已來無愀變御家之事候、然ニ羽柴へ関白殿嘱之返書ハ、笑止之由共候、又如右之無故仁ニ関白を御免之事、只　綸言之輕にてこそ候へ、何と樣に被敬候ても苦かるましき由申人も候、然者取〳〵也、所詮細川兵部入道殿へ、付狀ニ被認候者可然之由出合候て如其候、御報之案、抑依令天下一統靜謐、從関白殿九州之鉾楯可停止之段、殊更　綸言相加候欤、卽属　勅命候、隨而先年以信長公才覚、　大御所樣(近衛前久)被仰刷、豊薩和平之姿罷成候已來、聊無隔心之処、從豊者度〻愀變雖有之、守右一諾之筋、于今無干戈之催候、然處、頃到向肥之國境、數ヶ所被致破塘候、如此弥於被執懸者、自今已後之儀等難測候、必畢竟可及相應之防戰候哉、少

茂不可爲當邦之改易候、以此旨被成御用捨、宜預御披露候、恐〻謹言、

正月十一日　　義久御判

細川兵部入道殿

如此被認候也、玄旨・宗易之副狀之返案、大略右之趣也、鎌田刑部左衞門尉指登被成候間、彼使巨細可申之由共也、▽此晩忠棟月待被成候、參候へ、旧冬夢想之候侭、一折興行之由承候間、其分候、座躰客居秘書・珠長・澁屋大夫・宗運・木脇若狹守(祐充)・河俣甲斐介、主居奈良之阿弥陀院・拙者・忠棟・喜入大炊助(久正)・瀧聞九郎右衞門尉也、輙五十韻成就也、終夜大雨にて候間、鳥鳴候へハ各歸候也、

一廿四日、払曉地藏菩薩へ看經別而申候、從夫出仕如常、日州口衆盛なと成就申、日記を以　上覽被成候、此日談合衆各歸宅也、拙者も向嶋白濱まて渡海申候、

一廿五日、早朝書狀認、南林寺へ塩俵廿、爲御合力施入申候也、從夫出船申候て敷祢へ着候、從休世頻可參由候て、兩度使預候へ共、就御急用急候由申候、然者休世中途まて御酒持せ、御出合被成候、種〻之儀也、それより帶之野まて行候而留候、亭主御酒振舞、種〻会尺也、

一廿六日、早旦打立、小去川まて着候、衆中二三人同道也、

一廿七日、宮崎へ歸着候、

一廿八日、御崎寺講讀ニ御座候、種〻會尺共申候也、逆瀨河豊前守來候、先日、柏原周防介同心ニ高知尾へ遣候、彼堺之物語共也、肥後三船津志田、拙者當時曖候、それより出家衆一兩人被來候、次ニ新納武州(忠元)書狀預候趣、先日彼手之衆、野尻方館へ被指越候処ニ、難儀之樣に候、然ニ能時分、柏周・逆豊、高知尾へ拙者遣候、其衆之見次故、無何事、大口衆如三船被歸候礼也、高森方可打果爲、近〻可被打立之由共也、此日終日普請見申候也、此晩風呂燒候て入候、衆中同心申候也、

一廿九日、佐土原へ參候、中書疱瘡御煩被成候、此間留守にて、御無沙汰申候由申候也、卽御休被成候処へ被召寄、御見參候、御酒也、歸さニ、鎌源宿所へ被寄候、深行まて酒宴也、△

124

「上井日記」

▽貳月

一朔日、衆中各礼ニ被來候、見參申候、此日普請させ候て見申候、此晩恭安(上井薫兼)御越被成候、御三献如例、御酒御持せ候、賞翫申候也、△

一二日、▽恭安御会尺申候、新名爪長福寺酒肴持來候、即見參申候也、從東郷殿(重虎)預御使者候、樽一荷・折肴也、石塚但馬守与申人也、即見參仕、めし寄合候而、種々会尺申候、持せの御酒、衆中なと寄合、賞翫申候、使者へ木綿五進之候、中間へ同二遣候也、△從中書(家久)高崎越前守御遣候、此度御衆盛ニ、東郷衆肥後口と聞得候、此口ニ鎌殿御座候間、可被召烈之由候、尤ニ令存候間、かこしまへ早々御申可目出之由、御返事申候也、▽此晩恭安御会尺ニ、若衆中呼候て、鞠蹴させ候て懸御目候、從夫各へ御酒振舞、深行まて酒宴也、本田越後守殿酒肴持せ被來候、其衆同前ニ振舞候也、

一三日、毘沙門へ別而讀經申候、從又太郎(島津忠辰)殿、御慶書并五明被下候、想應ニ御返書申候、此日大雨にて、恭安御留被成候、終日酒宴也、

一四日、衆中なと各此方へ被來候て、恭安之御会尺也、それ過候て、軈而御歸被成、此日上井次郎(秀秋)左衛門尉殿より、年頭之使書到來候、酒肴共預候也、飯野へ二三日前海鹿進上申候、御祝着之御返事等到來候也、從清武、冨松殿使ニ被來候、御弓箭之樣子、又御楯之事申付候、左樣之儀ニ付而也、相應之返事申候也、從福嶋縣堺見廻之衆とて、兩人被來候、即見參申候、伊野州(伊集院久治)意趣等承候也、此晩滿願寺御登被成、御酒參会申候也、△

一五日、▽縣堺見儀之衆打立せ候、從當所敷祢越中守・勝目但馬守申付遣候、吾等悴者、鳴海舍人助・梶山佐藤兩人相付候也、從飫肥兩人被來候、上原長州(尚近)傳言共候、委承候て、彼衆へ御酒寄合、軈而可被打立由申候也、△從高知尾、甲斐長門入道宗攝処より使書遣候、即使僧へ見參申候、山臥也、書面者、高森入道惡心故、新武州(新納忠元)を始として、各彼館へ馳向、即時ニ討伐被成候、宗攝も罷出候由也、殊高森入道、高知尾衆討取由也、敵ハ切捨にて候間、數不分明候、併一処ニ頸二百計見申たる由、使僧物語也、次ニ豊後之志賀道輝(親守)、頃勘氣にて、迦住城遠方へ隱住候、然者入田(義実)方同前にて、無吳儀由共也、▽從爰彼、年頭之礼衆多々候、皆々酒肴持來也、

一六日、鹿兒嶋・飯野へ書狀を以、宗攝処より被申候段申上候、同右之書狀、爲御披見持せ申候、飯野へハ写

候て進上申候、滿願寺へ御礼ニ参候、種〻御会尺也、財部衆中御酒被持來候、賞翫共申候也、從吉利(忠澄)殿年頭使者預候、鹿兒嶋へ参上候て、頃歸被成候、尤自身御出可有を、遮而三城へ御急用之儀ニ付、先〻彼方のことく御座候、蒐角御用之子細候間、近日中此方へ越有へき由也、并寄合中より書狀預候、持せ也、即披見申候、一ケ条御日執之儀也、此日東郷殿へ御無音申候条、佐土原へ、同名右衛門尉(上井兼成)を以申入候、樽二荷・折肴進覽候、

一七日、彼岸入候間、種〻祈念共申候、同名右衛門尉、從さと原罷歸候、東郷殿御見参候て、種〻御丁寧之儀共にて候、夕ハ酩酊申、佐土原へ留候とて歸來候也、此日竹篠本坊へ御礼ニ参候、御酒持せ候、種〻御会尺如恆例、從夫西方院へ参候、先三献如例、風呂燒せられ候間、心靜ニ入申候、柏原周防介(有閑)・野村大炊兵衛尉(惠綱)同心仕候、風呂よりあかり候へハ、拙者持参之酒賞翫可有之由候之条、又参候、めし御振舞種〻之儀也、それ過候て、大門坊へ参候、三献・祝物等如恆例、同前、餘大雨にて候但、彼坊へ留候、隣坊之衆なと、酒肴被持來候而、香なと被聞候て終夜慰にて候、

一八日、從早朝、一山衆、於藥師宝前勤行共也、大門坊種振舞にて候、罷歸刻、從曾井、野村宮内少輔酒肴被持來候て、賞翫共申候、從夫驕而罷歸候也、

一九日、早朝、柏田口普請之下知共申付置、從夫紫波洲崎へと打立候、先木花へ参候て御礼申候、三献等如例、拙者も御酒持せ候也、從夫御諏防(訪)へ参詣申候、参錢等如常、其後御伊勢へ参宮仕候、奉弊(幣)等如恆、参錢同前、彼岸にて候間、大宮司籠居候、大宮司処にて三献如例、其後種〻会尺共申候也、從夫暮候間、紫波洲崎まてハ不参得候て、内山ニ留候也、

一十日、早朝、恭安へ参候、御三献如常、種〻御会尺也、恆例之規式共也、拙者も御酒持せ申候、御賞翫共也、諸人酒肴なと持來候也、加治木駿河守・同名伊与介・安樂阿波介・上井玄番助処へ礼申候、各如旧例会尺申候也、

一十一日、誕生日にて候間、別而看經申候、御崎觀音へ参候、参錢等如例、其後御崎寺へ参候、三献等旧式のことし、時御振舞候、拙者も御酒持せ候、賞翫共也、點心之間ニ碁打せ候て、見申慰候、大雨にて候間、終日閑談候、此晩恭安にて又御会尺也、新納武州(忠元)より書

狀到來候、佳札并肥州津志田名之內ニ野心人候、然者其成敗候、尤拙者扱之地候間、此方へ案內承、如此たるへきを、遠方之条無其儀候、野心人之事者、不被指延事候間、楚忽之樣に候、就夫檢断者なと候老中扱之所ハ不限是候、如法度早ゝ格護可然之由候也、慇懃之承事、祝着申候、五日已前、悴者兩人其表へ指越候、彼者共ニ、宜樣ニ御內談肝要之由申候也、又かこしまより、曾井傳ニ御狀到來候、先日各祗候被成、御評定事澄候、今少御談合可有子細候、鎌雲州(鎌田政近)同心を以、來十八日必參着之由也、

一十二日、藥師へ別而祈念申候、從吉利殿書狀預候、今度御發足之刻、海上　上覽可被成之由候、然者、　御座船之水主五十人程、美ゝ・細嶋へ可申付之由也、并塩見へ御宿之由候、就夫普請多ゝ候、田代・坪屋之人勢申付、合力賴被成之由也、卽俣江加賀守・米良淡路守へ書狀を以、右之段申渡候也、此日圓福寺へ御礼ニ參候、三献等如例、風呂燒せられ候侭、入候て慰候、其後非時御振舞候、種ゝ御会尺也、其より如宮崎罷歸候、暮候間、わち川原谷口和泉拯処へ留候、

一十三日、谷口和泉拯種ゝ会尺申候、從夫沙汰寺へ礼申候、会尺等如舊例、宮崎へ罷歸候、衆中各普請ニ被出候間、直ニ普請見申候、此晚報恩寺ニ被寄候、種ゝ会尺也、此日敷祢越中守・勝目但馬守悴者兩人、堺目見廻候て被歸候、梓越之樣躰共物語也、委承候、

一十四日、金剛寺へ御礼ニ參候、種ゝ会尺也、風呂燒せられ候間、入候て慰候、伊集院廣濟寺雪岑(津興)和尙、肥州合志之安國寺被給、當年試筆之詩なと見せなされ候、不及言語候、色ゝ閑談にて、暮候て罷歸候、

一十五日、無余義日にて候間、法花讀誦仕候、寔、觀彼久遠猶如今日、之樣ニ存計候、

一十六日、鹿兒嶋へ參上之爲打立、麓迄下候刻、從高知尾使者到來之由候間、中村內藏助処ニ罷居、樣躰承候、入田宗和(義夫)より使者、堀名字之方被來候、其案內者ニ、高知尾役人衆より、田那邊主水正被指添候、趣者、志賀道益(親教)と申ハ、道輝之息にて候、彼人頃義統(大友)被召仕候一之對を盗取、格護被申候、就夫慮外之由候て勘氣候間、菅迫と云処ニ籠居之躰候、然者入田方与一味之由候、當春中御行於有之者、豊後之事可屬御案利事、程有間敷由也、不限右之仁、國衆儀ゝ區ゝ罷成、無正躰之由也、卽使者ニ見參申、御酒寄合候、閑談共也、豊

國中繪圖写被持來、爰彼之爲躰なと、委口能也、拙者書狀道益へ遣候て可然之由、兩使被申候条、卽認遣候也、其趣、雖未申馴候、令啓候、仍去年已來、入田宗和、到當邦被仰合子細共候、然処頃御一致之段承覃、肝心令存候、各如御存知、豊薩和平之事、京都御媒介故候、然ニ旧冬以降、從大友殿(義統)對當家違目歷然候、殊更於縣表度〻執懸被成候、此上者、返答之防戰不可有異儀候、其節御入魂所仰候由申候也、高知尾役人衆之返答、相應申候、馬原右近(重昌)大夫より、今春之慶書并鶯舌預候、是も相應ニ返書仕候、入田方使堀方へ、織筋一遣候、田那邊方へ、喉輪一遣候也、從夫兩使者被歸候間、拙者も打立、田野にて長藏坊処へ留候、亭主種〻会尺共也、

一十七日、早朝田野を打立候、殊之外雨風にて、路次難儀候間、漸都之城へ留候、本之原町ニ宿仕候也、

一十八日、早旦打立、敷祢(敷祢頼賀)へ着候、別當所へ休世下被成、種〻會尺共也、白濱より迎船來候間、軺而乘船候、順風無之之故、向嶋へ留候、△

一十九日、一番鳥ニ白濱より出船仕候而、軺而鹿兒嶋へ着船候て、出仕如常候、則　御見參也、從夫御談合候、其衆、河上上州(久隆)・町田羽州(久倍)・平田濃州(光宗)・本田野州(親貞)・伊集院野州・上原長州・鎌田筑州(政心)・川駿州(川田義朗)・稻留新介(長辰)・拙者也、御使本田刑部少輔(正親)・伊地知伯嗜(重秀)守也、御意趣、先日御談合事澄、各御暇被申候、併今少御談合与被思食候、其故者、肥筑表の質人之事、輙被指出候ハ、可然候、若〻遲〻候ハ、、左樣之儀被聞召合候ハ、、御行之事、來月中にハ難成候欤、四月ニ及候てハ、雨之時分候、肥後口・日向口共ニ大河多〻候之由候間、雨中にハ事成かたく候、世上取沙汰も、其分之由被聞食及候間、初秋之比ニ被指延候てハ如何候する哉、川田駿河守被參候間、御日取等之儀存知之前候、蒐角各談合次第之由也、各申上候趣、乍勿論　上意尤奉存候、先日御談合之時分も、如右存寄衆も候つれ共、御闘を御伺之由候つる間、儻者、是非ニ及ぬ儀と各存居候、爰を指延候ても不苦被　思食候者、上意之ことく可目出之由也、又〻　上意ニ、さてハ各如　上意被存候欤、御闘之事者、春ハ夏ニ延、夏ハ秋ニ延候する通之儀者、御違背にハ罷成ましく候、蒐角來秋ハ、必可　思召立御行候条、不苦之由候、さてハ　上意之外有間敷由、各被申候、此度の事も、肥後表未治候条、如右御心遣

共候間、此夏中、肥後之諸地頭・移衆なと、被定候て肝要由也、入田方より使并豊國中無正躰之樣子共申上候、又縣表堺目等見せ申たる樣躰共委申上候、御行可指延之由各存分候間、何事も不及力候、拙者ハ此節御行可然物をと、一人存計候、無念〻〻、

一▽廿日、御遊山ニ昨夕より谷山へ御公儀之由候間、出仕不仕候、早旦より念仏申候、城殿(一要)・内空閑殿(鎮房)、年頭之使書預候、白楮三十帖宛預候、三池殿(親基)よりも佳札并織筋一預候、各相應ニ返礼之佳札遣候也、此日五嶋宇久大和守(純玄)殿、去年御勝利之御祝言被申上候、到吾〻茂使書預候、并太刀一腰・百疋・魚預候也、使者前より、中紙十帖くれられ候、相應之返書申候也、今朝本田野州へ、談合ニ被參候衆会尺被成候、座躰客居伊野州・鎌筑・稲新、主居拙者・上原長州・親貞・伊伯州也、種〻之御会尺也、從夫各同心ニ、拙宿にて終日物語共候、碁なとにて候、各へ會尺申候、酒宴共也、△

一廿一日、▽御留守之間、出仕不申候、從平田殿各可參由候て、其分候、座躰主居伊野州・平濃州・鎌筑州・長谷場筑後守(純辰)、客居拙者・上長州・白濱防州(重政)・稲新也、種〻會尺被成候、△此日御留守にて候へ共、被仰置条數候間、於殿中終日御談合共也、豊後入之儀、當春中被指延候ハヽ、肥後表諸地頭定、又者移衆等之事、菱刈邊ニ　御兩殿(義久・義弘)御出合被成、御談合肝要之由也、御配當等茂、今度之事ハ、細〻ニ候ハす共、其地頭〳〵に打御任せ候樣ニ候て、急ニ肥州靜謐ニ罷成候ハてハ可惡之通、各被申候也、▽　御歸殿次第、先〻右之条、可有　上聽ニ定候也、△

一▽廿二日、伊野州・鎌筑・同雲・上長・稲新・白防同心にて、南林寺へ參候て、御作事共見申候、并諸篇細談申候也、我〻御酒進入候、種〻御会尺共也、終日酒宴にて候、此晩從谷山　御歸鞍也、△

一廿三日、▽出仕如常、△御留守中談合之趣、伊伯・本刑被申上候、　御同前ニ被　思食由也、彼是伊野州、肥後表へ御使ニ可被罷登之由、相定候、▽此日ハ月待之爲精進にて候間、終日讀經等申候、月待候由被聞せ候間、語ニとて、本田弥六(親正)殿・伊野州・長谷場殿被來候間、終夜閑談申候也、此日御狩之鹿一丸被下候也、△

一廿四日、▽看經等如常、出仕申候て、南林寺作釘、所〻へ盛候て賦申候、△談合衆各御暇被下候、菱刈表へ御光儀之刻者、追而可被仰渡候、其節各御供可仕之由

125

也、未刻計出船申候、▽平田新四郎(増宗)・長谷場殿・大山肥前守(綱秀)なと、船本まて御酒なと被持せ、送にて候、然間舟ニ乗せ申、酒宴共也、此夜白濱へ留候、亭主種〻会尺申候、此日肝付彈正(兼寛)忠殿より酒肴持せ、使者預候也、

一廿五日、太郎三郎種〻会尺申候、從夫出船申候て、濱市へ着岸候、桑幡殿へ礼申候、会尺等如恒例、種〻之儀也、

一廿六日、親類衆へ礼共申候、從夫打立候、大圓坊酒被持來候て、中途迄送也、上井之白坂にて、厚地六弥太酒肴持出、会尺申候、今晩財部上井之門、愚領にて候間留候、

一廿七日、百性種〻會尺仕候、此晩さり川へ着候也、

一廿八日、狩ニ登候、福永宮内少輔殿、狩人多〻被召烈馳走也、猪・鹿二取候、此晩拙宿にて福永殿会尺申候也、

一廿九日、早朝打立候、△

圖書頭　　本田下野守

伊集院右衛門太夫　　忠長

星野伯耆殿

今歳之御吉兆多幸〻〻、仍連〻無音押移所存之外候、然ハ去年豊州衆到坂東寺在陣之刻、被属肥前和睦上、早速開陣專一之由申遣候、無吳儀可被任其趣之段、于今致違變、高良山江相支恣之行不及分別候、定而御軍労察存計候、雖然種実・政家一致被仰談、同懐之由、尤頼母敷候、弥無疎隔被成入魂、萬方被廻賢慮、案全肝心候、其謂右兩家當邦幕下之儀候之条、別而可爲御忠貞候、猶委旨期後音之時候、恐〻謹言、

「十三年缺」

正月十九日　　親貞判

忠棟判

忠長判

星野伯耆守殿　御宿所

126

「殉國名藪抄」

天正十四年丙戌

三月二十七日、伊地知藏人重増(豊後の坂梨にて戰死、年四十二、

七月六日、川上左京亮忠堅（筑紫上野介廣門か鷹取城を攻めらる時奮進て戰死、年二十九歳、）鎌田筑前守政心・上野隼人佑忠元（年三十九歳、）脇元城之助（忠隣臣也、）福崎左近（北郷忠虎臣、）

十八日、赤城源助（源太左衛門重賢弟也、筑前岩屋城戰死とあり、廿七日の誤欤、）

廿七日、喜入掃部助久親（高橋紹運か筑前岩屋城を攻らる時力戰して死之、年二十四歳、）伊集院左近將監（或左近允、）伊集院宮内左衛門忠連（或作久景、）伊集院彌左衛門久兼（祢寝重張臣、）白濱源左衛門重葉（加賀守重頼ノ子、）鎌田長門守政基・蓑田弥四郎（八代住人、）矢上太郎五郎（五或作四、）有馬源左衛門・宮原越中守（或爲忠長臣、）宮原伯耆守（忠長臣、）山元助六（同上、）森助七（同上、或作勘七、）宮崎土佐介（同上、）鎌田源左衛門兼政（石打ニ逢死す、）敷根民部少輔（石打ニ逢死す、）長山兵部少輔（石打ニ死す、）野村主水佑（石打ニ死す、自系主税知綱、年廿七とあり、）唐仁原藤七兵衛（石打ニ死す、宮崎の人、）關治部少輔（宮崎の人、）野村左近將監（宮崎の人、）黒江萬介（宮崎の人、）丸田山之丞（上井覚兼臣、）楯持一人（同上、）佐多紀伊介忠辰（年四十三、子孫穆佐郷ニあり、）川野筑後守通泰（年六十一、）藤見長介（清武士、）伊集院作州内二人、遠矢軍兵衛（高城士、）山田越前内衆二人、川崎大膳亮（高山士、）加藤大學助（福嶋の人、）伊東與右衛門（朝久臣、）深見次郎右衛門（同上、）南郷治部少輔忠永・毛利助太郎（采女正養子、）四本彦兵衛忠次（初半九郎、）川島縫殿助（忠虎臣、）星山九左衛門（筑前にて戰死とあり、此に竢考、）村山市助（祢寝重張の家臣にて、伊集院久兼と共戰死、下の五人皆同し、）岩松助安・長谷道壽・税所筑前・霧籠田英金・馬場四郎左衛門・上妻若狭家方（種子嶋氏臣、岩屋城に戰死、已下五人同し、）布施三助・上里肥前・梶原主水・岩元正嘉・岩本强八（以上種子嶋氏臣なり、）

此日前田兵部左衛門尉兼政（飫肥にて戰死とあり、戰場誤欤、）

十月、田中筑前（中書家久臣、豊後にて戰死、）赤坂源七左衛門（利満城にて戰死、）

廿一日、津曲玄蕃頭兼詮（北郷忠虎臣にて、豊後南郡の鴈嶽城を陷されし時戰て死之、）前田彌四郎國實（或前原とも、四或作七、忠虎臣にて同しく戰死、亦）吉田某（南郡に戰死也、）

十一月五日、濱田大炊助（豊後入の時戰死、）

十二日、遠矢信濃守良時（島津忠隣後見として、豊後御陣に従軍、竹田駄原に戰死、年五十二、）

十二月六日、寺師筑後守宗重（豊後歳満にて戰死、年四十一、子孫大口の士也、）

七日、新納勘解由次官忠家（豊後俊光城にて鉄丸に當り死す、所被の甲冑今尚存す、子孫大口にあり、）

八日、本田治部左衛門（戸次城下にて戰死、）

十二日、橋口弥市郎兼元（利満城にて戰死、）

十三日、鬼塚藏之介秀俊（豊後に戰死とあり、）

此年（月日不詳、）志和地治部少輔忠縄・原豊前（以上二人北郷家臣にて、豊後陣に戰死とあり、）皿良善助貞行（大友合戰討死とあり、此時なるへし、）有村隼人（房ケ畑城にて主従十八人戰死、）

以下四人も同しく戰死、都合二十二人戰死とあり、以上大口衆なるへし、）山田右京亮久俊（船川にて戰死、）遠矢信濃良時（長野地頭にて従軍、竹田駄原城にて戰死、）萩原出雲（豊後にて戰死、）萩原源介兼肆（出雲子なり、父子戰死、子孫高岡の士なり、）小島刑部左衛門（豊後房ケ畑に有村隼人忍ひの時戰死とあり、隼人同時なるへし、）上原五郎四郎久治（豊後戰死とあり、竢考、）有川藤七兵衛（貞朝の子也、上注に同し、）

此年冬、古市與三左衛門實政・羽生右衛門能春・岩本大五郎（以上三人皆筑州三重城に於て戰死とあり、皆種子嶋氏臣也、）

「上井日記」

▽天正拾四年三月

一朔日、看經等如常、衆中各被來候、即見參申候、南林寺作釘之本持せ、諸所へ使者にて申渡候、此日海江田へ罷越候、敷祢越中守・柏原周防介（有閑）、其外衆中一兩人同心申候、祖三寺へ參候、種〻會尺也、此夜彼寺ニ留候、

一二日、恭安齋（上井薫兼）狩させられ候間、罷登候、內山鹿藏也、猪・鹿四取候、此晚紫波洲崎へ參候、恭安齋種〻御会尺共也、同心衆へ猪御振舞被成、深行迄（更）酒宴也、田野より行士山本越後（司）拯來候、於田野近日御狩之由候条、其儀尋ニ來候由被申候、是も宮崎衆同前ニ御酒寄合候、

一三日、看經等別而仕候、從恭安齋、桃一枝ニ御歌相添、御酒被下候也、御返事、即時ニ祝言計候、

色深き一えたなれハ三千年に咲や百枝の花とこそみれ　　覚兼

各節日之由申候て、酒肴等持來候、銘〻賞翫申、見參候也、此朝恭安齋、吾〻同心衆御寄合被成候、それ過候て、青嶋へ渡候て、水練させ候て慰候、宮崎より又〻衆中被來候、長野淡路守・勝目但馬守・江田安藝守（兼清）・丸田左近將曹なと也、終日慰候、從曾井使者預候、就南林寺作之儀ニ也、是も青嶋へ被來候間、各同前ニ慰候也、田野行司者來七日・八日、狩たるへき由申聞、歸し候也、此晚恭安齋拙宿へ御座候、衆中なと同前ニ寄合申候、深行迄酒宴也、

一四日、天氣惡候て、然与罷居候、恭安齋にて各〻へ御寄合也、終日碁・將碁にて慰候、此晚安樂阿波介庭にて鞠也、從夫彼所にて種〻会尺共申候、彼宿へ留候て深行迄酒宴也、從田野使者到來候、御狩來七日之由、目出之由也、

一五日、早朝穆佐・飯田・木脇・藏岡・冨吉・曾井・清武・細江・長峯・下之別符・宮崎へ、明後日七日於田野御狩たるへく候、人數馳走候て可被登せ之由、申渡候也、此朝拙宿にて、宮崎衆中達寄合申、從夫狩ニ登候、鹿一取候、罷歸ニ、直ニ、南俊坊庭にて鞠にて候、亭主種〻之會尺共也、深行まて酒宴にて候、

一六日、恭安にて各へ御会尺にて候、從夫衆中各同心申、

田野へ罷越候也、楠原上之門へ宿申候、軈而大寺殿、行司其外山劫(功)者之衆被召烈被來候て、狩談合共申候也、

一七日、狩ニ罷立候、吉利山城守殿(久俊)・福永宮内少輔殿・同備後守、椛山殿(忠助)より御同名衆御立被成候、曾井より衆中各被立候、比志嶋殿(義基)ハ中途迄打立被成候つれ共、指合事候て歸之由也、清武衆中各被立候、田野衆勿論候、宮崎・海江田衆・木脇衆被罷立候、猪・鹿十二三取候、此夜ハ行司処ニ宿申候、吉山城守殿・大寺殿御座候て語也、大寺刑部左衛門尉殿酒肴被持來候、各寄合賞翫仕候、

一八日、如海江田罷歸候、路次續之鹿藏之狩にて候、吉利山城守殿も同道申候、大寺殿柴屋構被成、種〻奔走之会尺也、鹿五六取候、狩人昨日ハ千人程候、今日ハ五百人計也、

一九日、從圓福寺、雨中与申、徒然ニ候らん、風呂燒せられへく候、可參之由候間、其分候、風呂たち候間、衆寮にて閑談共候、其因寺主承事ニ、春雨打眠、是を題にて一首慰ニ可仕之由候間、卽席ニ、任難默止一首仕候、可惜風光三月天　今知不及下愚賢　雨中寄柱依然在　拋擲管城到睡眠　如此物おかしき事共申候、然者、住持茂一首あそはされ候、蘇山寺なとも一首被仕候、如此共候処、熊野長延寺、拙者へ爲御礼御出也、木花寺案内者にて候、風呂よりあかり候時分に候間、卽參会仕候、酒肴被持せ候、各參會賞翫申候、酒宴最中、肝付彈正忠(兼亮)殿より使者預候、當年いまた此方へ無沙汰被成由也、樽一荷并肴種〻送預候、是又能仕合にて候但、卽各參相、賞翫申候也、此日終日圓福寺にて語暮し候、

一十日、恭安齋へ參候、鎌田源左衛門尉(兼政)殿も被越合候、閑談共也、此晩拙宿にて恭安齋御二人・鎌源・神九郎(十郎)殿二人ニ寄合申候也、御酒共被下、深行まて慰候也、

一十一日、恭安齋にて御寄合也、此晩伊東虎殿矢開にて候間、恭安齋御供申、麓へ罷下候、種〻会尺共也、

一十二日、加治木伊与介所にて種〻會尺仕候、恭安も入御也、此日犬山之爲、かいちかふへ行候、御伊勢之大宮司所にて会尺共申候、神護寺酒肴共被持來候、賞翫申候、此夜ハかいちかふへ留候、

一十三日、犬山仕候、猪大小三、犬之食候、山續直ニ九平へ通候、九平弥右衛門尉中途まて酒肴持來候間、述疲懐候也、

一十四日、九平にて狩仕候、麓之狩人皆〻來候間、四百人計候、恭安齋茂爲見物御登被成、猪・鹿五六取候、拙者も一射候、從宮崎唐仁原藤七兵衛尉(秀元)・江田源三郎、狩之由被聞付被來也、此晩常瑠璃寺へ留候、恭安齋も御留也、種〻会尺奔走也、

一十五日、早朝藥師へ堂參仕候、又寺主種〻會尺候処、清武勢田寺酒肴被持せ御座候、參會申、賞翫申候也、從夫如宮崎罷歸候也、此晩罷歸候由候て、若衆達被來候、暮能候侭、此方庭にて鞠也、從菱苅、赤崎縫殿助殿被來候、酒肴・弓被持來候、久無沙汰之由也、并敷祢越州被賴候て、赤崎之事、無余儀一門之事候条、名字許免之由也、先〻承置候通、返答申候也、

一十六日、從福永宮内少輔殿、加治木但馬拯まて使也、穆佐と山堺六ケ敷事共候、萬端可然樣ニ賴之由也、此日吉利山城守殿御無沙汰被成由候て、酒肴被持せ入御候、即懸御目、參會申候、柏原周防介座ニ候也、良久御物語共候、酒宴也、此朝鎌田源左衛門尉殿三城へ被越候、其次井尻(祐貞)伊賀守へ、南林寺作茸板所望之爲、種子嶋へ拙者船遣候、水主之事、細嶋へ申付候也、財部・加江へも水主同申付候也、

一十七日、蓮香民部少輔、子ニ名付候てくれ候へと申候て呼候之間行候、種〻會尺申候也、拙者二人共ニ罷下候也、從稲冨新介(長房)殿使者預候、久無音之由也、并去年十月、於三船返地之坪付認進之候、乍聊尒失却候間、又〻認候て可進事賴之由也、追而調進可申之由、返事申候也、△

一十八日、▽觀音へ別而讀經等仕候、南林寺作ニ付、番匠一人去十二日進之候、慥屆候之由、送夫歸候て申候也、△此日從　近衛殿(信尹)樣、　武庫(義弘)樣へ御家督御相續之爲御祝言、御使者下向候、從佐土原當所へ越着候、関備後守指出、宿元へ曳付候、古川主膳入道宗心と申方にて候、奈古大宮司泉鏡坊へ宿申付候也、拙者へも御書被成下之由候間、軈而拙宿へ申請、御書頂戴仕候、其御書面、態染筆候、抑去秋、　禁裏御近所江堂上衆被遷殿候、家門之儀同前候、然者諸式不如意之儀候条、匠作江差下古川主膳入道候、此節各以馳走助成、可爲祝着候、隨而扇子五本遣之候、猶進藤筑後守(長治)可申越候也、かしこ、

十二月十三日　　在御判

上井伊勢守とのへ　如此也、

從御使者鞦一懸預候、▽座躰客居ニ御使者勿論、主居ニ拙者也、御同心衆と頻ニ申候へ共、無是之由候而、内衆一人被指出候、出座之由申て候へ共、稠御斟酌被成、鴨居より下ニ而食被賜候、深行まて酒宴共也、音曲共被成候、種〻京都之儀共御閑談候也、△從進藤殿書狀預候、其趣、爲御使被差下古川主膳入道条、令啓候、仍御家門御殿、禁裏被移御近所へ候、然者諸事御不如意故難調候、毎度被仰越儀も乍如何、此節之事ニ候之間、被成御助成之樣、御取合賴思召候、別而於御馳走者可爲御祝着由、猶從拙者相心得可申旨候、恐〻謹言、

十二月十三日　　長治在判

上井伊勢守殿

參御宿所

如此也、鳥ノ子切紙也、上書

同前、

羽柴殿(秀吉)當時関白ニ被任候事者、近衛殿大御所(前久)樣之養子として如此之由共、物語被成候也、

一▽十九日、早朝宗心宿へ関備後守遣候、昨日拙宿へ被懸御意候、畏入候、尤早〻參御礼可申候へ共、夕之沈醉于今然〻なく候間、無其儀由申候也、御使者よりも、関備後守まて捻被認、拙者ニ夕馳走之会尺申候由礼承也、此日如眞幸可打立之通承候間、送之馬・人等申付遣候也、御使者宿元へ関備遣候て、拙者可參候へ共之由申、彼方にて會尺申候也、此朝飯野へ有川雅樂助殿(伊勢貞衆)まて、如此御家門樣(近衛信尹)より御使者下着候、御方へ先〻參之由候間、近日中越着可被成候、其御用意肝要之段、書狀にて申候也、綾へも今日宗心其元へ可送進候、明日野尻迄送可有之旨、申渡候也、此日綾まて送申候也、此晩若衆中此方庭にて鞠也、野村(重綱)賀加(加賀)守息酒肴持せ、久無音之由候て被來候、即見參申候也、

一廿日、衾田之大宮司酒肴持來候、即見參候、若衆中磐(盤)之上共にて被遊候、其衆へ御酒寄合也、從佐土原御使候、高崎越前守也、頃於何方欤御談合可有樣ニ聞得候つる、何程にて候哉、時分被聞せ度之由也、次山内三ケ所之衆之所領共之事也、御談合之時分者御用共候間、御使者進上可有候、諸篇御憑之由共也、御使畏入候、如仰頃御談合と定候、併時分從鹿兒嶋御註進と候つる、未其儀候、如何之由存候、山内衆所領之儀、是又御談合之時分校量可申候、就御用其節使御進上候する哉、時分ニ可申入之由、御返事申候也、高崎殿へ私ニ、當

所弓削方下人、長野下總守所へ召留られ候、納得不申由、巨細物語共申候、納得候間、桑波多越後守なとへ談合候て、急度可承由也、次ニ、一昨日從高知尾書狀到來候、入田方(義実)・志賀道擇(親益)兩所之書狀被持せ候、各此方へ無別儀由也、道択ハ神載にて、高知尾役人衆迄、弥別義有間敷旨之書狀也、此由態可申候へ共、能仕合之由申候て、中書(家久)へ申上候也、

一廿一日、吉利山城守殿より使者預候、先日御出候処会尺申候由、礼義也、次藏岡衆中新原方、一兩年已前科之義候、就其所領被召上候、于今浮地にて候、彼者科之通被聞召分、頃如本に候、然者所領之事も被返下候て、可目出之由也、鹿兒嶋にて之御沙汰と聞得候間、彼御方へ被仰理、返給候て可然候、科之通被聞召分之上者、領知之事、別義有ましくと吾〻ハ存由申候也、又一昨日、穆佐と飯田と野崎と云処之相論也、椛山殿(忠助)よりハ、彼野崎と申処ハ、穆佐之高城ニ居候て野崎名字之者、開始候処にて候、彼名字之系圖ニ歴然候、然者むかさの内たるへき由也、飯田よりハ、それハ系圖ニ其分候へ共、穆佐住人之開たる由こそ候へ、穆佐之内とハ無之候、飯田五町ニ付而公役申候事ハ、伊東祐堯已來無吴儀候、弓箭にて爰まて四十年、彼地荒候、其時分迄ハ、慥ニ飯田ニ付候由也、左右方共ニ可落着程ニ者不得承候間、追而寄合中致談合、可爲落着通申候て、兩所之使者歸候、此方使者長野淡路守・関備後守被仕候也、

一廿二日、市來美作守(家守)殿へ、永山兵部少輔にて申候、久無音之由也、次ニ者一兩年前鞍所望申候、輙預候、祝着候、其後菟(角脱カ)無音、背本意候、併在陳まてにて候間、打紛候由申候て、御崎野之駒一疋進之候也、

一廿三日、本田越後守殿被來候、從鹿兒嶋、鷲拙者へ御所望之由被聞付候間、當時所持候鷲可然樣に候間、此方へ持せ之由也、并酒肴預候、佐土原大光寺之塔頭衆長典同心也、彼方よりも樽預候、同前ニ寄合候て賞翫申候、酒宴共也、此日風呂燒せ候て、若衆中へ入申候而慰候、盤之上なと也、此夜月待候間、終夜若衆中被來、種〻遊覽共也、△

一廿四日、▽早朝より、地藏薩捶へ別而看經申候、此晩此方庭にて鞠にて候、鞠過候て各へ御酒寄合候也、△此日平田濃州(光宗)より使預候、平田左馬助(増宗)殿、去廿一日ニ子息(宗次)誕生之由也、目出之由申候、▽此日稲冨新介殿よ

り使預候、去年十月、於三船進之候坪付、失却候間、又〻認候て可進之由候、即野村大炊兵衛尉(豊綱)へ申付、調進候也、かこしまより書狀到來候、近日御能之由候、就夫野村大炊兵衛尉祗候之段也、即申付候、子にて候者疱瘡最中候間、難成由也、

一廿五日、天神へ別而讀經申候、平田殿へ繁昌被成候爲祝言、加治木但馬拯進之候也、此日湯共湯洗させ候て見可申爲、瓜(瓜)生野丶八郎左衛門尉処へ行候、馬共あまた洗せ見申候也、從夫亭主種〻振舞候、盤之上なとにて慰候、根來之牢人寶藏院來候て、碁なと打候て酒宴なと候、此夜沈醉候間、彼所へ留候、庚申にて候条、各起居候、吾〻も乱舞なと、又ハ誹諧・盤之上なとにて終夜慰候、寔ニ寐ぬ夜の理ニ任候也、

一廿六日、早朝より若衆なと碁・將碁にて候つる間、見入候て、日旰まて罷居候、然者又〻種〻会尺共候、殊更財部衆中雨川方、酒肴持來候、此等各へ寄合、賞翫共申候て、又沈醉候而、漸未之末ニ歸宅仕候也、△

一廿七日、▽早旦、鷺合せさせ候て見申候、西俣左近將監酒肴被持來候、各寄合賞翫仕候、△高知尾より飛脚使僧來候、志賀道擇へ、先日入田傳ニ書狀遣候、其返書、入田より高知尾迄被遣候を持來候也、趣者、未通之処書狀進之候、祝着候、弥入田方へ相談以、御當家へ別儀有間敷由也、入田殿よりも書狀到來候趣、志賀殿へ之書狀、即相屆候、其返札被持せ之由也、并當邦へ別儀於弥有間敷由也、道択へハ此方之返札にて候間、不及申候、入田殿へハ返書申候、▽有方之返札慥請取候、又ハ向後可申承事、愀易有ましき由共申候也、△

一廿八日、▽荒神へ別而讀經申候、御崎寺御座候て例講也、左樣之会尺共申候也、△從飯野、有川雅樂助殿書狀預之趣、從忠棟(伊集院)、急度肥州表へ　御出張之由候、然者日州衆茂皆同、如彼表續たるへく候、廿日之逗留之用意候て相待候へ、追而日限巨細者可承之由也、得其心候、爰元遠方ニ候間、必定之時兼日御一左右可待入由、返事申候也、

一▽廿九日、從滿願寺被召候間參候、種〻終日之御会尺也、鞠なとにて候、此朝諸方へ、續之儀用意候て可被相待之段、書狀を以申渡候也、△

一卅日、▽滿願寺申請、祈禱仕候、觀世音經七、三十三卷にて候、經衆七人、法印(玄惠)ハ本尊之法御行被成候也、本尊之布施百疋、其外檀樣如常、終日御会尺申候、酒

宴共也、△此日從忠棟、飫肥傳ニ書狀預候、去廿二日日付之狀也、質人之事、如御談合、肥筑衆へ被仰候、秋月勿論(種実)進上候する由候、龍造寺(政家)も惣役人納冨方可指出由申候、筑紫(廣門)方質人指出間敷通申切、豊後与一味之由申候、然者彼筑紫可被討果儀定候、來月四日・五日、寄ゝ之衆にて彼方退治之事者可輙候、乍去外聞候間、猛勢にて候ハてハに候条、日州衆も續之由候、寄合中ハ高瀨邊迄出馬之通承候也、上原長州(尚近)も書狀被遣候而、如此忠棟より承候、拙者打立之日限被聞候て、同前候する由也、飯野より承候ニ、一左右可相待由候間、拙者ハ其校量申候、又かこしまより書狀到來候も、支度仕相待候て、筑後表之一左右次第、可罷立之由候、彼是拙者ハ飯野之御一左右相待罷居由、返事申候也、此晩又上原長州より、同篇之書狀態預候、同前之返事申候也、▽平田殿より使預候、左馬助殿頃此方へ越可有にて候へ共、續之由候間無其儀候、餘ゝ無沙汰候条、當年祝礼之音信被成由也、△

128

「義弘公御譜中」

天正十四年丙戌三月、　近衛殿下賜使書矣、去歳所受守護職於　義久公之祝詞也、使者古川主膳入道宗心也、宗心語於京師諸事之次有言曰、羽柴筑前守秀吉被任關白、是亦　近衛殿爲猶子及此儀云云、

129

『在官庫』

尚ゝ今度於筑州立者、可被成自身出張候之欤、是又示預可得其心候、

厥後無音之躰、心外之至候、仍頃從忠棟所注進之趣、筑紫進退之事、構逆儀候之条可討果、依談合內端之軍衆、急速雖可差登由候、巨細以税所新介可相達之段、就到來未申付候、儅者可伺　御神慮哉、莵角御存分之通有之侭承候而、可得其心候、將又巣本之儀何分相聞得候之欤、京都へ申登子細候之間、是非以今年者鷹數多見來候之樣、御入魂所希候、彼是爲納得染筆候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「天正十四年」参月廿三日　　義久(花押)

兵庫頭殿　　義久

「義弘公御譜中、正文在大口衆有村安左衛門トアリ」

130 「御文庫三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「裏書」「天正拾四年丙戌卯月六日御使税所新介也」

「上書」「龍造寺政家御神文彼条種ゝ案文従龍造寺到來、彼方之任懇望、被調遣候也」

起請文之事

一對當家龍造寺政家事、可爲無二深重之由、以　神文承上者、爲義久到政家、當末不可有疎儀之事、

一肥前國・同筑後國累年政家格護之地、并一致衆中知行之所、當末不可有相違之事、

付政家一致衆之内、到龍造寺家相違之仁於有之者、任存分可有其沙汰事、

一政家從一致衆中申越儀雖有之、政家於無副狀者、不可許容之事、

右条ゝ於相違者、

「牛王」奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本六十餘州大小神祇、別當國鎮守新田八幡大菩薩　開門正一位、取分鹿兒嶋擁護諏方上下大明神　稲荷　祇薗并勸請諸神九州鎮將彦山三所大權現　天滿大自在天神御部類眷属等神罰冥罰可蒙者也、仍起請如件、

天正十四年卯月六日　　義久(花押)

龍造寺民部大輔殿

131 『諏方氏藏』

雖指義無之候、令啓上候、先以今度者於其表、御懇意段難申謝候、飯野ニ十日餘令滯留候、忠平御懇志之段、不及是非候間、去六日ニ至鹿兒嶋罷越候、是又一段時儀可然候之旨、可御心易候、何樣於此表以面上旁可得尊意候、恐ゝ謹言、

『天正十四年カ』卯月十三日　　宗心(花押)

上井伊(實義)勢守殿　御宿所

古川主膳入道

上井伊勢守殿　御宿所　　宗心

132

「御文庫拾六番箱四巻中」

澁谷大夫勸進能桟敷之盛

天正十四年丙戌卯月從十八日三日

慈照院殿御代、たゝす川原におひて、勸世大夫殿勸進能させられ候、其時之御桟敷之様、廣間六十三間にて候つる躰、以其写如右雖被相定候、爰元田舍之故、芝居卒度可廣之由候て、本間六十三間にて可有之かと出合候、

御

五間

西川　一間　本田藤八
西川　一間　有馬兵部少輔
西川　一間　伊勢貞孝
西川　一間　河内左衛門尉
西川　一間　曽我兵部少輔
西川　一間　佐々木左京大夫
西川　一間　本田弥四郎
西川　一間　本田四郎
西川　一間　新納右衛門佐
西川　一間　本田下野守
西川　一間　佐々宮内少輔
西川　一間　一王大夫
西川　一間　野村備中守
西川　一間　伊地知備前守
西川　一間　白鹿兵庫助
西川　一間　本田信濃守
西川　一間　村田右衛門尉
西川　一間　野村雅左衛門
西川　一間　伊地知縫殿助
西川　一間　大野殿河内守
西川　一間　横田七郎
西川　一間　平田占部
西川　一間　了蔵梅雪
西川　一間　安宅
西川　一間　本多
西川　一間　長谷川
西川　一間　滝川
西川　一間　東福寺
西川　一間　清水寺
西川　一間　東福寺
西川　一間　東福寺

133

「義弘公御譜中」

天正十四年四月六日、伊集院右衛門大夫忠棟從肥後注進曰、隈部但馬守親泰父子野心顯然也、軍衆發向勿猶豫云云、故達上井伊勢守曰、日州士卒速可發向云尓、雖然同十二日、有評議相違、而進發遲引也、

天正十四年四月廿二日、自高知尾至佐土原、以飛札告危急曰、豊後士卒爲同意、欲逼志賀氏・入田氏者實急也、因茲高知尾士卒、赴彼地可增勢、請入日州士卒於高知尾、無恙爲警衛矣、

134

「上井覚兼日記」

▽四月

一朔日、看經等如恆、衆中各出仕候、見參申候也、此日加治木但馬拯かこしまより歸候、平田殿(光宗)より早〻敷祝言申候、祝着之由承候也、

一二日、井尻伊賀守(祐貞)より、同名を以、當年下之梅一遣候、各寄合賞翫共申候也、

一三日、毘沙門へ別而祈念申候、此日終日碁・將碁にて慰候也、△

一四日、從鹿兒嶋、庄內傳ニ御狀預候、先日一左右次第續之由被仰候、頃税所新介(篤和)肥州表より被歸候、筑紫表へ御行可有候、來十日・十一日ニ八城へ着候樣ニ、當國衆有足・無足續之由也、日州衆者、武庫樣(義弘)御供たるへく候条、飯野之日限承合候て可然之由也、聽而飯野へ書狀を以、かこしまより承候通申入候也、

▽一五日、恭安齋(上井薫兼)御二人、鹿兒嶋へ孫持(平田宗次)候祝言とて、御越被成候、御会尺共申候、恭安御会尺之爲、衆中なとあまた呼申候、終日酒宴也、△

一六日、從飯野書狀到來候趣、忠棟(伊集院)より註進候、隈部親泰父子(親安)一味にて、野心之儀顯然候、就夫先日如被仰渡候、日州衆皆同續之由候、飯野衆ハ今日打立之由也、卽御報申候趣、續之儀得其心候、拙者自身罷立候する事ハ、今度ハ難成儀候、菟角使者を下、急度可申上由申候也、諸方江使文にて申候也、此夜飯野へ進上申候飛脚歸來候、同前之趣也、

一七日、▽恭安へ御会尺共申候、△此日御歸被成候、同名右衛門尉(兼成)にて飯野へ申上候、今度御續之儀、御談合不存事候間、何共不取覚候、先當國衆之事、時分与申、日來之續衆より可少存候、兼又拙者事、罷立候するを、いつもの痔病無尓〻候、其上南林寺就造營、拙者大船

近日種子島へ渡海之有增、然者愚領悉之以苦労指遣候条、續衆奔走難成存候、無人數にて肥後迄罷登候する事ハ、拙者ハ不苦候へ共、餘之覚惡かるへく候間、不用可申存候、併　武庫樣御發足、又ハ何条大事之御行等候ハヽ、凉轎なとにても可罷立之由申候也、此日衆中被指揃、續之談合共種〻也、

一▽八日、本師釈迦如來江別而讀經共仕候、此日二堞御歸被成、此日終日續之儀ニ付、從爰彼使なと來候也、

一九日、大門坊酒肴被持來候、雨中にて、盤上なとにて若衆中慰候処、如此候間、各寄合賞翫申候、

一十日、續衆可被打立覚悟之処、洪水故難成候て、被留候、此日同名右衛門尉從飯野罷歸候、御返事、就續之儀、態使進上申候、御祝着候、拙者事痔病散〻候欤、不及力儀候、然与罷居、涯分養性可申之由也、

一十一日、續ニ立候衆、暇乞とて各被來候、御酒寄合候也、敷祢越中守被立候間、飯野へ祗候被申候て、當病故此度拙者立之儀御指置被成由候、忝之通御申候へ、又忠棟へも、此由、并愚弟神(上井)九郎代として立申候、諸篇賴存由申候也、鎌(篠田政近)雲州より使預候趣、從高知尾書狀、此方江被遣候飛脚足痛候侭、急用にて欤候ハん、持せ預由也、雲州への書狀も、爲披見とてもたせ也、志賀(親益)・入田(義実)御當方へ被申入候事、無紛之故、一國衆同意を以、近〻可抽談合相語候、然者兩所より見次賴之由候、先以高知尾にて番衆指遣候ハヽ、別而之加勢たるへき由也、即返書可申候へ共、中書(家久)へ卒度得御意、返事可仕候、然者飛脚其方へ被留候て可然之由、雲州へ申候也、△

一十二日、▽藥師如來へ別而看經共申候、△此日佐土原へ柏原周防介(有閑)にて、高知尾之返事共、如何申候て可然候する欤之由、伺御意候也、拙者存候処者、志賀・入田、又〻豊後へ被成合候する事ハ、不及申儀候、彼一國衆取懸候共楯籠、此方へ無別儀罷居られ候ハヽ、御見次候ハんハ、外聞実儀曲事たるへく候欤、殊更高知尾迄さ樣之刻ハ人數少〻被指籠候ハヽ、一稜之御加勢之由被申候間、其分ニ御分別可有通被仰候て、如何可有候欤之由申候也、此日從飯野書狀到來候、今度續之儀者、御談合相替事候ハヽ、留之由承候也、并忠棟・新武迄之書狀、爲披見持せ也、秋月(種実)より被申候趣にて、先〻今度續之儀、被差延之由也、

一▽十三日、柏原周防介、夜前從佐土原被歸由にて被來候、

高知返事之儀、拙者申之趣、尤ニ中書も被思食由候間、其分ニ返事申候也、此日續ニ被立候衆、從中途各歸られ候也、神九郎も罷歸由物語候也、痔病惡候て、蛭養なとにて養性申居候也、

一十四日、恭安より使被下候、續留にて、神九郎先へ歸候由也、此日風呂燒せ候て入候、柏周・鎌源(鎌田兼政)なと被入候、折節折宇迫へ京船着候て、境樽(堺)持來候間、各寄合賞翫共申候也、

一十五日、看經別而申候、夏入にて候間、法花讀誦仕候、蓮香民部少輔鹿兒嶋へ越候間、於田野御狩之鹿、彼御兵具衆へ進入申候也、衆中各礼ニ被來候、碁・將碁なとにて被慰候也、此日鎌源父子(政徳)同心ニ、法花嵩(繼)へ被參候条、坂迎申候也、

一十六日、寶藏院被登候間、終日碁打せ候て、見申慰候也、

一十七日、於滿願寺庭、曾井・清武なとの鶯共餘多來候之条、鶯合せさせ候て見申候、其歸るさ、同名右衛門尉被寄、種〻會尺共也、此日金丸口普請、終日させ候て見候、

一十八日、早旦觀世音へ別而讀經等申候、當所和知川原へ入候船を、曾井之扱赤江より、彼前を通たる大小船共ニ、百疋宛之公役たるへき由にて被留候由、谷江(口)和泉拯申候間、和田刑部左衛門尉にて、比志嶋(義基)殿へ、如何之由御理申候也、明日御崎野之馬追可仕ため、此日海江田へ越候、衆中なと少〻同心仕候也、觀千代も越候する由頻申候間、召烈候、此晩恭安にて種〻御会尺也、和田形部左衛門尉曾井被歸候、吾者左樣之儀不仰付候、定而役人之其分申候哉、委被聞せ候て、追而返事可承之由也、

一十九日、馬追見物申候、折苧迫天神之松原ニ、芝講させ候て籠候、此木屋如例、各酒肴等持來候、寺社衆なと同前、網引候て、魚なと多〻來候、彼是見物無類候、終日慰候也、取駒二疋候、一疋御崎觀音へ拜進仕候也、

一廿日、觀千代如宮崎罷歸候也、此日終日碁・將碁にて慰候也、佐土原より城宅來候、御酒持來候間、各寄合賞翫申候、平家なと語候、種〻之儀共也、

一廿一日、早朝、中城にて各へ御酒參會申候、從夫海江田へ各弓之事申候間、見物可申由申候間、各同心申候て行候、路次駒なと乘せ候て見申候、終日的射させ候て見物申候、種〻會釈共也、此夜伊勢之大宮司処へ留

候也、△

廿二日、▽雨不艶降候間、大宮司処へ然与罷居候、從爰彼酒肴なと到來候、各寄合慰候也、終日碁にて候、△此晩從宮崎申來候、佐土原より、高知尾よりの書狀御持せ被成候ハん持來候、即披見候、先日迄註進、去十八日、志賀・入田へ、豊衆同意以可取懸儀之候、然者高知尾衆ハ、彼方へ即刻可馳續候、高知尾へ、此方より番衆可指籠之由也、

一廿三日、▽早朝、高知尾よりの書狀爲御披見、飯野へ持せ進上申候、并持せ進上申候、并有川殿(伊勢貞貫)まて愚書相添候趣、如右高知尾より申來候、中書も寄〻衆續せ申候て可然之由候へ共、御番手之儀ハ、連綿ニ被召置事候間、不輕儀候、殊ニ日取も過去たる事候間、今少承合候、莵角御報次第校量可仕由申候也、△吉利總州(忠澄)へ書狀にて申候、高知尾より如右にて候間、續衆入事有へく候、三城衆支度被仕可被相待候、飯野へ伺御意候間、其御報次第之由申候也、并誰一人被仰付、高知尾へ被指籠、彼方角之樣子委被聞合候て、早〻可承之由申候也、▽此朝從圓福寺可參之旨候間、其分候、種〻會尺共被成候、塩石被燒せ候、入候て慰候、終日碁打候て閑談申候、此夜月待申候、終夜色〻慰共也、恭安より酒肴なと被送下候也、

一廿四日、払曉より地藏菩薩へ別而看經申候、此晩從蘇山寺可參由候間、其分候、圓福寺・木花寺同心申候而、拙者・彼衆ニ御酒振舞候、種〻之儀共也、

一廿五日、早朝天神へ祈念申候、此日如宮崎罷歸候、然ニ餘〳〵天氣惡候間、和知川原谷口和泉拯処へ留候、長野淡州、寶藏院同心申候間、碁なと打候て慰候、亭主種〻會尺申候、瀨戸山大藏丞來候、明日穗村へ可立寄由申候也、從曾井、拙者留守ニ使預候、加治木但馬拯承置候、趣者、先日和田刑部左衛門尉にて、和知川原へ通候船、赤江にて瀨之公役之儀、比志嶋殿ハ少も無存知候、下役人なとの無了簡にて申候、從爰無吳儀可被通由也、△

一廿六日、▽穗村にて瀨戸山大藏丞処へ行候、種〻会尺申候也、かしこの衆、酒肴なとあまた持來候、賞翫共申候也、此晩城へ歸宅仕候也、△飯野へ有川殿まて進之候書狀返書、到來候趣、高知尾より註進之躰、巨細被達聞上候、拙者如申上候、他方へ御番衆被指籠候事者、不輕事候間、今少承合候て肝要ニ候、其内ニ高

知尾よりの書狀・拙者書狀、八城へ忠棟へ持せ可被成候、彼方ニも、志賀・入田より細ゝ通用共候間、肥後・日州口同前ニ候ハてハにて候間、彼方之到來次第、御註進可有候、其間之事ハ、待居申候て可然之由也、

▽一廿七日、飯野よりの返書、中書爲御披見、佐土原へ進入申候、堀新介へ持せ候也、并野村大炊(豊綱)兵衛尉かこしまより罷歸候、御家門(近衛信尹)樣より中書へ　御書被成候、早ゝ御參被成候て、御請取可有之由に申入候也、殿中築地上屋未進候、早ゝ閊目可有之由、高城・財部・穗北・都於郡・曾井・清武へ申候也、此日椛山(忠勝)殿、御無沙汰之由候て入御候、太刀一腰・百疋・御樽一荷・籠肴持預候也、三献參會、其後御会尺如恆、御同名衆一人座ニ被來候、敷越・鎌源座ニ被來候、終日酒宴にて候也、

一廿八日、御崎寺例講被成候、參会會尺共申候也、此晩鞠にて候也、

一廿九日、金丸口普請させ候て、終日見申候也、△

135

肥州菊池之郡

一作坪付

五海名
一横枕之門

三段卅　そなか町
五段　六段田
三段　此内一段堀町　溝越
廿　堀町　屋敷ノ下
三段　あふミ

公田一町四段

此外堀町一段廿

已上一町五段廿

浮免

二段　限邊殿先　川めくり

都合一町七段廿

天正十四年丙戌五月一日

久盛

早水豊前守殿

136

「義久公譜中」

一天正十四年五月下旬、鎌田刑部左衛門尉從京都下着、而羽柴殿達旨趣曰、畀肥後半國・豊前半國・筑後一國於大友氏、畀肥前一國於毛利氏、筑前一國可爲京都知

行、其餘島津殿領知可有和平云云、

137

「御文庫廿二番箱五巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「裏ニアリ」「八城より使僧被仰付」「上書有之」「天正十四年」「秋月殿江」「自家ノ譜ニハ案文トアリ」「忠棟之案」

厥表御立柄無扁目候之哉、承度候、拙子茂依社役相懸儀頃歸宅候、於諸方角行者、聊不可存油断候、倍可廻賢才事不申及候、依去春以來、到中國爲使僧眞蓮房被指登候、然者歸國餘遲怠無心元故、御方迄若輩申付候、乍御苦労隣邦之儀候之条、開戸邊之様子被聞食儀、御注進所庶幾候、恐〻謹言、

六月二日　　忠棟

秋月殿　御宿所

「此文書、忠棟ノ譜中ニ案文在加治木衆長谷場傳左衛門トアリ」

138

「義久公御譜中」

天正十四年六月七日、兵庫頭忠平有言、由是昨日爲評議矣、豊後發向不可猶豫之旨、有三之山今宮詫宣(ママ)、今月中企發向可乎、去年堅志田・三船入手裡之時、亦信件神詫(ママ)故也、不可有疑心也、

139

「案文有之」

去年季冬十三日、御書過卯月着降、謹而令頂戴候、抑到禁裏御邊被遷　御殿、倍御繁栄之段、乍不覃歡抃至極候、因茲最可勵微志之処、諸境防戰之携半候之故、諶背本懐候、巨細宗心可爲演説候、隨而雖輕塵候、何〻致進上之候、宜預披露候、恐〻謹言、

「朱カキ」「天正十四年」六月「朱カキ」「九日欽」

進藤筑後守殿

140

「義久公御譜中」

天正十四年六月十日、從豊後州志賀道益・入田氏遣使書於上井伊勢守曰、患豊後發向之迄遲延、請速發軍衆焉、自肥後州新納武藏守亦注進件兩輩之所言同旨趣矣、

天正十四年六月十四日、使上井伊勢守家臣奥右京亮・鳴海舍人助、帶調伏之矢赴縣、必十六日往豊後地、可射屆件矢也、

天正十四年六月廿四日、自縣口至豊後射調伏矢者、歸宮崎來曰、過國見稱城腰之地邊所以射置也、

▽五月

一朔日、看經等別而仕候、衆中各被來、閑談共也、此日雨中にて候間、碁・將碁にて終日慰候也、太平記一二卷讀候て、各へ聞せ申候、

一二日、馬共血出させ候て見申候、此日吉利殿(忠澄)へ書狀を以、殿中築地之上屋、守永・廣原未進之由候、早〻御問目肝要之儀申候、并先日總州御(吉利忠澄)連歌書付させられ候て、不審等巨細被聞せ度由候間、寔〻無御隔心侭、愚意之分共申候て、書付進之候也、

一三日、毘沙門へ別而看經申候、此朝御崎野之駒乘せ候て、見申候、終日若衆中被來、茶湯なとにて閑談也、

一四日、從鹿兒嶋則都來候間、平家語せ承候、二百疋遣候也、此日從飯野、有川雅樂助(伊勢貞眞)殿書狀到來候趣、先刻高知尾よりの註進申上候、卽鹿兒嶋・八城へ忠棟候ニ被仰越候、左右方之返書、披見申、分別可申由候て持せ也、鹿よりの書狀ハ、他方へ番衆被指籠事ハ、不輕儀候、中書(家久)・忠棟・拙者へ、能〻御談合候て可然之由也、忠棟書狀ハ、從彼方番衆懇望候ハヽ、被指遣候て可然候、先〻寄〻之衆可然候欤、御行も程有間敷候間、番衆被指遣候ても肝要之由也、有川殿へ拙者返事之趣、兩方之書狀、委見申得其心候、先日高知尾より被申候ハ、志賀・入田へ頃豊衆取懸由候、左候ハヽ、高知尾衆彼見續として可馳續候間、跡之番憑由候、然者未豊衆取懸たるとハ不聞得候間、今少可承合候、若〻替儀候ハヽ、中書へ御談合申、分別可申候、可安御心之由申候也、

一五日、靈符へ別而祈念申候、衆中各被來候、粽・御酒如恆例寄合候、酒肴共預衆も多〻候也、野村賀加(重綱)守(加賀)より酒肴持せ使者也、佐土原へ弓削甲斐介にて今日之御祝礼申入候、并昨日從飯野到來候書狀共、爲御披見持せ進覽候也、此日大門坊より、一兩日中稽故連歌興行可有候、然者五日前、行水と云五文字計夢想候、是を五文字にて發句所望之由候間、

行水を軒のあやめやしのふ草　如此申遣候也、

一六日、昨日天氣惡候て、無礼共申候間、衆中なとへ礼申候、

一七日、大門坊連歌之一順共仕候也、

一八日、藥師如來へ別而看經申候、終日若衆中被來、盤之上なとにて慰候、折節折宇迫より鰹到來候、各寄合

賞翫共申候也、

一九日、痎氣出合候て、終日伏居候、

一十日、大門坊にて連歌也、痎氣惡候つれ共、兼日之約束にて候間、可參之由条參候、終日ニ百韻成就也、連衆西方院・大門・拙者・大隅宮内より客人治部卿・敷祢又十郎・長野淡路守・鎌田源左衛門尉(兼政)・関備後守・弓削甲斐介・野村大炊兵衛尉(豊綱)・上井右衛門尉(兼成)・鳥原四郎兵衛尉、執筆野元助五郎也、此晩城のことく歸候也、

一十一日、平田新四郎(増宗)殿より、吉野御馬追來十四日之由候、それに乘せられ候する、拙者吉野の栗毛借用之由承候間、鞍・具足等仕合、牽せ進之候也、

「此日、南林寺より使僧預候、客殿作ニ種ゝ入魂申候由之礼義也」

一十二日、痎氣散ゝ候て、行水なとならす候、然共藥師へ讀經共申候、

一十三日、虛空藏へ看經仕候也、此日若衆中被來、碁・將碁にて慰候也、

一十四日、椛山玄佐(善久)滿願寺まて御座候て、使預候、佐土原へ參被成候、乍次拙者へ無沙汰被成候間、御礼可有候、今日ハ餘ゝ雨中に候間、明朝入御可有由也、軈而從是も同名右衛門尉にて、御越目出候、拙者も可罷下候へとも、痎氣時分にて養性申候、明朝早ゝ入御可待入由申候也、

一十五日、看經如例、玄佐御座候、即參會申候、座躰客居玄佐・定庵(大脇為綱)、其次中書之御使久木崎伊賀守にて候、主居拙者・椛山求惠・柏原周防介(有閑)也、種ゝ御会尺申候、さて御歸之由候つれ共、稀ニ御越にて候間、是非以明日百韻興行可申候、御發句あそはされへき由申候也、頻ニ御斟酌候つれとも、堅申候間、發句なされ候、

さみたれやこと浦とふるみなと川　　玄佐

巣をさり來つゝそよくあし鴨　　覚兼

かたよりにうき藻みたるゝ塩は干て　　大脇民部入道定庵

終日一順にて候、此晩も玄佐此方にて參會候也、

一十六日、早朝より連歌也、座躰客居玄佐・治部卿・定庵・柏周・長野淡路守・鳥原四郎兵衛尉、主居滿願寺(玄惠)・拙者・求惠・鎌田源左衛門尉・野村大炊兵衛尉也、此晩連歌過候へハ、玄佐如佐土原御參也、

一十七日、定庵兩吟仕度由候、左候ハヽ頻ニ發句と申て候へ共、頻ニ我等可仕之由被申候間、思案共申候也、

一十八日、定庵と兩吟仕候、執筆野元助五郎也、

あやめにもかけて浮巣のにほひかな　覚兼

藻に咲花のなひく池水　定庵

さゝ浪のうへに涼しき風落て　同

終日ニ兩吟成就候、此日上原長州(尚近)より使預候、久無音之由也、京樽一預候、使者寄合候て賞翫申候也、

一十九日、吉利總州(忠澄)御出被成、即參會、三献如常、未之刻御出也、定庵なと被居合候て閑談共也、褒乏連歌共候て慰也、其次、明日連歌被遊候て可然候、左候ハヽ百韻興行可申候、發句之由總州へ申候へ共、色ゝ御辞退候侭、定庵可被仕之由申候也、度ゝ斟酌にて候つれ共、頻申候間、發句被仕候、從夫各一順共申候、此晩總州へ參會候、座躰客居總州・柏周・長野談路守、主居拙者・定庵・鎌源にて候、種ゝ馳走申候、食籠肴にて候、總州京樽預候、賞翫共申候也、此夜總州、鎌源処へ御被成宿、△

一廿日、▽早朝連歌也、座躰客居總州・定庵・長淡・上井右衛門尉・鳥原四郎兵衛尉、主居拙者・柏周・鎌源・宗賢・野村大炊兵衛尉也、

名にしおハヽ香にしめてふれ梅の雨　定庵

袖をかたしく夏山のかけ　總州 忠澄

守かよふ氷室のあたり暮そめて　覚兼

連歌果候へハ、定庵ハ從飯野可被參之由候て、俄ニ如都於郡被歸候也、總州此夜鎌源処へ御留被成候也、△此日鎌田刑部(政広)左衛門尉殿從京都下向之由聞得候間、谷山志广介財部指越候、下向之由承付候、目出候、此境通被成候ハヽ立寄候へかし、京説委承度候、自然急候て直ニ如鹿兒嶋御參候ハヽ、大方彼方へ可被仰聞由申候也、

一廿一日、▽早朝總州御歸被成候間、我ゝ不存候て、暇乞さへ不申候、△谷山志广介罷歸候、一定鎌刑下向にて候、財部迄使進之候、祝着被成候、菟角此方へ越被成、京説具可被仰候、其上上洛前合力共申候礼可有之由也、

一廿二日、鎌刑越着候、即參會申候、▽三献參会候、并祝言計ニ太刀・百疋進之候也、從彼方も京土産とて、指懸一具・越布一預候也、△さて京物語にて候、細川兵部大輔(藤孝)殿御取成(秀吉)之由候、先京着候へ共、於大坂見參之由也、先羽柴殿見參候て、吾ハ座を被立、其後会尺之由候、▽湯漬振舞也、△座躰主居中國之安國寺(恵瓊)、次(當時ハ羽柴名乗候、)堀急太郎(秀政)、次左ゝ内藏助(成政)、次小早川(隆景)、客居細川兵部入

道玄旨、次鎌刑之由物語候、已上逗留中、四度羽柴殿へ見參之由也、一度、刀一鎌刑へ被遣候、一度、打掛ヲ解候て被遣候、又路錢とて万疋被遣候由物語也、御返事者面談にて被仰候由也、其趣、過半九州嶋津殿(義久)進退之由聞得候間、肥後半國・豊前半國・筑後、是を大友殿(義統)へ被去渡候へ、又肥前一國を毛利殿(輝元)へ、筑前ハ京都より知行可有候、其餘此方より御格護候て、平均可目出之由也、此返事、來七月より内ニ、鎌刑罷登被申候へ、無其儀候ハヽ、七月必此方へ出馬候する由也、又てんしゆへ、羽柴殿自身案内者にて見せ被成候由物語也、細川玄旨も同心之由也、藏なとも、何藏〳〵と、一〻ニ吾被仰候由也、てんしゆにて茶なと振舞被成候由共物語也、道正宗与同心にて下向申候、同座にて彼衆も京物語種〻也、

一▽廿三日、又鎌刑・宗与へ寄合候、此日兩所共歸也、此夜月待にて候、若衆中被來、閑談共也、

一廿四日、地藏へ別而祈念申候、此日ハ終日碁・將碁にて慰候、△

一廿五日、▽天神へ別而看經申候、△此日從庄内土持攝津介副狀にて、鹿兒嶋より之書狀到來候、忠長・忠棟之御狀也、即披見申候、遮而御談合之子細候、來廿八日・九日、必參着可申由也、吉利總州・伊集院作州(久宣)・比志嶋式部少輔(義元)殿・鎌田筑州(政心)・同名雲州(政近)・山田越州(有信)・吉利山城守(久金)殿・川上備州(翌久)・新納縫殿(久時)助殿、彼衆同心申へき由也、▽洪水ニ滯候之哉、去十八日之日付之書狀也、今日到來候間、廿八日・九日ニ參着ハ不及是非候間、來月二日・三日、必鹿へ參着候樣にと、右之御人數へ使書にて申渡候也、

一廿六日、諸所之返事到來候、皆〻參上候する由也、伊作州・川備州ハ、當病之条難成由也、此晩長雨晴間にて候て、若衆中拙者庭にて鞠也、折節、從江田珎肴到來候間、各へ振舞候也、

一廿七日、鹿兒嶋へ直ニ參候する爲、加江田へ罷越候、殿所にて網共引せ候、種〻肴見來候、彼所之衆種〻会尺申候て暮候侭、中途ニ留候也、

一廿八日、恭安(上井兼兼)へ參候、肝付藏人殿、彈正忠殿(肝付兼寛)機嫌惡候て、爲上洛此方へ越着候、左樣之物語共承候、種〻御会尺共也、此晩藏人殿へ御酒振舞申候、恭安も拙宿へ申請候、深行まて閑談共也、

一廿九日、天氣惡候て、終日磐(盤)之上にて慰居候也、

一卅日、朝狩ニ立候、鹿一取候、從夫御崎寺へ參候て終日閑談申候、種〻御会尺共也、薄暮ニ罷歸候也、△

142

「義久公譜中」

一天正十四年季春下旬、筑紫上野介廣門匪啻背薩摩、且與大友氏爲仇敵云尓、欲誅戮渠之黨徒、六月十三日、義久率乎大軍、七月二日、入乎肥後州八代、俾諸將直赴其地、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟爲將帥、島津三郎次郎忠隣・北郷讃岐守忠虎・新納武藏守忠元・同弥太右衛門尉忠增・同姓縫殿助久時父子・川上左京亮忠堅・伊集院下野守久治・喜入攝津守季久・大野權左衛門尉久高爲副將、上原長門守尚近・上井伊勢守覺兼・鎌田出雲守政近・山田越前守有信・本田因幡守・伊集院肥前守久春・鎌田外記・税所新介・吉利下總守・宮原左近將監・稲冨新介長辰・遠矢信濃守良時・梅北宮内左衛門尉國兼已下騎歩不遑記也、先往筑後高良山、七月六日、陷鷹取城、于時川上左京亮忠堅遂戰死、三郎次郎忠隣被干戈傷也、丁此之時、畏其武威也、日當山亦陷矣、

143

天正十四年六月十三日、筑紫上野介廣門を攻させらる時、八代迄打入玉ふ、

大守義久主　義弘主　『○』左衛門尉歳久

中務太輔家久　薩摩守義虎

圖書頭久長『忠』　圖書頭久長『忠』

筑紫江打立人數ニハ、

薩广守義虎（先陣大將）

『△』伊集院右衛門太夫忠棟

伊集院肥前守『久春』　伊集院下野守『久治』

吉利山城守　喜入攝津守『季久』

鎌田少外記　上井伊勢守『覚兼』

山田越前守『有信』　鎌田出雲守『政近』

上原長門守『尚近』　本田因幡守（六右『衛門正親事カ』）

宮原左近將監『景晴』　税所新介

遠矢信濃守　稲留新助『長泰入道閑栖』

「七月六日筑紫城本丸ロニテ」『△』梅北宮内左衛門尉

『○』川上左京亮「深手負」『忠堅十四年七月六日戰死』

同年七月廿七日、岩屋城攻ニ軍勞、

久留攝津介「久留木トモ作ル」「痛手負」　山田越前守『有信』「痛手負」

上井伊勢守『覚兼』「仝」　宮原左近將監「仝」

新納右衛門佐久饒

長谷場兵部少輔「時年三十九歳」孝純「太刀始」　向江吉左衛門「宮内左衛門トモ、脇太刀初」純馴

新納縫殿助久時

中島右衛門尉重續「脇太刀」　井牟田宮内三郎親綱「手負」主従

八代住人的場五藤兵衛「手負」　○新納藤四郎「十六歳」久時子

『肝付彈正忠兼寛』

十四年十月廿一日、阿蘇之内南郷・野尻ニ肥後表より被打出、

御大將兵庫頭樣　『○』左衛門尉歳久

右馬頭　圖書頭『忠長』

『△』伊集院右衛門太夫『忠棟』　町田出羽守『久倍』

『肝付彈正忠兼寛』

川上上野守　新納武藏守『忠元』

天正十四年十月、　義久主日向口へ發向シ玉ふ、同十二月、大友義棟・千石權兵衛と歳滿ニ合戰軍勞、

中務太輔家久　圖書頭忠長

豊後守久親　「天正十四年、豊後入ニ騎馬御供長谷場織部介純辰嫡子」

十月、丹生の島ニ戰ふ、

『○』伊地知丹後守『重政』『天正十五年豊後野津戰死』　同子新三郎

『○』濱田民部左衛門尉『經重』『殉死』「天正十四年、豊後臼杵ニ而敵七人打也、濱田主水重昌」

肥後口の大將ニハ、

兵庫頭忠平主　『○』左衛門尉歳久

薩摩守義虎

八代在番、

右馬頭幸久　「○天正十四年十月、豊後入中書御供、三重松尾城番手也」

「新納縫殿助久時」

「○豊後入前、彼國志賀播ノ守カ管ノ迫ノ坂ニ忍ノ御使者ニ差越蜜事相達無難帰國」

玖珠表ニ打入衆ニハ、　「新納四郎左衛門忠秀入道慶雲」

川上上野守『忠克』　町田出羽守『久倍』

新納武藏守『忠元』　「○十五年夏、御引陣ノ節後殿、且坂無岡ノ陣打破候時、先登いたし手負」

「新納四郎左衛門忠秀入道慶雲」

144

「上井覚兼日記」

▽六月

一朔日、看經等別而申候、各祗候共申候、見參申候也、恭安へ參候、如恆例、氷御寄合被成候、從夫種ゝ御会尺也、肝付藏人殿も同前、明日鹿兒嶋へ打立候する間、加江田まで罷候由申、打立候、圓福寺へ參候、寶藏院來合候間、碁共仕候て閑談申候内、風呂燒せられ候条、入候て薄暮ニ歸候、此夜内山ニ留候、

一二日、早朝打立候、於田野、宮崎より之衆待合候、藏人殿同道申候也、於中途御酒なと參會候、鎌源（鎌田兼政）、是もかこしまへ可參覚悟にて打立、拙者へ同道之由兼約候

処、於田野大寺大炊助殿頻ニよせなされ候間、明日追付へき由申候也、此晩山之口へ留候也、△

一三日、▽毘沙門へ別而祈念申候、△早朝打立、此日敷祢(敷祢頼賀)へ着候、▽休世齋可参由候間参候、肝藏ハ直ニ従中途、如清水被通候也、休世齋種〻御会尺也、三郎五郎(敷祢頼元)殿もくたりなされ候、酒肴共預候也、此夜休世へ留候也、

一四日、順風無之候て逗留申候、三郎五郎殿へ御礼ニ参候、酒肴進之候也、終日於彼方會尺被成候、旧冬於肥州源氏一部求被成候、見せなされ候、并納様次第共相尋被成候条、一〻如此之由教申候也、

一五日、休世にて種〻御会尺共也、去二日、此方へ打立候夜明之時分之夢想ニ、紹巴(里村)下向候て御連歌たるへき由定候、其一順、各あつまり申候、忠長・忠棟なとも其座に候、紹巴之一順、拙者書付候へと承候間、其分候、其句ニ云、袖にきよあるやいてしけいぶん　如此承候ニ、一向得心申候ハて、文字ハと尋候へハ、きよあるハ居ノ字、けいふんハ計文、如此被仰聞と存候へハ、夢ハ覚候、寄特なる夢想之由共物語申候也、此日も天氣惡候て、休世齋へ終日罷居候、誹諧なとにて慰候刻、兩足寺、拙者逗留之由聞付被成候、見参可有之由候て、酒肴持せ被來候而閑談共也、此晩明曉出船可申候する覚悟にて、別當所へ行候て留候也、肥州之商賣人、町へ有合候、拙者存知之者にて候而、酒肴なと持來候也、△

一六日、▽一番鳥ニ出船申候、夜明候時分、△白濱へ着岸候、▽種〻会尺共仕候也、餘〻炎天難成候間、心靜ニ彼処へ罷居候、所之者共酒肴なと持來候、△酉刻計、如鹿兒嶋渡海申候也、

▽徒に君なしつめそもしほ草はかなきあまのしわさなりとも

天正十四年
六月△

一七日、早朝殿中へ出仕申候、白濱次郎(重治)左衛門尉殿を以参上申候由申上候、即　御見参被成候、御談合之事、吾〻祇候御待居雖被成候、從　武庫様(義弘)急ニ御申之義候間、昨日より御談合にて候、伊地知伯州(重秀)・吉田作州(清存)にて様子承候、其趣、眞幸三之山今宮と申之御託宣ニ、御家景中諸神、豊後へ御打入御待被成候、此方御行遲〻候、笑止に候、乍去七月廿七日迄者彼方へ御座可有候、爰元御行、今月中ニ御企可目出候、八月ニ差延候

ハ、可悪之由候、去年堅志田・御船御手裏ニ參候事も、右之御神之御託宣少茂不違候、今又如此候時ハ、御談合肝要之由也、御談合衆、忠長・川上上州(久隅)(伊集院)(町)・忠棟・久倍(本田)・親貞(伊集院久治)・伊野州(上原尚近)・上長州(重政)・白濱周防介・本田刑部少(正親)輔・税所新介(寛和)・三原下總守(重隆)・木脇若狭守(祐充)・遠矢信濃守(良時)・吉利山城守(久金)・比志嶋式部少輔(義基)・拙者なと也、談合衆皆ゝ被參合す候、先ゝ此衆にて候、有川雅樂助飯野よ(伊勢貞真)り被參候て被承候也、鎌田刑部左衛門尉(政広)下向ニ、從羽柴殿(秀吉)も國分共被申候、其外種ゝ六ヶ敷事等而已之意趣候間、御神慮と申、菟角豊州御退治可目出候之由、一同ニ御申共也、上様(義久)も御同前之由候条、去春之如御談合、肥後口・日州口兩口之御行たるへき由也、太(義久)守様ハ日向口へ御進發之義定候、武庫様ハ肥州へ御發足之由定候也、忠長・忠棟・久倍ハ肥後口之御供、親貞・拙者日州口之由也、光宗(平田)當時肥後之御番前に候、是又被歸次第、日州口へ可被參之由也、其外諸所之軍衆、去春御盛同前也、太守様御進發之事、七月當所之御祭礼を被指置御出軍之義、稀之儀候間、御鬮次第たるへき由也、兵船之盛等、彼是終日之御談合也、

一八日、▽早朝出仕申候、△川田駿河守(義朗)如御嘉例日取被申候、今月中にハ十六日・十七日大吉日にて候、來月中ニハ朔日之外別ニ御日取無之之由、被申上候也、然者十六・七日ニハ、兩口共ニ遠方にて候間、とても御行罷成かたく候、彼日ニ調伏之矢を射初させられ候て可然之由也、即川田方、右之矢調進可被申之旨被仰出候、此日も於殿中、終日御談合也、▽此晩忠棟より圖(忠長)書頭殿へ、御茶御申之由候、然者拙者も可參之由候、御談合所より直ニ彼方へ參候、種ゝ御馳走共也、△

一九日、▽早朝出仕申候、△白濱周防介を以被仰出候、御出張之義、談儀所御鬮御申候、輙御鬮事成候、然者諸方へ觸被申へき由也、日向表ハ來廿七日、縣へ諸軍衆可被着合由也、肥州表ハ來廿四日、三船へ可被着揃由也、伊地知勘解由左衛門尉(重元)を以、拙者へ被仰出候、調伏之矢之事、早ゝ請取申、矢させ申候て可然候、御日取之事、十六日・十七日可然之由候、日州口之事、十七日ハ御年日にて候間、如何ニ被思召候、何として事成候ハ、十六日ニ射させ申候て肝要ニ被思食由也、如上意可申調通申上候也、聽而鎌田源左衛門尉(兼政)、駿河守宿へ遣、調伏之矢請取せ、如宮崎巨細申候て、持せ遣候也、并土持殿(久綱)へも、御行之事、又ハ彼矢射さ

せ候する案内者等、入魂可有之段、書狀を以申遣候也、
此日御家門樣(近衛信尹)御請、長谷場筑後守(純辰)賴候て認候、其案文、
從御家門樣御書被成下候、欽令頂戴候、抑　仙洞到御
近所被移御殿之由、弥堂上御繁栄之謂候之哉、千秋万
歳候、仍雖輕塵候、糸二斤五色令呈進候、寔奉補陋志
計候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

六月九日　　覚兼判

進藤筑後守(長治)殿　料紙鳥子也、如常、

進筑へ私之返書案文、　御上國已後不申通之処、御音
問畏入候、　御家門樣御殿、　禁裏被遷御近邊之由、
弥御繁栄之基候哉、義久別而馳走可被申之旨雖被仰下
候、當時防戰最中之故、相似疎意候、心外之段被存候、
宜樣御取合肝要候、仍沈香三十余兩、進入候、寔補御
回礼計候、恐惶謹言、

六月九日　　覚兼判

進藤筑後守殿　參御返報

此晩古川入道(宗心)殿宿へ參し候、▽伊地知伯耆守・周琳(中江意温斎)同
心申候、先御請自身渡候、并進物伊伯賴候て渡候、其
後古川殿へ糸一斤五色進之候、其後進藤殿へ返書并沈
香渡候也、食籠肴にて御酒持せ候、閑談共候て、賞翫
被成候也、△

一十日、出仕申候、今度出軍之時、伊集院野州・上原長
州・伊地知伯州・平田豊州(宗位)、拙者同心申候て、諸篇談
合申候て肝要之由、白濱次郎左衛門尉殿にて被　仰出
候、并船大將之事、喜入攝州(秀久)可然之由候て、即書狀を
以被仰遣候也、此朝志賀道択(親益)、入田方(義実)より使書、宮崎
へ到來候、使者去春被來候堀名字也、彼使かこしまま
て可通候へ共、無其覚悟之故、先〻書狀被持せ之由也、
即披見申候、寄合中も披見共候、從其備　上覽候、此
趣も御行遲〻候、早〻御才覚可目出由也、肥後口より
も新納武州(忠元)へ、右兩所より之書狀來候、同趣也、▽此
日出船と存候へ共、大風にて徒ニ逗留申候、△

一十一日、▽此朝も出船と存候へ共、風荒候間不成候て、△
陸路を敷祢(敷祢賴賀)へ着候、▽休世齋へ參へき由候間、其分候、
鎌源同道仕候也、

一十二日、早朝可打立存候処、桑幡政所殿兄弟、拙者爲
見參越着候、酒肴預候、賞翫共申候也、敷祢(賴賀)殿も下候
て種〻会尺也、從夫打立、都城通候時分、大雨にて候、
殊ニ洪水にて難儀仕候、都城にて、此度御出勢之樣子、

又ハ鹿兒嶋へ使者進上被成、委被聞せ候て可然之通、内藤宮内左衛門尉殿と申方へ、使して申置候て打通、嶋戸へ留候也、一兩日已前、調伏之矢持せ候て、宮崎へ遣候衆洪水故、此所ニ留居候、驚入候也、曲事之旨申て候へ共、洪水無及力之由、地下衆申事候也、

一十三日、払曉ニ、最前矢持せ候衆ニ、我等悴者一人相添候て、宮崎へ急かせ候、拙者も打立候也、猶洪水にて川毎ニ苦労仕候、併急候間、此晩宮崎へ着候、夫丸等ハ打捨、吾〻計着候也、即右之矢可射申仁兩人申付、明朝打立せへき校量也、

一十四日、早朝、奥右京亮・鳴海舍人助兩人へ、右之矢持せ、縣表のことく指越候、巨細之通面談ニ申付候、必來十六日罷着候て可射屆之由、兩人申候也、此日諸所へ書狀又ハ使にて、御出勢之義細〻申渡候也、此朝中書(家久)公穆佐へ御越候、洪水故、柏田町御通候、拙者罷歸たる由被聞せ候、さてハ御用共候ハヽ、穆佐へ可申之由被仰置候て御通也、從夫柏原周防介(有閑)賴候て、中書公へ今度御談合之樣子、委細申候也、拙者尤參候て可申候へ共、養性氣候間、無其儀由申候、御返事ハ、さてハ今度路次之辛労故、養性氣出合候哉、大向之御行前にて候間、涯分養性肝要ニおほされ候、さてハ御儀定候て、此口御出勢候哉、一段目出被思食由也、此日衆中有足・無足あつめ候て談合申候、悉不殘今度之義者可罷立由共也、

一十五日、看經等如常、中書定而此方御通候らん、拙宿へ可申請覚悟にて、鎌田源中途へ指出候へハ、夜中ニ御歸宅之由候也、平田新左衛門尉(宗張)殿、續之樣子共可被聞せ由候て越被成、酒肴預候、參會賞翫申候、御行之樣共巨細物語申候也、田野・清武よりも使者にて、續之義共委被聞せ候也、

一十六日、財部より野村刑部少輔にて、今度御行之樣子共被聞候也、從中書御使被下候、高崎越前守也、今度近〻御行可有之儀定候、御祝着之由也、就夫種〻被仰候、入田よりの使堀方、拙者歸宅相待、佐土原へ逗留申候、是も來候也、見參共申候て、閑談申候刻、山田越前守(有信)、從鹿兒嶋御使ニ被來候由申事候、さて、もし〳〵御談合相吳もやと存候て、中書御使、又入田之使、先〻かへし申候也、山越軈而越着候、御意趣、先日參上申候砌、御談合事澄、肥日兩口之御働必定候処、從飯野又〻御申之趣者、今宮之御神託其後も候、區〻候

之由御申被成候、又此度善哉坊中國へ御登せ候、歸着候、其意趣等被聞召合、其上霧嶋へ山越と善哉坊(面高頼俊)御使にて、御鬮御申被成候、今度定候御行と、筑紫表之御出勢を御申候へハ、筑表可目出之御鬮おり候、善哉坊ハ直ニ眞幸へ御參せ候、山越ハ此方之由也、然者當國衆も皆同肥後表へ可罷立之由、可申渡之由也、飫肥まてハ拙者可申通之義也、餘〻掌を返す樣之御談合、笑止之由存候へ共、無是非候、殊更入田殿よりも使到來候、今日も書狀來候、去十一日、志賀(親益)・入田談合以、手形出由被申候、其返書にも、御出勢必定之由申候ニ、如此相違之儀迄候、迷惑至極ニ候へ共、不及力候也、山越会尺共申候、座話にも、我〻ハ筑紫表之御行一向納得不仕候、殊ニ御日取も來朔と候、是又軍衆着合間敷候、菟角愚慮之外之由共也、△

一十七日、諸所へ御談合相吳候て、筑紫表へ御出勢之由、使書にて申渡候也、▽三城・財部へハ、山越此由可被仰屆事、賴存候通申候也、佐土原も同前、冨田へ萩原宮內左衞門尉、穗北へ平原民部左衞門尉、都於郡へ本田大膳亮、綾・本庄へ松山七左衞門尉、藏岡和田石見守、穆左へ有馬大学左衞門尉、長峯・細江松崎源藤、飯田前田新藤、曾井・清武へ長野助八、田野へ津曲六弥太、いつれも委承由之返事也、

一十八日、觀音ニ別而祈念申候、御崎へハ木花寺名代ニ賴候て參詣也、衆中各此方へ揃候て、筑紫立之談合させ申候、餘〻是程之遠方へ立之事、始にて候間、七八町組ニも仕候ハてハ難成由、頻侘言也、巨細之儀共承候へハ、尤にて候間、諸方同前ニ可然候条、衆中一兩人宛同心にて、先曾井・清武・都於郡邊之樣子、被聞候て可然由申候、曾井へハ長野淡路守・関備後守被行候、都於郡へ柏原周防介・弓削甲斐介被行候、先佐土原へ柏周にて申候、此度此口之御行相違申候て、吾〻ハ朦氣仕候、さて入田方之使返事等、何と可被仰候哉、御返事被成候する樣子承候て、拙者返事も同可申由申候、鎌雲州(鎌田政近)へも中書へ申上候ことく申候也、

一十九日、殊之外洪水にて候、長淡・関備、夕被歸候由候て被來候、比志嶋殿(義基)も餘〻遠方之立にて候間、是非共七八町組にも被仕候て、被立候て肝要之由也、△

一廿日、▽柏周早朝被歸候、△中書御返事も、此口御行相異候て、笑止ニおほしめされ候、并入田返事之義、乍勿論正直ニ可被仰御覚悟之外無之候、併今少拙者分

別被聞召、御返事可有之由也、鎌雲返事も、中書御返事ニ大方同前にて候、一ケ条別而承候、今度筑紫表之御立之儀、從鹿兒嶋被仰越候上ハ、無是非候、併入田方も豊後へ手切被仕、勝利之由之書狀到來候、定而此方へも可來候、先〻雲州へ來候文、爲披見預候、明日与風佐土原へ參候へかし、左も候ハ、出合候て談合有度之由也、是又尤さうに存候間、軈而永山兵部少輔にて雲州へ、明朝佐土原へ可參候、出合可有之由申候、此由佐土原へも從都於郡申有へく候、又先日山田越前守、從かこ嶋、筑紫表之義御使被申候間、彼方佐土原へ被參候て可然之由申候也、▽此日從中書、上原宮内少輔以承候、入田方御返事之義共也、并佐土原へ明日各參候て、御談合之由候欤、鎌雲前より被申候、斟酌ニ被思召之由也、御談合処御斟酌之由候へ共、何ケ度も當國衆御談合申候するハ、佐土原より外にハ難有存候、明日我〻も可參候間、其刻入田之返事等、彼是御談合ニ可出合之由申候也、入田之使堀方も、返事承ニとて來候、明日佐土原にて巨細可申由申候て歸し候、彼使ニ乍輕微鹿皮遣候也、△

一廿一日、早朝佐土原へ參候、▽即御案内申入候、鎌雲・山越未被參候間、時分を以御左右承へき由候て、小宿へ御使預候也、鎌雲參之由候間、中書へ指出候、即御對面也、京樽進入申候、即御賞翫候、山越就祭礼之義遲參候、然を御待被成候間、御閑談共也、茶屋頃作せ被成候、見可申由共候て、一覽候、如此共候処、△山越參着也、從夫御談合候、今度筑紫表之御行之事、御談合不承故候哉、自他納得不申候由共出合候、さて入田方手切顯然候、是者筑紫表御出勢定候て已後之義候、然者入田方之事、中書御下ニ吾〻計策共申候て、見捨候する事ハ、外聞実儀笑止之事候、蒐角後日之御爲ニ候間、是非以入田御見續可目出之由、　武庫樣へ御申被成候て可然候、其内者、當國衆續之事支度被申、相待候て可宜由出合候、▽是者一定日州衆遠方立を大儀ニ存、如此六ケ敷申樣ニおほされ候する人も可有之候欤、然共天道其儀無之候、神載なと候てなり共、此意分者、一ケ条御申候て肝要之由候、中書も御同懐之由候間、さてハ飯野へ御使僧、都於郡興善寺可然候、又拙者同心申候柏原周防介、是一人御相添候する由、中書御面ニ被仰付候、然者辞退ニ不及、領掌被申候也、此夜深候て小宿へ罷歸候、逆瀬川豊前守なと、拙宿ニ

留候て語候也、△

一廿二日、早朝逆豊歸候由申候間、總州(吉利忠澄)へ御談合之趣共細〻申遣候、并新納武州、入田見次として、野尻堺へ被差寄之由候間、彼方へ使者被遣候て可然候、拙者書狀認持せ候也、入田へも輕衆一兩人被指越、樣子被聞合、御註進可申約之由申候也、▽中書拙宿へ御來儀候、御酒被下候也、賞翫吳于他候、鎌雲なと被在合、御閑談共也、左候內ニ、△入田使堀方、拙者返事可承由申候て來候、中書公未御見參候間、能仕合、そと御見參之由候間、其分候、豊後內之樣子共、巨細御尋被成候、一〻存分共申上候也、入田へ返事申候趣、先札返書ニ如申候、此口・肥後口御出勢必定候処ニ、龍造寺(政家)・秋月(種実)之事、可罷立之旨被仰渡候へとも、筑紫方豊後与一致にて罷居候間、彼を指置候て、自身出張之儀罷成間敷之由、頻ニ被申候、左候へハ先〻筑紫方被召崩、其後豊後入可然之由懇望候条、被任其儀、御行相應候、是も必竟志賀(道益)・入田御見次之爲に候間、納得候て、今少堅固之御才覚肝要之由申候也、此日軈而宮崎へ罷歸候也、

一廿三日、▽此晩月待にて候間、精進仕、讀經等別而申候、此晩都於郡興禪寺被來候、　武庫樣へ御談合以御申之御使僧當候、意趣等、委可被聞せ由也、卽見參申候て御酒寄合候、△其後柏原周防介兩使者へ意趣申候、此度御行相替、筑紫表御出張之儀委承候、其支度無別儀候、然処入田方去十一日豊後へ手切仕、勝利之由申來候、同急〻御見次無之候ハ、、可及迷惑由、使書重疊到來候、然者筑紫表御出軍之御談合まてハ、入田方手切之事者無御存知候、若者、自爰ハ入田御見續とか候すらん、日州衆之事ハ、菟角筑紫表之御日取にハ參合ましく候間、伺御意候、其御一左右まてハ、日州衆立之事、相待可申由申上候、就中拙者事、▽頃腫物出合散〻式候間、菟角五日・十日之內ニ者、罷立事成ましく候、彼是御談合も如右候条、兩使進上之由申候也、菟角入田方御見捨候てハ、向後御爲ニ成かたき由、其外於佐土原出合之分、委細申上候也、今夜若衆達各被來、月待得候まて慰共也、

一廿四日、興禪寺・柏原方早朝被打立候也、此日鎌田源左衞門尉にて、鎌雲州へ內談申候趣、佐土原にて如出合、兩使御座元(義弘)へ御進上候、目出候、吾〻其後思案申候にも、入田御見次無之候ハ、、外聞実儀笑止に候、

殊中書公其御下ニ雲州・我〻旧冬已來申替候て、自然彼身躰滅却候てハ、迷惑之儀候、雲州納得候ハヽ、中書へ御内談共候て、楚忽ニ當國衆まてにて、梅口へ被召懸候てハ如何候する哉、内談申由申候也、縣口へ遣候悴者兩人歸來候、輙豊後内へ調伏之矢射させ候由申候也、國見通候て、城のこしなと云あたりに射置候由申候也、

一廿五日、鎌源罷歸候也、鎌雲、拙者内意之分同前ニおほされ候、佐土原へ參被成、中書御内存共可被聞せ由候つる、然共興禪寺・柏原方此一左右蒐角承候て可然樣ニ、雲州所存聞え候但、今少拙者へ尋候する由申候て、源左衛門尉歸候由申候、さてハ中書申なされ候する事、けにも右之一左右まて相待有へき由、書狀を以雲州へ申候也、其返事聽而到來候趣、鎌源以内意之儀同懐候故、佐土原へ參候て、御内談可申存候処、鎌源歸宅候、然者　武庫樣へ伺御意被成候、其御返事聞得候するまて相待可申由、被得其心由也、

一廿六日、行前兵具等調させ候て見申候也、△

一廿七日、伊集院作州(久宣)より使預候、▽去廿四日、子息(忠許)於佐土原ニ元腹(服)候由候て、此方へ礼被成候、左樣之時丁寧之儀共申候とて、礼義承候、并△此度筑紫表之御出勢、一大事ニおほされ候、其故者、遠方与申、御陳なとさゝへ候てハ、無人數ニ可罷成候、彼是後日の爲にて候間、忠棟へおせらるゝ(ほ脱カ)も同前之樣候間、拙者可承置之由也、

▽一廿八日、看經等別而申候、御崎寺腫物氣にて、例講ニ不來候、此日も行支度共申付、御一左右相待躰候也、

一廿九日、同前、△

145

「忠元譜」

一十四年丙戌六月、宗和遣使、十六日、　公弟家久以書答之、十二月廿日、　公賜宗和書、

146

猶〻宗麟下向之由其聞候、定羽柴殿可有入魂之間、此以前よりハ可事隱候之處、志賀方如此之心底不淺御賴母候、自前茂於京都使者被差登候之処、羽柴殿被仰遣之儀共候キ、就夫談合最中候、委細者彼使者江、令口入候之間、不能細筆候、乍重言加勢之儀、度〻延引候、依爲不憚儀如此候、さ候てハ當國之鎮守鵜戸　霧島大權現御照覽、聊如在之儀無之候、爲

御存知候、

遠方之儀候之處ニ、使者被差越候、得其意、則於鹿兒嶋申遣候之間、延引之樣ニ候、雖然、一着之事爲可承合如此候、誠境目以御辛労之故、爰許迄被相支之儀、無比類存候、殊到志賀方別而入魂之儀候哉、肝心之至候、然者其表可被顯手立之段、相聞專一候、雖不及申候、被廻計策道驛事者（志賀道益）勿論、志賀一黨之事、此節可被遂一味之樣、可被相調候、扨者向後彼人數之儀、不可有疎略候、萬一於及遲ゝ候者、每事徒事候、爲御存知候、付而者其表爲加勢近日三城表まて可指寄欤之由存候、每度如此之儀不首尾之樣ニ、于今雖失面目候、不憚子細候之間不及是非候、定日之儀ハ、必高知尾まて可致注進候、可被得其意候、此上替篇目候者、是又可申進之候、恐ゝ謹言、

「天正十四年」六月十六日　　家久（花押）

入田殿　御返報

147

「北郷忠虎譜中」

同十四年丙戌六月十八日、　義久公欲誅築紫之黨、催大軍發鹿兒島、同七月二日、入肥州八代、諸將直進至築紫、同六日、陷鷹取城、忠虎勵戰功、家臣福崎左近闘死、同十日、築紫上野介廣門乞降而下城矣、

148

「御文庫廿二番箱五卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「御返書案文　毛利右馬頭殿　到來天正十四年七月於八城」

如芳問今度到大坂、連ゝ御無音之趣、以使節申登候、然者　関白殿被成御對談、剩条ゝ御懇承之儀、被仰含事能下着候、外聞実不過之候、弥藝薩可致純熟事、向後不可有愀變候、猶委細之段五戒房可爲演說之条、令省略候、恐ゝ謹言、

七月　　修理大夫　義久

謹上　毛利右馬頭殿

「末紙ニ左ノ通」天正十三年十二月御返案　從中國飛脚之

謹上　毛利右馬頭殿　　修理大夫義久

149

「御文庫廿二番箱十一卷中」「義弘公御譜中案文有之トアリ」

就筑紫退治、到此表令發足候之處、輙沒落儀、隣邦之覚大慶不過之候、然者爲右之祝言、遮而使書并太刀・織筋到來、御懇志之段欣悅候、猶吉左右重疊可申承候、恐ゝ

150

謹言、

「朱カキ」「天正十四年」七月廿一日　　忠平

伯耆殿

「上書ニ有之」「武庫様御返書　伯耆殿　於肥州八城」

「島津世錄記」

一天正十四年丙戌六月十八日、欲討誅筑紫之黨徒、而義久主七月二日、入守肥之後州八代、則諸軍直征筑紫城、嶋津圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟爲將、嶋津三郎二郎忠隣・北郷讃岐守忠虎・新納武藏守忠元・同子弥太右衛門尉忠増・同姓縫殿助久時父子・川上左京亮忠堅・伊集院下野守久治・喜入攝津守季久・大野權左衛門尉久高爲副將、上原長門守尚近・上井伊勢守覺兼・鎌田出雲守政近・山田越前守有信・本田因幡守・伊集院肥前守久春・鎌田外記・税所新助・吉利下總守・宮原左近將監・稲富新助長辰・遠矢信濃守良時・梅北宮内左衛門尉國兼、其外軍衆先往筑後高良山、七月六日、攻陷鷹取城、于時忠堅戰死也、三郎二郎忠隣被鑓疵云云、　且日當山亦臨威風陷矣、同十日、筑紫上野介廣門下城、以勝山降旗下也、彼廣門所領寶滿之城者、岩屋城主高橋紹運鎭種欲驚(ママ)固之、而令次子弥七郎直次守之、由是同十二日、我兵到天拜嶽、十四日、構陣於岩屋之四面、則秋月種實・豊前之城井弥三郎友綱并長野三郎左衛門尉・龍造寺政家等、引率諸軍而來也、然政家素爲我家之敵、不知其心中之向背、而嫌疑之際、草野宗養・原田伊賀守・筑後之星野九左衛門尉亦來合力矣、當此日也、九州之内唯豊後一國與筑前之鎭種者、不屈大守旗下、故雖再三遣使僧誘之、不肯從矣、同廿七日、進攻岩屋城、權左衛門尉久高・長谷場兵部少輔首功最初也、久冨木攝津介被傷、其外越前守有信・伊勢守覺兼・宮原左近將監・中馬太右衛門尉・江田宮内左衛門尉軍功冠諸兵者也、臨其時而忠長單騎謂敵兵曰、今我起義兵來不若橐弓脫甲降矣、敵城之健將勇士聞之、撫劔疾視對忠長相戰、永長長介法号永與、馳來添力、是時忠長鑓半折身已危、而從軍之士卒戰死者幾多、忠長臣戰死者、宮原伯耆守・山元助六・森崎土佐介也、勘七・宮也、然督戰以進、紹運・鎭種窮而登井樓自刎死焉、其外討捕者一千餘、而城乃陷也、紹運之臣戰死者、有名士略記之、高橋越前守・屋山中務太輔・同姓太郎次郎・伊藤惣右衛門尉・同姓八郎・萩尾麟可・同姓大学助・江渕右衛門太夫・中島治部少輔・同姓四郎・弓削了意・同姓善右衛門尉・土師兵部太輔・同姓七郎・北原内藏助・關内記・三原紹心・伊部九花・築瀨與吉兵衛尉・染但馬守・同姓傳吉兵衛尉・陣三九郎・福田閑與・同姓左馬介・原伊豆守・冨元忍冨・築瀨三河守・同姓新助・馬渡良虎・市川玄蕃允・野田右

衛門大夫・北原次右衛門尉・同姓弥次郎・伊藤次介・三浦式部少輔・同姓外記・加賀備前守・今村大兵衛尉・同姓弥次郎・同姓兵右衛門尉・同姓市丞・中嶋隼人佐・同姓左馬介・同姓大炊助・今村主計頭・同姓・源内・同姓内蔵助・弓削玄慶・帆足備後守・同姓新三郎・荒川隠岐守・同姓伊豆守・國分主計助・同姓三介・長松加賀守・同姓丞・掃部助・土岐了甫・水城喜介・合原因幡守・河崎右衛門尉・同姓次郎兵衛門尉・鬼木左馬助・成冨新五郎・松延勘七郎・石橋弥介・河端勘介・原口喜介・屋山羽右衛門尉・木野大学助・井上主水正・田大蔵助・關勘七兵衛尉・山下刑部丞・同姓九兵衛尉・伊勢民部太輔・田中安藝守・同姓四郎兵衛尉・同姓主馬丞・同姓左介・小島監物・澁江二右衛門尉・大石七兵衛尉・行徳右馬允・同姓次郎三郎・岩橋内蔵丞・園木杢介・藤和泉守・同姓左馬介・同姓織部丞・田原運沢・赤坂運鉄・伊部孫三郎・同姓市正・高尾勘解由次官・同姓治部少輔・同六郎・縁藤式部丞・同姓弥九郎・福島主水正・村山刑部左衛門尉・茂松兵部少輔・同姓彈正忠・萱嶋左京亮・渕上兵右衛門尉・樺島吉介・徳渕備前守・同姓大蔵助・三原和泉守・同姓宗林・轟木三介・村田三郎・小川宮内少輔・同姓新右衛門尉・麻島孫太郎・弓削次郎三郎・同姓弥五郎・古野左馬助・光行源次郎・瀬戸口市丞・稗田四郎三郎・幡崎長門守・同姓隼人佑・中願寺和泉守・同姓孫太郎・平山何右衛門尉・山本右馬允・萩尾弥吉兵衛尉・木村新右衛門尉・千重隼人佐・同姓七介・戸板市丞・黒岩隼人佐・吉野・左京亮・森光彈正忠・内田出雲守・同姓内膳助・原越後守・久保杢助・今村彈正忠・同姓刑部丞・同姓眞慶・同姓重右・衛門尉・平井民部左衛門尉・横小路市助・同姓勘助・久保助右衛門尉・綾部山城守・木野八郎・同姓新兵衛尉・同宮内少輔・同姓弥介・上村刑部少輔・鬼村外記・同松酒右衛門尉・佐藤雅樂助・廣田宗祐・橋本喜兵衛尉・河田久二介・藤勘内・合市介・木下杢助・同姓監物・大原木市介・米倉市介・同姓新四郎・中馬田作丞・財津式部少輔・小川備後守・内山田蔵人・坂口右衛門尉・戸渡喜介・大塚七郎七郎・今村太郎五郎・合藏人助・戸渡刑部少輔・中川三郎・德渕源兵衛尉・市冨善九郎・窯原源内・大町隼人佐・小崎左馬助・同姓喜介・松岡掃部助・吉田三郎次郎・合杢助・天野弥兵衛尉・齋藤十介・冨松與介・中野清爲・安河内三介・清末藤内・垣上縫殿助・生須藏人・野上左衛門尉・中村甚介・同姓右近太夫・藥師寺三介・水城藤左衛門尉・中島新五兵衛尉・同姓新三郎・檀外記・古我杢助・栗木大学助・同姓弥三郎・國分次郎三郎・上原藤右衛門尉・千壽大藏助・今村次郎監物・綾部外記・上野式部少輔・同姓平三郎・園田平兵衛尉・今村治部左衛門尉・縁藤藏人・河原左馬助・窯原出雲守・原右近將監・今村治部左衛門尉・山下金介・中馬勘解由次官・八尋市介・北島監物・中島玄蕃允・笠原孫介・仲勘介・宝珠山伊豫守・田瀉次郎三郎・野村宮内少輔・江上弥兵衛尉・槇左京亮・原口平内・安河内源太郎・床島雲齋・山下六郎・今村金介・同姓藤内・邊原次兵衛尉・梅野左京亮・中島與次郎・長尾左京亮・大町備前守・更原七郎・吉田右京亮・麻生外記・甲斐勘解由次官・安樂内藏助・黒野源三郎・西山織部佐・後藤七郎・高木新五兵衛尉・野村源内云云、我軍喜入掃部助・伊集院左近允・蓑田弥四郎・矢上太郎五郎・有馬弥六・宮原越中守・戰死、其外歩卒等者不知數也、

高橋弥七郎

直次聞岩屋之陥、而立花左近將監宗虎弟也、下寶満之城、爲質而來也、且欲攻立花城、以使僧謂曰、降來是也、若不然當催兵屠汝黨族也、左近將監宗虎後號宗茂、對曰、父紹運鎭種死、捐義欲生非士之志、頃待精兵之來也、此時忠長・忠棟・忠虎・忠元憐察曰、是誠勇士也、徒擊此人則顧非義也、姑欲引退之際、太守義久主送使云、可致歸陣、於是應命歸陣矣、是日岩屋并宝満令秋月守之去焉、筑紫某於高良山會忠棟、出女子爲質、是誠我之所欲也、將向肥後相携其人之時、筑紫之計輙變、彼向居城而逃走也、故悔惜含憤而到八代、雖然愛憐人力之労衰者、太守義久主之仁意也、軍衆遂共歸國矣、

151

『長谷場越前自記』

一御大將軍義久様御供ニ、武庫様・金吾様・家久様、押並て右馬頭、此外之大名衆、諸軍勢ニ到迄前後の隨兵

致宛、天正十四年丙戌六月十三日ニ、御國元を御出馬有て、肥後國八代ニ御在陣を被成宛、先陣衆を如筑後被遣、多年緩疎を致すニ依て、筑紫御成敗之事被仰出趣ハ、討手之御大將ハ、圖書頭久長御出陣被遊、伊集院右衛門太夫・喜入攝津守・伊集院下野守・上原長門守・上井伊勢守・鎌田出雲守・山田越前守・本田因幡守・伊集院肥前守・鎌田外記・税所新介・吉利山城守・宮原左近將監・稻留新介・遠矢信濃守・梅北宮内左衛門、此外之軍兵も我先ニと進出て被令御供、日數經『十四年七月三日ノ事也』てカウ良山ニそ陣取ラレ、夫ゟ秋月種眞ニ注進す、種直父子も喜悅之眉を開れて、國中を相催し、各參陣被致て御祝儀を被申上、今三日の御評定事成りて、筑紫『七月六日ノ事』か居城之境目へ軍兵を被打出、名も高橋を掛渡し、敵の出足を待居たり、

152

『勝部兵右衛門聞書』

一天正十四年丙戌夏の比より、筑紫立の評儀あり、彼上野守弘門去ゝ年の比、御旗下ニ可參由申けれとも、吳變して豊府方と成、誠ニ疎意の至也、可加誅伐とて、御出陣の評儀相定り、同六月十三日、大守義久・同義弘・同歳久・同家久・薩摩守義虎・圖書頭忠長、其外一門宗徒の人ゝ相具して、肥州八代へ打入給ふ、去程ニ筑紫へ打立先陣の大將ニハ薩广守義虎・圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟・喜入攝津守・吉利山城守・伊集院下野守・上井伊勢守・鎌田少外記・同名出雲守・山田越前守・本田因幡守・上原長門守・伊集院肥前守・税所新介・宮原左近將監・稻留新介・遠矢信濃守・梅北宮内左衛門尉、宗徒の勇士數百人、都合其勢二萬余騎、筑後をさして攻上る、同七月三日、高良山へそ着ニける、即八幡の座主打向へに參らるゝ、自夫秋月種實息種直筑後の諸大名皆參陣申されける、

153

「日向記」

一天正十四年六月ヨリ筑紫立ト定、義久八代ニ逗留有、嶋津圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟なと大將ニテ、七月廿七日、筑後高良山着、七月六日、タカトリノ城攻落シ、其日日和カ山モ落城ス、同十日ニハ筑紫弘門カツ山ヲ下城シテ、薩广へ渡ス、彼筑紫外城ニ宝滿ト申城在、是モ請取知行セント在ケルニ、高橋法雲「本マヽ」トテ岩屋ノ城主ナルカ、サラハ御陳替サセ玉ハントテ、十

二日ヨリムサシノテンハイ山高(嵩・巒)へ着、同盆ノ十四日ヨリ岩尾(屋カ)ヲ取卷陣ヲ付ラルヽ、本ヨリ秋月・高橋モ參陣也、豊前ヨリモキイ殿・長野殿三千ニテ參陣也、同國草野原・原田馳參、築後ノ星野・草野モ參ラル、此大軍ヲ以七月廿七日押寄攻果シ、法雲ヲ始八百餘人討捕、宝滿モ下城也、彼橘ハセウ雲カ嫡子也、橘殿ノ養子ニ成居玉シカ、薩广ノ手ニ不隨、サアラハ直ニ陣替仕玉ント有ケレトモ、八代ヨリ打續餘リ長旅ナレハ、先打納宜ルヘキヤト詮議ニテ、岩屋・宝滿ハ秋月ニ預玉フ、嶋津勢歸陣也、築紫殿ハ高良山ニ差出玉フ、伊集院右衛門太夫ニ參會シテ、人質娘ヲ出シ、肥後ノ如ク越ルヘキニ定シカ、薩广衆打立紛ニ引返シ、亦築紫ノ城ニ馳篭ル、去共無力先八代ニ着陣、義久モ人數ヲ打入玉フ云ゝ、

154

『上野隼人覚書』

一天正十四年丙戌七月六日、辰ノ刻ニハ高取ノ城ニ攻登て、隼人佑ハ三十九才ニ而、土師兵部ニ懸合一足不去ニ合戰シ、一ツ枕ニ指違果也、芭蕉葉のもろ雲落る露(「本ノマヽ」)之身ハ、うへのも名ハ高とりの露と成テ、遂御奉公ヲ候、仍隼人佑最後如此、其子千代太郎云ゝ、

155

『長谷場越前自記』

一懸りける處ニ、運は筑紫の終てなれや、同七月六日(『十四年』)之事成るニ、薩摩衆と見よりも、筑紫方の者共が手次之程を見せんとて、すか〳〵と懸り相ひ防戰を致せしが、其場を引崩す、是を見て御方の兵もの我眞先ニと切り懸り、筑紫方の町口を打破り、板城戸ニて致一合戰宛、此城戸も取破り着け入れて、筑紫か居城を乗り取れは、數ケ度の合戰有る中ニ、河上左京亮と名乗て、今を再期の事成れハ、打太刀之手柄ニハ、雲手角縄十文字八ツ花形と云物ニ、散〻ニ切たりけるか、たのミは何か勘うべき、數か處の痛手ニ勞れては有りなから、太刀下ニて分捕を被成宛、あけニ染てそ伏たりける、彼を見る人〻者、篭手のくさりをぬらしけり、其外の軍兵も我も〳〵と詰入て、名を後の世ニ殘けり、扨又諸國ニ聞得たる筑紫ハ山ニ逃入て、命を延んと安するニ、家之恥者角計り、山中ニて爲方なさの余りニ一首を侍りなん、

ながらへはまた世ニ出ん折やある山の奥迄照せ月影

と打詠して詰逃ニそ逃たりける、此事を聞及ヒ、人は物〻笑へ共、其以後ハ罷出て右衛門太夫忠棟ニ參會して、柴の戸ニ月日を送り居たりしが、薩摩方の軍兵之開陳有し、其後ニ草野・星野、高良山ゟ筑紫か城ニ致在番刻ニ、世上の躰を見合て、我か古城を切り返し、武士の謀略とは懸る事をや可謂、一日か日の中ニして、遂本意仕合は誠哉、ミやつくわの身をつゞむるハ、其身を延んが爲なりと侍りしも、角やと思ひしられけり、

156

『勝部兵右衛門聞書』

一同七月六日、境目に軍勢ヲ被差出処ニ、筑紫の弘門是を見て、勢を出て防き戰ひ、去れとも薩广勢大軍成か故、其場を追崩し鷹取の城に追入、其侭唯攻に攻ける間、鷹取城も和賀山其日落ニけり、追付筑紫か居城へ押寄、外栫を打破り、本丸口ニて各數ケ度の合戰あり、中ニも川上左京亮心勇武士成ハ、方此(彼)方ニ馳合せ働けるか、數多手負心ハ剛成れ共痛手ニ疲、あけに染てそ伏れたり、是を見る人〻、惜哉人やとて籠手を濡さぬ者そなし、其外所〻の軍兵とも、我も〳〵と責入て高名究、或ハ打死して、名を子孫ニ殘し、昔語と成ニける、拠筑紫ハ力不及難叶けれハ、死を遁んとおもひ、同十日に勝山を下城して、薩广方ニそわたしける、されとも薩广の人〻心惡やおもひけん、山の方ニ逃入落行ける山中ニて、せんかたなさのあまりニ古歌をおもひ出し、一首此ニそ連ねける、

なからへハ又世にいてん折もあり山の奥迄てらす月かけ

と打詠、漸〻山を逃出けるとかや、味方の人〻是を聞、嗚呼しらけたりとそ笑ける、彼筑紫か外城ニ宝滿と云城あり、是をも更取んとしける処ニ、筑前の岩屋の城主高橋入道紹運、彼宝滿を薩广に渡スましきとて、番手を入楯籠り、わたすましきニ定りける、然ハ紹運か居城を可攻とて、同七月十二日御陣替あつて、武藏といふ処ニ着給ひけり、此所ハ菅承(丞)相の旧迹、天拜か嶽の麓也、各南無天滿大自在天神と奉禮、此度の嘉運をそ祈りける、

157

『仝』

一明ル一日、息を休兵儀調へ、同十四日に岩屋の城ニ押寄陳ヲ着ケ、十輪轉(クルリ)と取卷、即筑前の秋月・高橋馳被

參、豊前の城井・長野三千余騎ニて參りたり、筑後原田・冨饒・蒲地・黒木・溝口・西牟田・久留目入道・星野・草野も參りけり、去程ニ野頸ハ肥後・日向の軍勢、大手ハ隅薩の兩勢、東ノ山ノ肩ニハ豊前の城井・長野・兩筑州大名共、大旗小旗相印旗、秋風ニ吹靡し、飄々タルハ美ミシカリケル有さま也、肥前國の政家も軍兵三千余騎相上せ陳場を乞ひけれは、少間ヲ隔て陳場ヲ賦リ、嶋津一手ニて一戰仕らん、御見物有へし、若落去遅留仕候ハヽ、御加勢あるへしと被仰けれハ、少隔り陳取居たりけり、薩广ハ親の敵なれハ、仕合を見後切せんと思ふ心もあらん、心惡かりしとそ申ける、然とも九州ニハ豊後計殘りけり、七八ケ國の軍勢參陳して、万ゝタル勢焱しく見えけれハ、心の外ニそおもふらん、去程ニ岩屋の城を引圍ミ、降參すへきよし、兩三度仰せけれとも、彼紹運と云て天性心剛成者なれハ、下城せんといふ氣色なし、明日ハ城攻タルヘシトテ、懸梯を調持運ひ動しけれとも、其ニも臆して下城せんと云氣更になし、秋月筑前守種実此由を見るゟも、不便成次第也、一曖仕らんとて使僧使者を以て、今豊州の儀を伺ひ、守賢儀を心猛くおもひ玉ふ共、國中の防戰に不可似、今嶋津家の勢を見るに、爭か御運を開へきとも不覚、死を一片に爲給ひても何の詮そ、薩太守ニ降參シテ、自今以後忠功ヲ被成ナハ、乍不及可然も執達いたすへしと申けれハ、高橋入道聞よりもおもひ、益鏡曇ぬ月の都より、関白秀吉公の上意被仰下、忝も有甲斐心の闇を晴すへし、其上數年大友家ニ隨ひ、于今背豊州、露命ヲ惜て此急難を延たり共、千年を持へきか、居城ニて腹切て、法師か頸を嶋津の家に渡し、名を後の世に留、賢臣不事二君の法を守、武士の遂本意事、今生のおもひ出と存る也、種実の御芳志兎かう申に不及と返事を申きられたり、敵も慈も聞是、嗚呼剛成武士迚哀を催さぬ人そなし、扨ハ無是非次第也、時刻不可移とて、同七月廿七日の寅の一天ニ、四方より押寄吐氣を動とそあけ、石火鏃・鉄炮放しかけ、呼き叫、其聲天地振動して煙塵天ニ上れハ、物の色地も不弁、人ニハ人重て、懸梯ヲ取掛攻上る程ニ、城の内兵死を不顧防戰して、於大手伊十院左近允・矢上太郎四郎、八代の住人蓑田彌四郎比類なき振舞ナルカ、即討死セラレタリ、久留攝津介ハ痛手負て退ける、敵詰の城引籠て、今を最後と相戰ふ、攝津守二男喜入三郎

四郎・有馬源左衛門・宮原越中打死す、山田越前守・上井伊勢守・宮原左近將監石打ニ岸より下ニ打落され、身体危けれハ人ゝ助退ニけり、肥後隈本の住人井牟田宮内三郎・八代住人的場五兵衛も手負ぬる上、石打ニ打れてそ退にける、日隅薩三州の軍勢諸外城の侍等打死し、或ハ石打ニ合、或ハ合戰高名する人多しといへとも、幾人と是を記しかたし、寄手の勢も死を不事ト、手負死人の上ニ相重て攻上ル程ニ、早一二の丸ハ攻落し、詰の城ニ切入れハ、紹運入道右の腕に痛手負、今ハ早最後そとて、矢倉の上ニ登て頸威高ニ差伸、默止してこそ居れたり、寄手の兵落合て、紹運法師の頸をそ取にけり、此岩屋と申ハ岩切峻して天に聳タル高山なり、此城ヲ攻ん事、凡慮の所爲ニてハ叶ひかたけるか、宝輪空飛時ハ瓦礫荊棘も平地と成と云事誠也、其日も已に申刻ニ落去しけれハ、觀世音寺之西之方ニ取備へ勝吐氣をそ作りける、紹運を始として八百余騎そ滅ひけり、其翌日若き人ゝ足輕共を相催し、箱崎詣ニこと寄立花表ニ打出、兵煙を燒立れハ、其邊り仰天して、豊前國彦山の座主の坊よりも使僧を被指上、扨又此ほとの窮屈休んとて、箱崎八幡宮參詣し、或安樂寺參、天滿天神を伏拜し、飛梅老松殿をも再拜して、本地堂ニ參、御池の橋を渡り、相初川をも打詠、昔元暦の比とかや、安德天皇の古迹宰府の大裏なと一見して、薩摩の人ゝの形勢誠ニ由ゝ敷そ見へニける、又立花の宗虎ハ彼紹運の嫡子立花の宗益の養子也、直ニ御陳替あつて退治有へしと評定ある処ニ、八代より餘り長陳なる間、先歸陳有へしと被仰上けるニ依て、岩屋・寶滿をハ秋月種実ニ預置給ひ、隅薩の勢八代のことくそ引れける、其時筑紫上野守ハ高良山へさし出、右衛門太夫忠棟ニ參會し降參しけるか、薩广勢引陳の其紛ニ、世上の体を見刷ひ人質出し、我身ハ彦山ノ方ニ參とて筑紫江引返し、己カ居城に走籠る、彼筑紫ニハ草野・高良山執行ニ預置給へハ、番手を入て持ける処ニ、彼の番手の勢をも追拂ひ切取し事共、百日の内ニして己か遂本意、武略の至拔群なるとそ申ける、然共此節ハ力ニ不及とて、九月廿日ニ八代のことく先ゝ歸陳也、此度の軍陳の疲労をも休んとて、諸國の大名小名相集り、澁谷与吉郎に三日の御能させ人の心をも慰給ひ、斯る目出度折節ニ、先ゝ御歸陳有へしとて、太守其外一門の人ゝ軍勢を卒て如薩广引給ひけり、五嶋・壱岐

・對馬者、去年加世田の住人伊尻伊賀守を被差渡ける処ニ、皆御慈ニ可參よし申されけるか、岩屋落去之折節、筑前へ直ニ使者ヲ差上せ、御祝言をそ申されける、其比天下之主織田上總介平信長公の臣、美濃源氏土岐の一族、惟任日向守北近江半國を知行しける者ナルニ、二条の御城を攻崩し信長公を奉殺、羽柴筑前守藤原の秀長、山崎ノ合戰に勝て日向守を打果し、卽天下の主と成、無程昇関白家給、天正十四年丙戌春、大友宗麟入道上洛し、嶋津義久日向の伊東追却して、自其肥後・肥前・筑後・筑前迄も打隨へ、近國ニ振威を、今の如きハ豊後・豊前迚も難抱覚無念之至ニ存候得共、今ハハや我力ニて及かたし、哀借御威光嶋津を退治し、大友の家を殘て給り度候と申されける、其折節薩广よりも鎌田刑部左衛門尉を差のほせ、九州安堵の御免許を申されける、其時関白天下兩方の儀を兼、難默止おもひ給ひけるか、然ハ國分の御吳見有とて、九州國分の次第、豊後・豊前ハ其侭ニ、筑後半國・肥後半國大友の義棟知行せらるへし、大隅・薩广其侭ニ、日向半國・肥後半國・筑後半國嶋津義久可爲知行、日向半國をハ伊東知行仕るへし、肥前一國ハ毛利輝元ニ遣すへし、筑前一國を天下の公領たるへしと被仰出、黑田歡兵衛尉・千石權兵衛尉兩大將、九州國分として下されける、未其沙汰聞えさるさきニ、薩广軍勢筑前國へ攻上り、岩屋の城を攻崩さん事共を委く都へ相聞えける、然共千石權兵衛尉ハ土佐之長宗我部右衛門尉を同心して、豊後の國へ押渡り、大友義棟を同心して豊後國へ打越らる、黑田歡兵衛尉ハ毛利輝元を同心して豊前國へ着れける、仍て國分ケの曖なとせんとし給へハ、城井・長野・秋月・高橋なと、偏ニ薩广の軍勢肥後・日向兩口より豊後へ乱入の由相聞えけれハ、千石ハ大友ヲ同心して豊後のことく引返さる、其外諸國の勢も騷きあへり、皆國〻そ引入ける、されとも黑田歡兵衛尉ハ相留り、漸く豊前を相靜テそ居れける、

158

「義久公御譜中」

天正十四年七月十日、筑紫上野守廣門請降下勝山城矣、廣門所以領知寶滿城者、岩屋之城主高橋紹運欲警衛之、而敎二子彌七郎直次守焉、由是同十二日、我兵到天拜嶽矣、此所古昔菅丞相向天爲祈誓矣、天哀之也、得天滿大自在天神号、以故云尓、

天正十四年七月十四日、我之軍衆去天拜嶽、陣筑前州稱

武藏之地、則秋月三郎種實・豊前之城井彌三郎友綱及長野三郎左衞門尉・龍造寺肥前守政家等、率軍衆到其地矣、然而政家素爲嶋津氏之敵、未知心服非無嫌疑也、草野宗養・原田伊賀守・星野九左衞門尉亦來合力矣、今也九州中未屈旗下者、唯豊後一國與筑前高橋紹運也、

於武藏凝評議經三五日、而後陣於岩屋四面、彼城山高聳斷岸絕地也、東山之肩者長野氏・高橋氏・秋月氏・筑之前後州士卒陣焉、城西者薩摩・大隅・肥後三州之士卒陣焉、野頸者日向州士卒陣焉、晝夜吐氣飛羽箭放鐵炮・石火矢・火箭、如雷電轟鄕里、雖然城主紹運定必死不降旗下、擇吉日良辰欲乘城之際、七月廿四日之夜暗、有忍欲通城裏者、飫肥之士斬得之、有所帶來之書、披見之、則中國之士神田宗四郎當時在文字「門司」關、可京都中國軍衆急速救來、岩屋城可運堅固之謀略云〻、

同廿六日夜半以後、周圍陣衆放鐵炮、宛如鎭迅雷之不止、迄辰之時、秋月氏・城氏・宇土氏三氏之士卒破却外郭、得敵首者三十餘員、因玆諸陣士卒以此之時、謂佳期欲乘城、然而未致評議、楚忽城責不可然、諸將止焉、

天正十四年七月廿七日、俟寅時附岩屋城岸揚鬨攻登、於本口伊集院左近允・蓑田彌四郎・矢上太郎五郎盡筋力挑鬪遂戰死矣、大野七郎久高・長谷場兵部少輔首功最初也、久冨木攝津介被傷、向江宮內左衞門尉・中馬太右衞門尉同致合戰、次隈本之士井手田親綱主從二人、八代之士的場五藤軍勞抽衆兵矣、山田越前守有信・上井伊勢守覺兼・宮原左近將監指揮軍功甲于諸兵也、丁此之時、島津圖書頭忠長單騎直前、謂敵兵曰、吾今起義兵來逼汝、以血氣勇、與忽至死亡、不如脫冑弛弓降伏旗下全身、敵兵聞此之言、撫劔疾視對于忠長挑戰、于時永長長介（法名永與）、馳來合力、忠長之鎚半折、從者戰死（宮原伯耆・山元助六・森勘七・宮崎土佐）、多、而身亦危矣、然而督戰以進、各不顧死自四面乘城裏、由是紹運謀略盡身體倦、而登井樓自刎死焉、其外屠殺者一千餘員、而城乃陷實未時也、紹運之家臣戰死之中、有名之士略記之、高橋越前守・屋山中務大輔・同姓太郎次郎・伊東懲右衞門尉・同姓八郎・萩尾麟可・同姓大學助・江淵右衞門大夫・中島治部少輔・同姓四郎・弓削了意・同姓善右衞門尉・土師兵部太輔・同姓七郎・關內記・三原紹心・伊部九花・築瀨與吉兵衞尉・染但馬守・同姓內藏助・北原內藏助・陳三九郎・福田閑與・同姓左馬助・原伊豆守・富元忍冨・築瀨三河守・同姓新介・馬渡良虎・市川玄番・野田右衞門大夫・北原次右衞門尉・同姓彌六兵衞尉・同姓外記・加賀備前守・今村六兵衞尉・同姓彌次郎・伊東次介・三浦式部少輔・野口右衞門尉・福田新右衞門尉・同姓兵右衞門尉・更原右馬允・同姓次郎三郎・辻治右衞門尉・同姓市丞・中島隼人佐・同姓左馬助・同姓大炊助・今村主計頭・同姓永澤・同姓喜介・島同姓右馬允・同姓弥五郎・同姓右兵衞尉・同姓源內・同姓內藏助・弓削玄慶・帆足備後守・同姓刑部丞・荒川隱岐守・同姓伊豆守・中野九郎・同姓三五兵衞尉・同姓新三郎・窪山內藏丞・同姓三介・長松加賀守・同姓播部助・土岐大隅守・同姓喜介・國分主計助・同姓了甫・水城喜介・合原因幡守・川崎右衞門尉・同姓次郎兵衞尉・鬼木左馬助・成富新五郎・松延勘七郎・石橋弥介・河端勘介・原口喜介・屋山羽右衞門尉・木野大學助・井上主水正・長田大藏助

・關勘七兵衛尉・山下刑部丞・同姓九兵衛尉・伊勢民部大輔・田中安藝守・同姓四郎兵衛尉・同姓主馬丞・同姓左介・小島監物・澁江二右衛門尉・大石七兵衛尉・行徳右馬允・同姓次郎三郎・岩橋内藏允・園木杢助・和泉守・同姓左馬介・同姓織部丞・田原運澤・赤坂運銕・伊部孫三郎・同姓市正・高尾勘解由次官・同姓治部少輔・同姓六郎・緣藤式部丞・同姓彌九郎・福島主水正・村山刑部左衛門尉・茂松兵部少輔・同姓彈正忠・萱島左京亮・渕上兵右衛門尉・樺島吉介・德淵備前守・同姓大藏助・三原和泉守・亮・同姓宗休・轟木三介・林田三郎・小川宮内少輔・同姓新右衛門尉・麻島孫太郎・弓削次郎三郎・稗田四郎三郎・同姓彌五郎・古野右馬助・光行源次郎・瀨戸口市丞・幡崎長門守・同姓隼人佑・中願寺和泉守・同姓孫太郎・平山何右衛門尉・千里隼人佐・同姓七郎・戸坂市丞・黒岩隼人佐・吉野左京亮・森光彈正忠・内田出雲守・同姓内膳助・原越後守・久保木工助・今村彈正忠・同姓刑部丞・同姓眞慶・同姓重右衛門尉・平井民部左衛門尉・横小路市助・同姓勘介・久保助右衛門尉・綾部山城守・木野八郎・同姓新兵衛尉・花田宮内少輔・同姓彌介・上村刑部少輔・鬼村外記・岡松酒右衛門尉・佐藤善丞・八尋源介・加藤雅樂助・廣田宗祐・橋本善兵衛尉・富久二介・藤勘内・合市介・木下木工助・同姓監物・大原木市介・米倉市介・同姓四郎・中島田作丞・財津式部少輔・小川備後守・内山田藏人・坂口右衛門尉・戸渡喜介・大塚七郎・今村太郎五郎・中川三郎・德淵兵衛尉・同姓兵右衛門尉・市富善九郎・篠原源内・大町隼人佐・小崎左馬助・同喜介・松岡掃部助・吉田三郎二郎・合木工助・天野彌兵衛尉・齋藤十介・富松與介・中野清爲・安川内三介・清末藤内・垣上縫殿助・生須藏人・野上左衛門尉・中村甚介・同姓右近大夫・藥師寺三介・水城藤左衛門尉・中島新五兵衛尉・檀外記・同姓新三郎・古賀木工助・栗木大學助・同姓彌三郎・國分次郎三郎・上原藤右衛門尉・千壽大藏助・同姓監物・綾部外記・上野式部少輔・同姓平三郎・園田平兵衛尉・今村次郎三郎・米藏助左衛門尉・緣藤藏人・河原左馬助・篠原出雲守・原右近將監・今村治部左衛門尉・山下金介・中島勘解由次官・八尋市助・北島監物・中島玄番允・笠原孫介・仲勘介・宝珠山伊豫守・田鴻次郎三郎・床島雲齊・山下江上彌兵衛尉・槇左京亮・原口平内・安河内源太郎・野村宮内少輔六郎・今村金介・同姓藤内・邊原次兵衛尉・梅野左京亮・中島與次郎・長尾左京亮・大町備前守・更原七郎・吉田右京亮・麻生外記・甲斐勘解由次官・安樂内藏助・黒野源三郎・森善兵衛尉・西山織部佐・後藤七郎・高木新五兵衛尉・野村源内等也云云、

我之軍中亦伊集院左近允・蓑田彌四郎・矢上太郎五郎三輩書于前段、然而再記于此、喜入掃部助・有馬彌六・宮原越中守及宮崎之士關治部少輔・野村左近・唐仁原藤七兵衛尉・黒江萬助、清武之士佐多紀伊介忠辰・河野筑後守通泰・藤見長助、高城之士遠矢軍兵衛尉、高山之士川崎大膳亮、福島之士加藤大學助等戰死、此外諸卒及被傷者不遑記焉、紹運之二男高橋彌七郎直次立花左近將監宗虎之弟也、聞岩屋之陷、而下寶滿城、爲質而來也、

天正十四年七月廿九日、在岩屋之軍衆進于立花城邊、刈拂作毛矣、

159

「左衛門尉歳久譜中」

天正十四年丙戌、欲伐筑前國筑紫之黨徒、而七月二日、太守義久主入肥後州八代、至于仲秋、陷筑紫城及寶滿城・岩屋城歸陳、又豊後州大友氏爲島津氏之仇者尚矣、其憤無所欲止、故發大軍將討之、　大守義久主赴于日州、暫駐于三城之鹽見、使弟中務大輔家久爲大將、領一萬餘騎、伐入於三重、又　兵庫頭義珍主爲大將、領三萬七百餘騎、自肥後封彊發向於南郡、歳久亦隨之、勞彼此之軍務者不可勝言、志賀道運既降參屬旗下、則入守白仁城之際、畀鴇毛馬瀨崎野也、於道運矣、警衛於此地者尚矣、于時　殿下秀吉公有西征已下于關渡之聲、由是屬于旗下者大半、三

月上旬變心爲敵、故各入府內、于時木食興山上人・一色宮內少輔來勸和諧之事、而不合于諸將之心、於是相議曰、在于他州對于大軍、徒日夜倦軍務、不如速歸于我國而依薩隅日要害之地待其時、又分衆於二、其一從義珍主・家久退日向路、其一隨歲久・右馬頭征久向肥後州令退去焉、歲久三月上旬罹風疾手足痿痺、不得往于府內、未去白仁、國敵日增時加、自西自東自北自南逼于我來、是以不可不退去、欲告之於　義珍主已絕通路、不得結其首尾、爰有長野隱岐守者曰、吾爲歲久之价使往于府內、可達于件之事、天若與幸於吾得通達、則隨日向路退於自國、而後可反命、不然則末後一別有只今矣、已進發也、其氣象甲于軍中可謂暴虎馮河之勇也已、三月七日夜、有去白仁欲赴歸路之評議、而無歲久可退去病身之議、于時肥後周防介有言曰、病床之歲久捨置乎否、於玆各曰、何可捨置、救護以共俱可退、以周防之一言得諸將之援、而後赴歸路之際、敵軍發鬨聲於四面、大野七郎久高（後辭大野爲樺山家督、稱權左衛門尉者也、）有歲久之側曰、前後左右向何方可防禦乎、歲久曰、聞其聲之遠近、後近、先可向後防、忽反輿以口勿彷徨、扣輿者頻也、弟子丸右京亮亦指揮、于時種子島軍代西之村越前守領種子之士卒、對當敵發鐵炮拒之者孔矣、家臣宇多長門守・山元吉右衛門尉・谷山能登守等盡筋力以逆之、漸遠而後前途左右悉以追退、如斯者不知幾十度、雖然切通追退遁虎口、以入我之國、而後無長野隱岐之問生死知者、哀哉、

160

「歲久猶子三郎次郎忠隣譜中」

天正十四年丙戌、欲伐筑紫之黨徒、而七月二日、　太守義久主入肥後州八代、諸軍直向筑紫城、忠隣亦爲副將之列、故領軍衆、且　太守令遠矢信濃守・木脇伊賀法師正徹爲近從助忠隣若年未知戰場進退、七月六日、欲陷鷹取城、各進寄矣、忠隣通燒山爲黑面競進、已去城門殆三十間、爰正徹附土瓶於鑓來、家臣脇元城介見之、則水器乎請之、洗忠隣之面、而後先乎忠隣爲楯寄城之外門、執格子不離、忠隣對强敵合鑓（和俗以戈爲鑓、）之際、被干戈之傷、雖然幸而免死、城介不去一足戰死、勇哉、哀哉、今日川上左京亮忠堅亦遂戰死矣、

同月廿七日、攻岩屋城、忠隣從取添口直進攻登、城乃陷矣、委曲記于　太守譜中矣、

161

「圖書頭忠長譜中」

天正十四年丙戌之季春、龍造寺政家・秋月種實已下諸士悉出質以堅心服之盟約、唯筑紫上野介廣門匪啻變前約不出質、且曰、與大友當島津氏之爲讎敵、又隈部但馬守親泰父子叛逆之企既顯然也、由是催薩隅日之士卒、同年六月、　太守義久主・兵庫頭忠平引率大軍赴肥之後州、七月二日、入守八代、則使伊集院右衞門大夫忠棟・忠長爲將領大軍、直向筑前州筑紫、先往筑後高良山、同六日、陷鷹取城、同日日當山亦陷矣、同十日、廣門降勝山城屈旗下也、廣門之所領寶滿城者、岩屋城主高橋紹運欲警固之、而教次子彌七郎直次堅守、故同十二日、我軍衆到于天拜嶽、而同十四日、構陳於岩屋四面、則秋月・城井・長野・龍造寺・草野・原田・星野等亦率軍衆來合力矣、同廿七日、丁攻岩屋城之時、忠長單騎前進謂敵兵曰、今我起義兵來所圍汝之城者嚴密、而無透一線之放生路、汝等以匹夫之勇忽所斬戮、不若脫冑降我全身矣、城裏之健將勇士聞之、則撫劔疾視對忠長痛相戰、于時永長長助（法名永與）、走來加他力矣、忠長所持之鎧半折、身亦將及危急、然而督戰屠殺當敵以進、紹運鎭種矢盡弦絕筋力亦倦登井樓、以自刎死焉、其外斬獲者一千餘員、而城乃陷也、所從忠長之家臣遂戰死者、宮原伯耆守・山元助六・森勘七・宮崎土佐介等也、聞岩屋之陷、而後高橋彌七郎直次（紹運之次子也）、下於寶滿城爲質而來矣、雖然立花城未降旗下、故差使僧謂渠曰、降來是也、若不然者當發軍衆圍汝之城郭麾黨徒焉、立花左近將監宗虎（「統イ」後改虎字爲宗茂、紹運之長子）、對曰、老父紹運鎭種不懼大軍、而既遂戰死、我何亡士之志捐義欲生乎、宜速待精兵之襲來、于時與伊集院右衞門大夫忠棟・北鄕讃岐守忠虎・新納武藏守忠元等俱憐察曰、是誠勇義之士也、徒伐此人、則非知仁勇、而姑欲引退之際、　太守義久主差价使有歸陣之命、故岩屋及寶滿令秋月種實爲警固、而所以歸陣也、

162

「樺山權左衞門久高譜中」

天正十四年丙戌七月二日、欲責筑紫之城、島津圖書頭忠長・伊集院右衞門大夫忠棟爲大將進發矣、先往高良山、七月六日、攻落鷹取城、同十日（「九日イ」）、欲攻筑紫之居城、若武者等不廻思慮、忽然至于城下、敵軍開城門競發出、而同心意不顧死爲防禦、吾軍不能攻戰、已退來于中取之前、于時久高向强敵將追退、冑小川伊豆守者、無一足之爲退去提鎧衝來、久高振大刀致發向、散火挑戰、當敵捨鎧前寄、久高亦不爲退、引組而欲決勝負、久高已組負爲下、當敵

拔小太刀欲斬久高之頸、久高亦以太刀欲切敵首、而太刀長當敵冑不得屠殺、以左手押退敵刀、故左拳切疵蒙三四ケ所、良移刻、時見家臣等之到、則勇力乍發討殺當敵、斬頸持右手曰、大野七郎討捕强敵矣、且至于忠長之前備於件首、若武者等見之、則競進至于城下、不顧死爲合戰者數刻、而終陷焉、筑紫某者生捕畢、

163

「北郷忠虎譜中」

同年七月十四日、爲攻高橋紹運所楯籠岩屋城、而構陣於四面、搦手笠之陣者忠虎警固之、同二十七日、忠虎自倚岸上楯面矢來不知幾千萬、家臣財部平右衛門・兒玉越後先登名謁、川島縫殿助戰死、遂陷城、紹運死于茲、嫡子立華左近將監宗虎在立華城、雖欲降之宗虎守勇士之義、極必死籠城、忠虎相議島津圖書頭忠長・伊集院右衛門太夫忠棟・新納武藏守忠元、是誠勇士之本意也、殺彼非義、暫欲退陣、　義久公被命可歸陣之由、依茲歸國矣、　義久公感岩屋之軍功、賜寶刀助廣於忠虎、傳于子孫、

164

「樺山兵部太輔忠助譜中」

有秋月三郎種實者、既屬于　太守之旗下、種實有言曰、筑前州三笠郡中有稱岩屋之城、高橋紹運所居之地也、陷彼城入手裏、則於豊後州與筑後州、豈有一人之不屈旗下者乎、是以天正十四年丙戌七月十四日、島津圖書頭忠長爲大將、陣於岩屋之四面、肥後・肥前・筑後・筑前・豊前州之所以入手裏之軍勢咸以在陣也、此時日州騎步遲參、故於八代不得見于　太守、無念之至也、愚息規久罹病痾、而不得進發、是以忠助與日州士卒俱、岩屋城邊有爲捨置取添之栫、責寄于切岸之際、紹運之嫡子者守立花城、二男者守寶滿城、故敵勇士等從彼等去者多矣、是以岩屋宛若無人、忠長雖遣使僧可降參之旨及再三達、敢不承引、因茲同廿七日、以半夜爲寄城下之期、待鷄鳴而發鬨音、城裏之勇軍等飛矢擲石發鐵炮、其響如雷霆之轟、當矢石死者幾庶也、忠助亦前松楯之敦厚、而將過半岸之時、所投之當大石、冑碎爲水塵、雖然不去所向之地、日出則寄芝涯、巳時則附堀際、故隔一之屏爲合鑓防戰、其鑓爲敵被切折、則替佗鑓、而勞筋力移時刻、先忠助之前者、樺山宮內少輔・同姓刑部左衛門尉・同新左衛門尉・同右衛門佐・同大藏少輔・同六郎兵衛尉・同大膳・早崎甚右衛門尉・同姓掃部兵衛尉等也、城裏之勇士自矢藏至屏上、無間隙所以防禦之以鑓・長刀、味方數輩蒙疵有倒懸者、

忠助欲押留之而不能、與手負俱落入于深谷矣、少焉得元氣、又責登于屏際爲下知曰、若不陷此城、則不可一人之有退去者、露命存亡有今日云爾、迄于午未之間、越屏者初於日州軍中、紹運以下數十人討捕畢、于時忠助吐廣言者、今更雖悔無甲斐、件岩屋城者免于秋月種實、諸勢者向高良山開陣也、其日者渡隈代川屯於高良山之方、日州軍衆者今日爲殿、故不渡川、而以俟一夜之白矣、到于高良山後今度於岩屋、當石擲落入堀底其痛漸增、故得歸國之免、解纜於高瀨、著水俣之岸歸著堅利、而所以加療養也、

165

「大口士濵川西市丞覺書」

天正十四年七月七日ニ、筑紫岩屋之城を責落、人躰ニ（高橋紹運）しうわん樣、城内衆八万餘騎打取被成候由也、其外九ケ國之分の大名・小名皆〻薩摩御旗下ニ罷成候故、大勢共中〻無申限之由也、御家記ニ有之、あら〳〵書写置也、

一天正十四年春之比、大友之宗林上洛して　関白へ木〻（「本ノマヽ」）ハ日向已來も嶋津殿方ほそめられ無念也、肥後・肥前・筑後・筑前も薩摩方押とられ、無念之至と存候、関白樣を奉賴而、大友之家を殘し被下候樣ニと訴訟被申上候ニ付、御領掌被成候、其折節薩摩方爲御使、鎌田刑部左殿都へ御上せ被成、九州之御侘被成、関白樣方も薩摩大隅其外ニ肥後半國・筑後半國・日向半國嶋津殿へ御給之由也、日向半國ハ伊東殿、豊後・肥前半國は大友殿、肥後半國ハ毛利殿へ遣したまふへし、筑前一國は関白樣御領地たるへしと被仰下ける折節、筑前之岩屋江打出かけたまふ、此岩屋の儀いまた都に不聞得内に黑田殿・千石殿九州國わけとして下たまふ、千石殿ハ豊後へ押渡、大友殿同心ニて豊後へ越給ふ、黑田殿ハ中國之毛州殿同心にて、豊前へ着給ふて、國わりの曖なとをし給わんと相談被成処、薩摩方ハ岩屋の陳を引、城井・長野・秋月・高橋なと薩摩方にて可被（「本ノマヽ」）成、いまた吉仰御下（「本ノマヽ、」）ニ參たるニ付、其まゝ御陳めされ、薩摩衆ハ肥後口、右之衆ハ日向口、兩方方はや兩郡へ打入、豊後半國打破之由申けれハ、其時千石殿・大友殿ハ豊後之ことく引返しけり、其外軍衆も驚、早馬ニ而皆〻引せたまひけれ共、黑田殿ハ豊前へおわします、大友・吉宗・千石殿ハ府内之上之原ニ陳取かまへ、薩摩衆よせ來るを被待ける、然処ニ十二月十三日ニ、家

久としミやへ陳取御座す、千石殿ハけちらかし給わんとよせ來りたり、家久を始として、薩摩衆かけ合軍めされ、千石殿はいほく、長宗我部殿兩人衆之内、一千餘騎打取被成、千石殿漸命計をたすかり給ふ、此由都へ聞得、関白様殘念に被思召、嶋津殿ハ國わけをそむき、筑前へ打出、岩屋なとをせめ崩、豊後と一和之由被仰越もそむき、剰千石か軍衆も數多討果し、遺恨の後ニハ都へあたをなす事治定也、只自身發足してせめんと儀定ましまして、追付都を立給ふ、無程関の戸に着給ふ、薩摩衆ハ十二月十三日ニ野神を立被成也、肥後・豊後旗下の衆も皆ゝ心替候へとも、皆ゝ切崩て肥後口・日向口を退給ふ、関白様御弟中納言殿ハ廿万騎引つれ、豊後へ打入給ふ、薩摩衆者日向の様ニ引退之由被聞召、追付日向之高城・財部へ五十一の大陳を付させ給ふ、義久様・義弘様ハ都の城へ籠、大隅・薩摩の軍衆の參事を待給ふ内ニ、京陳ハ取かため、京かた弥の増重なり、玉薬なと用意しけれハ輙亡し給ふ事ならす、然共一陳崩候てとあり、稲葉せしやう坊か陳に打寄被成候へは、敵陳つよく成故、薩摩の軍衆ハ退給ひかうさんし給ふ也、此事天正十五年の四月なり、

七月

一朔日、▽看經等別而申候、衆中各被來候、△筑紫表御働、今日之御日取之由候、如何候覧と申居計候、

一▽二日、同前、

一三日、毘沙門へ別而祈念申候、

一四日、無吴候、△

一五日、▽滿願寺、先月之長日前にて候、かこしまへ逗留候て歸宅候、△御出張之事、去廿六日ニ　御打立之由共也、

一▽六日、無指儀候、△

一七日、▽武具等其外書物等、虫干如例、此晩柏原防州(有閑)歸宅候、△先日興禪寺与兩使を以、武庫様(義弘)へ申上候条ゝ、御納得を以、上原長門守(尚近)・比志嶋宮内少輔(国貞)兩人にて、太守様(義久)へ御申なされ候、始ハ無御納得候つる、已後御得心にて、御行有定、筑紫表へ候忠棟へ、兩使にて此由被仰渡候、然処忠棟より御註進ニ、筑紫表之儀、一行無之候、兼日敵方へ相知候哉、里村悉繰上、居城へ閉籠候間、彼館を責させられ候する外ハ、別之行無之之由御註進候、就夫　太守様御氣色共惡候て、

吾〻其外日州衆、遅参曲事之由候、巨細等両使被申分候へ共、それまてもなく、早〻日州衆可罷立之由候て、柏原周防介去五日八城を打立、今日三日ニ來着之由也、從夫諸方へ夜中ニ、急〻御立之由觸渡候也、

一▽八日、明日可打立支度也、柏周物語候、　御前之御使ハ本田刑部少輔(正親)・伊地知伯耆守(重秀)之由共也、此日從中書(家久)、黒田番左衛門尉にて被仰候、今朝申入候ニきかせられ候、明日打立候欤、大儀ニおほしめされ候、さてハ柏原說等委きかせられたき由也、具申入候、并拙者今度遲參之旨、　御機嫌ニはつるゝ之由候、驚入候、乍去佐土原にて御談合申候通ハ、中書御存知之前候間、後日無首尾ニ候ハぬ樣ニ、直ニ御申奉賴之由共申候也、△

一九日、未之刻計、衆中同心ニ打立候、綾へ着候、▽米良備前守家景へ宿申候、從彼方酒肴なと被送候、△

一十日、早朝打立、三之山へ着候、岩瀨にて町田出羽守(久倍)殿・本田下野守(親良)殿より、拙者へ飛脚預候ニ行合候て、即書狀披見候、善哉坊(面高賴俊)御用之儀候、早〻可被參之由也、并去六日、筑紫麓下栫不殘破却候、上城之事も、一兩日中程有間敷由、忠棟より御註進有由也、即返書仕候、善哉坊へハやかて申遣候、又御勝利千勝万歲之由申候也、

一十一日、早朝打立、大口こなわしろへ着候、即寺家より酒肴持せられ候、其僧物語にも、筑紫表御勝利必定之由共也、川上左京亮(忠堅)戰死候由也、

一十二日、早旦打立、湯之浦へ着候、路次すから手負なとに行合候、其外濫妨人なと・女童なと數十人引つれかへり候ニ、道も去あへす候、

一十三日、早朝打立、佐敷へ着候、▽いとう太五郎左衛門尉出合、船とも申付候由申候也、并寄合中より、拙者をはしめ日州衆、筑後表へ直ニ出船無用にて候、先〻八城へ可參之由共也、興禪寺、先日使僧ニ進上申てより、于今八城へ逗留被申候、御暇被下候間罷歸由也、是にも寄合中より、日向衆之事、如八城皆〻可參之通也、聽而出船仕、此晚德渕へ着候、森隼人佑処へ宿仕候、即亭主御酒振舞候、老中衆へ、加治木雅樂助を以申候、只今當津へ着船申候、直ニ筑後表へと存候つれ共、佐敷より此方へ日州衆之事者可參之由候間、如此候、尤罷出、筑紫表屬　御案利候御祝言、各へ雖可申入候、先日柏原方を以、日州衆遲參曲事之由、　上意以之外之由候間、當津へ伺居候、宜樣ニ賴存由申候也、

町田殿(久倍)・本田野州返事ニ、さてハ只今参着申候、肝要候、不紛先日　上意滞候条、明朝談合被成、尓ゝ返事可承由也、△此夜従久倍(町田)、書狀を以承候、若ゝ日州之人衆、筑紫表へ通候衆もや候すらん、堅とゝめ可申由也、▽得其心候由、返事申候、△

一十四日、▽早朝、久倍・親貞(本田)へ、加治木雅樂助進之候、夜前御談合候て、御返事可有由候キ、委可承候、并愚意共可申上候、誰御使衆被仰付候て可預之由申候也、聽而兩所より御返事、先日兩使従日州指上申候刻、御懸引共被成候、猶も定而其分たるへく候、先ゝ麓まて参候て可然之由也、依夫やかて、△麓村山舍人助処へ宿申候、久倍・親貞まて、伊地知伯州・吉田作州(清存)を以申入候、先日興禪寺・柏原周防介兩人を以申上候趣、乍同前、若相吳之儀も哉候らん間、申にて候、今度日州表御行相替、筑紫表之御行之由、山越(山田有信)を以被仰聞候、委承、諸方へ觸申候処、高知尾従入田書狀到來候、趣者去月十一日、入田方豊へ手切被仕、勝利候、然者早速見續可申由、　中書公(家久)・拙者別而無油断樣ニ賴之由被申候、入田之使者堀方も、宮崎へ在合候て、支而彼方御見次之事被申候、然者鎌雲(鎌田政近)被申事ニ、如此堺目之註進与風候条、於佐土原御談合可然之由候、けにも尤ニ存候て、さと原へ拙者も参候、山越も先日筑紫表之御使被申候間、さと原へ可被参之由申候て、其分候、鎌雲・彼衆談合共申候、入田方手切之事者、かこしまの御談合定候て已後之義候、然者彼方於無御見次者、高知尾迄難儀之由被申候上ハ、爰まて味方御見捨候事無之候、其上後日、それほとの義共候ハヽ、彼方之御行たるへき物を、なとゝや候すらん、殊ニ日州衆、迚も筑紫之御働日取にハ罷着ましく候、彼是　武庫樣へ一ケ条被伺　上意、其御左右次第、日州衆者罷立候て可然之由出合候、中書公も尤可然之旨候つる間、遅参仕候、拙者事ハ、余人にハ相替候間、自身参陳候て、彼義可申上之処ニ、其節より腫物難義候て、不及力由申上候つる、聊私曲之義不存之由申候也、本田源右衛(親商)門尉殿にて、　武庫樣へ御内義として申上候、今度筑紫表御大利目出候、就者、吾ゝ遅参之事、先日兩使を以申上候、巨細右同前ニ候、依夫　上意悪候間、德之渕へ窺居候処、寄合中より、爰元まて可参之由候間、其分候、殊ニ御宿近邊ニ罷居候、憚多由申上候也、即御返事、さてハ参着候哉、如申上候、先日中書御談合

を以、兩使進上候、　武庫樣御得心ニ參候条、　御前へ御申被成候へ共、無御納得、結句　上意滯候、笑止ニ被思召候、爰元出合之分共、一〻ニ被仰聞せ候也、

▽伊伯・吉作にて寄合中より承候、拙者意分、委被聞せ候、先日兩使を以申上候ニ大方同前候、拙者腫物氣之事、御紀被成候ニ、使之あいしらひのやうに候つる、是少替候由也、又柏原方にて御返事之内ニ、此間ハ別而賴おほしめされて候へ共、爰よりハ他國人とこそおほしめさるゝ由候つる、申屆られ候やのよし也、此義も委承候、併是ニ手をつけて可申樣もなく候、其故ハ他國人と候ても、野心・不忠可存當時身躰にてハ無之候、忝事而已候、又爰より御家景ニめしをかれましく候と承事共、彼是不承定候条、中〳〵菟角不申由申候也、

一十五日、久倍・親貞同心ニ拙宿へ御座候、此外かこ嶋衆・諸所之衆被來候也、此日日州衆も皆〻被着合候也、伊伯・吉作を以承候、拙者存分、寄合中前より　武庫樣へ申なされ、今朝被達　上聞候、今少御思案被成、御返事可有由也、

一十六日、山越・鎌雲拙宿へ呼申候へ、可被仰子細候由、親貞より承候間、其分候、伊伯・吉作被來候て、此度遲參之御紀共也、山越事御使被申候て、地躰委被承候て、各之談合ニ同心候、無御心元由共也、兩人御返事も、拙者同前ニ勿論有之侭ニ被申候也、日州衆皆同遲參之衆者、一圓ニ禍有ましく候、拙者前より、一左右次第と申付候上者、不及是非由申候也、然共日州衆皆〻拙宿へ揃申候へ、被仰へき子細有由也、依夫各呼揃申候、椛山殿(忠助)・比志殿・吉利山城守殿(久金)・新納縫殿助殿(久時)・鎌田筑前守殿(政心)・大寺大炊助殿・福永宮内少輔殿、大方此衆也、又伊伯・吉作にて、今度遲參御紀明候、拙者前より御紀御尤之義候、度〻御使へ如申候、今度之事ハ各之御油断無之候、拙者申たる侭ニ御校量候、少も皆同之科無之由、申候也、△

一十七日、早朝、親貞より使預候、夜前忠棟より御申被成候、寶滿・岩屋・立花、此間ハ可去渡由申候て、于今無其儀候、軍衆猶〻可被指登之由候間、日州衆可被打登之通可申渡由也、さてハ敷祢越中守、如　御宿進上申候へ、可被仰聞子細有由也、▽依夫進上申候、軈而被罷歸候、各日州衆へ、筑前のことく被罷立候て可然候、さてハ吉利山城守殿御用之義候、拙宿へ呼申へ

き由也、伊地知伯州にて、御返事被仰出候、今度遲參之義、私曲なき由雖申上候、一向無御得心候、併各分別違候まて之由申上候間、聞召分迄候、拙者事一兩年前有馬へ渡海之時分、遲陣仕候、又去年　武庫樣八代へ御發足之刻、是も遲ゝ申候処、　太守樣法花嶽之僧を以、早ゝ罷立候て可然之由、　御内意候つる、其故隈庄へ御働ニ參會、打續甲佐・堅志田・三船其外肥後、思召侭ニ罷成候ニ、於諸所仕合能候、是も　御内義故かとおほしめされ候へ共、結句此旨御一礼をも申上事なく候、無御心元おほしめされ候、此度遲參之事も、御爲を存候ての事候、聊無私曲由申候、いつれも御納得無之候、拙者事、何条無分別共候共、寄合中も、又隣所・近所之衆も、又其所之衆中も、莵角可難被申被思召候、然者　上意にて候ハてハの儀候間、委被仰出之旨也、謹承候、度ゝ之義、乍勿論尤奉存候、雖然、其刻〳〵、愚意共ハ此度のことく候つれ共、申ても無益存候、寔ゝ拙者事、親類中もしか〳〵の衆無之候、(黨兼)親にて候者老耄と申、又ハ子(観千代)にて候へ共、聊之諫言も無之候、然者氣まかせ迄候処、如此　蒙仰候事、忝共中〳〵無申計之由、寄合中御申賴存由申候也、吉利山城守殿を以、忠長・忠棟へ御傳言候、拙者も御談合ニ可出合候条、委可承之由候間、同承候、此度筑紫之事、不慮ニ屬御案中候、岩屋・寶滿・立花、于今相支候欤、日州衆、就夫被指登候、何としても、今度彼表之義、尒ゝ被召調、別方へ御弓箭候共、禍ニ罷成候ハぬ樣ニ各御賴被成候由也、今日打立可申候へ共、佐敷へ未人數召置候間、彼等召寄、明日打立可申由、伊伯まて申候也、此日親貞・久倍へ參候、閑談共也、　武庫樣へ祗候申候、昨日本田源右衛門尉を以、御無沙汰之由被仰下候、寔ゝ忝存候、然者　上意も今朝宜候、目出由申上候也、鎌筑・同名雲・山田越前(有信)守同心申候、於御前干飯御寄合被成、御酒給候也、此衆筑前表へ罷登候間、万端被　仰聞由共候、又我ゝも存寄候する事ハ、可申上之段蒙仰候、種ゝ之義共出合候也、各遙ゝ打登候事候間、諸篇心遣用心、肝要ニ被　思召候、内端よりハ難測おほしめされ候、堺目之衆御談合可然之　上意共也、△

一十八日、▽觀音ニ祈誓等如常、町田羽州より伊地知藏(宣)人(增)殿にて承候、忠長・忠棟へ可申由也、龍造寺・秋月其外諸侍之質人、何と樣ニ請取被置候哉、被　聞召度

候、其外内龍之質人之事、高瀬へ有由共申候、是又早〻如八城渡海させられ候て可然之由也、又御寄合中と候て、佐多宮内(忠増)少輔殿にて承候、△頃銀之介与申商賣人、肥前へ逗留、歸來候、彼者　武庫樣上覽共候て、下大隅へ罷居者にて候、彼申事ニ、龍家中之衆いさはい・大村邊之衆迄、悉肥前へ打入候而、然与罷居候、薩州衆遙〻被打出候、此度念を鑓を可仕由、心底之通申候、実儀有間敷事にて候へ共、忠長・忠棟へ、爲御存知可申由也、從　武庫樣、本田源右衛門尉殿にて蒙仰候、筑前表へ拙者罷通候、然者彼通路之躰、又ハそこ〳〵に番衆等被召置候て可然処等候らん、彼是入魂候て見償可申由也、▽此日未之刻計、德之渕を出船申候、蓑之浦へ暫かゝり候て、調共申候て夜船ニ乗候、

一十九日、朝塩ニ高瀬へ着船候、日州諸地頭なと、當津へ着船之衆ハ、拙宿へ事問也、當所打入之刻、清源寺へ宿申候間、彼寺主、此方へ着津之由被聞せ候て、被來候、扇子預候也、即見參申、御酒寄合候、此日ハ衆中なと待合、徒ニ罷居候也、

一廿日、看經等如常、此夜之夢想ニ、有山伏之承事ニ、佐土原之ひてり仏ニ、三三十三文之參錢持參候ハ、、此度陳中之仕合等可宜之由、教候由見申候て、聽而覚候、然者寄特ニ存候て、心易にて卜候て見申候、始之三十三を、四八三十二と候へハ、得一金、中三十三、又同、然者乾之卦にて候、終之三十三を、五六三十と候へハ、變卦天沢履卦にて候、如履虎尾之課、安中防危之象、如此之時者、一方ニ思定候て可然卜也と、心中に祈念共申候也、此日未計打立、大津山へ着候て留候也、高瀬より大津山五里也、

一廿一日、早旦、関を打立候、上蒲池山下を通候ニ、鳥居之見得候条、地下人ニ問候へハ、きやう茂大明神と申候て、當所の大伽藍之由申候、しかれハ狂歌一首申候て、同道衆へ物語申候て一笑候、

梓弓八幡を世にハあふけとやいなかもきやうも大菩薩のミ

如此共申候て急候間、高良山町を打過、隈代之渡を仕候、連〻ハ船之外ハ難成渡之由申候へ共、當年ハ如何候哉、皆人の脇通ニ水候て渡候、吾〻ハ船より濟候也、從夫川向半道計行候て、あはら屋ニ宿仕候也、△

一廿二日、早朝打立、岩屋之御陳より一里ハかりこなた、長尾と申村ニやすらひ候て、忠長・忠棟へ使を進入候、

其返事、さてハ參候哉、肝要ニおほされ候、明朝岩屋下栫可被破せ談合最中候、早〻陳所へ可來之由也、聽而致參陣、忠長・忠棟御陳所へ參候、明日一定下栫可被破せ候、然者秋月殿衆・城殿衆・宇土殿衆、此衆にてさせられへく候、諸軍衆者上矢たるへく候、日州衆ハ、取添より上矢射させ申候て可然由、承候也、此夜ハ陳所へ野宿候、伊集院野州(久治)より參陣目出由候て、御酒持せ預候也、

一廿三日、夜中より雨頻降候、然者今日之働相延候也、從秋月殿使者預候、着陳之祝言として、太刀・百疋預候也、此日陳所見合、陳屋構させ候、取添之下之平良ニ日州衆同陳仕候、此夜月待申候、各長道又ハ普請ニ労居候間、只一人讀經にて月待取候也、

一廿四日、別而地藏菩薩へ看經等申候、殊更、宰符故有処にて候条、名号等數千返にて候、此日豊前衆紀伊弥三郎殿、拙宿へ被來候、太刀・三百疋持せられ候、即見參申、御酒寄合候也、諸方之人數着陳目出之由、自身被來衆も候、又ハ陳屋未濟に候らんとて、使者預衆も候、不及書載候、

一廿五日、払曉より看經如常、當所無余儀事候間、天滿宮へ別而祈誓申候、寔〻祈念まてに、

萩こえてむらさき生る野かせ哉　　覚兼

寔〻如何ニ候へ共、筑紫にもむらさき生る野へハあれと、の御神詠の面かけ計にて、かく祈念のため申候て手向奉候也、此朝肝付彈正(兼寛)忠殿陳屋へ、忠長・忠棟來儀候、拙者も可來之由承候間、其分候、種〻會尺共也、夜前山くゝり城内へ通候を、飫肥衆行合、一人被打留候、其者文なと多〻所持候を各披見共申候也、中國衆神田宗四郎、當時文字之関ニ堪忍候、彼書狀なと有、いつれも京都・中國より近〻可被見續之由候、岩屋之事、堅固ニ校量肝要之由共也、明朝夜中より手火矢揃被成、城をなふらせられ候て可然由出合候、取添之方ハ、拙者分別にて下知可然由候也、此日豊前衆原田之衆と有馬殿衆と、口事邊出來候て、さハかしかりし由共申候、乍去聽而無何事候、

一廿六日、夜中より手火矢揃也、然ニ辰之刻計、秋月殿衆・城殿衆・宇土殿衆、兼日下栫破衆ニ候つる、彼衆又ハ諸所足輕衆なと、頓ニ下栫破却候而、敵卅人計討取候、然者諸陳より各支度仕合、城を取卷候、若衆中此次ニ城を責度由被申候間、忠長・忠棟へ使者を以尋

申候、今日ハ無御談合之条、其儀不可然由承候間、指留候、吾〻ハ暫取添ニ罷居候て見申候、下栫破候へ共、敵城少も騒事無之候、劫者なとも能調たる敵にて候由、被見及候也、拙者ハ昨日終日取添より手火矢射候て、城ノ躰細〻見申候也、從忠棟、拙者用段之由候間、彼宿へ參候、彦山般若坊礼義候、会尺最中にて候、我〻も會尺ニ罷出、御酒なとにて閑談共也、此日城内紹運(高橋鎮種)前より、笠之陳まて申事ニ、下城不仕、當時之侭居付ニ御宥免候へかし、可罷出之由申候、從此方被仰離候也、忠棟承事ニ、明日城責と被思候、如何之由候間、尤可然存候由申候、さてハ日向衆之事ハ、取添之攻口とおほされ候、いかゝのよし也、それハいつかたにても御談合次第候、各御寛のまゝ一岸高く候、大事之詰口にてハ候へ共、陳屋かゝりと申、御校量法第候、併一人にて難定候、そと日州衆へ談合申、一着可申由申候也、衆盛之事ハと尋申候へハ、日州衆ハ勿論皆同拙者同心申候へ、其上ニ比志嶋殿(国貞)陳所より上之衆相添有へく候、是にても小勢たるへく候間、和泉衆相添有へき由承候、菟角日州衆へ相談申候、只今使者以巨細可申入之由申候て、拙者ハ聽而罷歸候也、鎌雲・山越なと拙宿へ呼申、談合共申候、責口之儀者、何と樣にも大事之所にてハ候へ共、陳所寄〻之儀候間、取添之口たるへく候、人數之事ハ右之諸所よりも、今少も御相添可被成由、申候て可然之由候、然者敷祢越中守を以忠棟へ申候、明日城責之由候、目出候、日向衆詰口之事、取添之方之由候、岸高く候て、大事之所にてハ候へハ、陳所寄〻と申、又ハ御分別之上に候間、御校量法第候、人數之事、前ニ拙者へ承候所〻尤可然候、此上ニも今少御加勢候て可然由申候也、返事、日向衆攻口之事、御分別法第之由申候、尤肝要ニ被思候、衆盛之事ハ談合衆へ打合被成、又〻委可承由也、山田越前守殿・稲冨新介(長辰)殿、亥刻計拙宿へ被來候、忠棟より承候趣、日向衆詰口之事ハ、取副之方たるへく候、衆盛之事、宮崎・曾井・清武・田野・高城・飯田・嶽・米良・藏岡・綾・本庄、此衆也、都於郡・財部・穗北、彼所〻ハ笠之陳衆へ加可申之由也、諸軍衆明朝夜中ニ岸ニ可被付之由也、取添留城戸より、下ハ圖書頭(忠長)殿御手笠之陳衆との間を、拙者手たるへき由也、其分候て稲冨新介ハ笠之陳のことく歸也、山越へ、さても〻吾〻手ハ餘無勢にて候由、談合衆へ被仰分候欤之由尋

候、稲新存知之前候、涯分其由申て候へ共、各無御納得候、結句無人數と存候ハヽ、日州より多人數召烈候て參候する物をなと、承候つる由物語也、從夫敷越を以、椛山殿・比志嶋殿(国貞)へ、如右我〻一手之事、餘〻無人數にて候間、迚も調かたく候、然者後日之爲に候条、御兩所使被相添候へかし、今一ケ条、忠長・忠棟へ、無人數之御屆申度由申候、御兩所承事ニ、寔〻無人數に候間、拙者申処尤ニおほされ候、乍去使を被相添候する事ハ成ましく候、拙者前より申候て可然由也、從夫又敷越を以、山越へ申候、椛山殿・比志嶋殿へ申て候へハ、如右候条、拙者使一人ハ如何存候、乍御辛勞、後日ノ爲にて候間、山越忠棟へ御座候て、今一ケ条、無人數之由被仰候て可預之由申候、彼返事、何と樣にも拙者使可有候、併忠棟御存分、又談合衆樣躰被聞せ候分にハ、猶加勢之事ハとても可難成樣子候、不事成候共、申せにて候ハヽ、拙者分別次第之由也、我等思案申て見申候へハ、如何樣狐疑なとの御衆盛にてそ候らん、無人數と存候ハヽ、日州より召烈候て可參物をなと承候事、不及是非儀候、吾〻手前之働いたすへき迄と存候て、從夫莵角不申候、此由又山越へ申候、尤之由候也、山越もせめて吾衆を二盛ニ仕候て欤可然候すらん之由也、拙者申候処、尤左樣に可然候、雖然二盛ニなされ候ハヽ、定而椛山殿・拙者なと、二番衆たるへく候欤、我〻二番ニ罷居候ても、小勢にて難調存候、然者已後之閇目者何共候へ、只一同ニ身上之存命候する間ハ、入魂申候て、責候て可然存候由申候、山越其外衆中へも、尤如此可然由共也、日州諸軍へ明朝城攻之由觸申候也、

一廿七日、諸勢寅刻計ヨリ城近指寄、時分を相待候也、拙者手一番にて候ハてハと存候て、宮崎衆時を挙、未明ニ取添之岸ニ付候、拙者旗差、夜之ほの〳〵と明候砌、屏際ニ責登候、同屏涯ニ最前ニ被付候衆、鎌田源(兼政)左衛門尉・敷祢民部少輔・長山兵部少輔・野村主水佑・唐仁原藤七兵衛尉(秀元)、彼仁ハ軈而手負候て死候、右之衆皆〻石打ニ被合候て、散〻之式共也、清武・高城・田野衆、同前ニ軍労被致候、拙者も屏涯にて石打ニ合候、又面ニ鉄放一請候て、從夫退候、先ハ拙者側にも餘多相添候て、上矢共射申候、谷山仲左衛門尉上矢射候処ニ、手火矢を請候て拙者ニ屆、曳退候、其外上矢共射候つる衆も、次第〳〵ニ退候而、拙者手負候砌ハ、

安樂阿波介・加治木治部左衛門尉・同名雅樂助、衆中ニハ丸田左近將曹計也、雅樂助ハ我等被疵候遙之前ニ、はへの尾を請候つれ共、閉目候也、拙者ハ河野筑後守(通泰)へ物申候処ニ手を負候也、從夫我等ニ指替、山田越前守屛涯ニ被付候、是も甲を打碎、石打ニ被合候而、軈而引退候、高城・清武・宮崎・海江田之衆、手負之數難及書載候、宮崎衆中関治部少輔・野村右近將曹・唐仁原藤七兵衛尉・黒江萬介・拙者忰者丸田山之允・楯持一人戰死仕候、清武衆佐多紀伊介(忠長)・川野筑後守・藤見長介・伊集院作州(久宣)内衆兩人・高城衆遠矢軍兵衛尉・山田越州内衆兩人、此衆者一所にて候つるまゝ、委存候条書付候、日州衆各粉骨被仕候、田野地頭大寺大炊助、是も石打ニ被合候、平田孫六(宗質)、是も手負候、福永宮内少輔も手負候、然者日州衆上下辛労仕候也、諸責口茂軍勞無申計候、不見事にて候間、巨細不及書載候、喜入小四郎(久親)殿・伊集院左近將監殿戰死候、此外諸方戰死之衆多可有候へ共、連ゝ不聞及衆共にて候、高山ニ川崎大膳亮、福島へ加藤大学助なと云者戰死候、是者兼日弓箭之覚共有者にて候、かくて午未之刻ニ、悉城内之敵被討納候也、從圖書頭殿、八城へ右之御註進之使僧進上候、御用もやとて拙宿へ被下候間、御寄合中へ傳言申候、拙者前よりも別而申上候すれ共、我等手之衆皆ゝ手負候、陣僧ニ至までも其分候間、御傳言申由申候也、將亦拙者旗差七郎兵衛尉にて候、是も石打ニ合候、旗之竿計殘候て、絹之分者中より下ヲ、城内より長刀にて切落候也、此晩忠長・忠棟より、輙城被攻取候祝言、又ハ疵之躰如何之由候て、使預候、税所(篤和)新介殿疵見廻ニ被來候間、忠長・忠棟へ御祝言、彼方頼候て申候也、諸地頭・一所衆、疵見廻ニ御座候、不及書載候、從秋月殿使者預候、今日之軍勞無申計候、殊ニ被疵候、如何候哉、自身御座候すれ共、定而心安養性申候らん、醫者同心候間、用段候ハゝ可被遣由共也、城殿此外着合衆各より疵事問共也、難盡紙上候、

一廿八日、日州衆へ右之註進として、梶原治部左衛門尉指遣候也、此日忠棟、我等陳所へ疵見廻ニ御座候、樽持せられ候、新納右衛門佐(久饒)・稲冨新介被來合、閑談共被成候、道正宗与、忠棟同心候て來候、昨日之樣なる事を、京都にても見聞候ハぬ由共はなし候也、城内ニ候つる文共あまた候、各披見共申候也、先日山くゝりの持通候を討取候文なと同前候、此晩鎌雲にて忠長・

忠棟へ御内儀申候、拙者疵、さのミ不痛候間、爰元へ暫可罷居候へ共、宮崎衆中・拙者悴者悉手負申候間、諸國之衆疵事問ニ被來候、左樣之請答さへ難成候条、明日わたり打立、高良山・大津山邊まて可罷退所存候、寔ゝ吾ゝ遲參候て、又如此申候事、背本意候へ共、餘ゝ他國衆着合にて候ニ、手之者なと候ハてハ見苦候間、如此存由申候、返事ニ、尤ニ被思され候、先ゝ八城まて參候て可然由承候也、此日從中書御使僧被下候、拙者召烈候衆者、皆ゝ手負候て難成候間、彼方を雇申候て、諸國之衆へ、疵事問被成候礼義共申候也、

一廿九日、払曉、立花之作させられ候するとて、諸軍衆打立也、此朝忠長・忠棟へ、昨日鎌雲にて御内義申候、御納得被成、先ゝ八城へ參候て養性肝要之通承候間、打立申候、若ゝ御用共哉候らん之由申候也、丸田左近將曹にて申候、さてハ歸陣申候哉、可然候、別ニ御用等無之候、岩屋にて捕人之内、侍之妻子共之事、爰元も留させ申候、八城にても、遠方まて引取候ハぬ樣ニ、御留可然候、其故者、寶滿・橘へ居候者も、妻子ハ岩屋ニ置たる者、餘多有由申候、彼等計策之爲にも可罷成候間、御留肝要之由也、此日打立候て、高良山領宮之路と申所ニ留候、此道にて木脇若狭(祐光)守殿へ行合候、八城より　御使之由也、各在陣辛勞之由也、拙者へも別而蒙仰由承候也、驚而於路頭、御酒寄合候也、

『長谷場越前自記』

一同七月十四日、武藏と云へる在所迄御陣替を被成けり、『天正十四年』

尓も處ハ古へニ天津か嶽と号して、菅丞相の天ニ向て祈誓被成功德ニて、哀ミを垂れ給ひ、則天滿大自在天神と名号降りし、其故ニ天地和合の佳例とて、彼麓ニ陣取て間三日之御兵儀を被調、押直シて岩屋之城ニ着陣を被致、此山と申者天ニそひへて高山也、前後左右ハ諸國の軍兵陣取らる、野頸ニハ日州衆、東の山の肩ニ者長野・高橋・秋月陣を始として、兩筑州衆之陣所也、大のぼりニ小驗迄をひたゞしく備つゝ、秋明風になびかせて、修羅ぎせいとそ見得ニける、西ハ薩摩衆・大隅衆・肥後の國衆を相具て、夜詰日詰萬方ゟ吐氣作り、石火矢・鉄炮被打せ、其物音は大地も動く計也、然とハ申せ共、城主高橋入道ハ少もさわぐ事ぞなき、是を見て痛敷やおもひけん、秋月方の陣よりハ、使僧ニ而通用す、高橋方存分ハ雖憚り多、蟷螂ケ斧とかや、

其上今度之干戈ハ國中の防戰ニハ不可似、さとりの前之是非ニして、於此刻ハ御奉公被成なバ、可然も執達を致んと頻ニ支て媒介す、此意趣を承り猶こそ思ひ、ますかゞミ曇らぬ月のみやこより上意を被仰下て、忝くも有甲斐ニ心の闇を晴しつゝ、太閤樣の御披官と、年來之主人より御取立ニ預りて、御着長を拜領して、類ひ少き事共を何の世ニかは可忘、御恩を忠ニて報んと、數か度の返事を秋月ハ申切たる志、唯賢道を守らんとて、臣の法をそ被立ける、扨ハ無是非次第とて、則時刻を廻らす、七月廿七日の寅の點萬方より押寄て、平ら詰ニ社被攻けれ、城內の人〻者大手の口ニ指合て、防事ハ無限り、於此ニ伊集院左近允・蓑田彌四郎・矢上太郎五郎致手柄戰死也、久留木伴介痛手を蒙り引退く、其侭敵ハ詰之城ニ取篭ル処を追詰て、板城戶口ニて長谷場兵部少輔太刀始メ仕る、同心ニ向江宮內左衞門尉・中馬右衞門尉合戰す、肥州隈本の住人ニ井手田親綱主從二人、同國八代之住人ニ的場五藤弐番合戰被致、其軍勞は申許もなかりけり、又取添の方ニては喜入攝州の御次男と、有馬彌六・宮原越中守討死す、追手搦手一同ニ息をのべす攻けれハ、野頸もかれに相同し吐氣を作りて責上る、屏涯ニ寄せ付て切り突落す、其中ニ山田越前守・上井伊勢守・宮原左近將監者、骨ニ打碎きてぞ被落、此外處〻の兵ものも致戰死數余多、一二の丸ハ事果し、詰の城に切り入れバ、高橋入道痛手負て良等の兵ものニ養生せさせて居たりしが、再期そと思ひ宛、矢藏の上ニて十念唱へてもんじんす、寄手の兵もの落合て法師首取て出てげり、既ニ此日も申の半にをちけれハ、勸世音寺の西の方ニ討頸聚て實檢し、勝吐氣畢ハ、軍兵者陳所〳〵ニ打歸り、悅ふ事ハ無限り、次きの日は若武者衆箱崎參詣ニ事寄せて、橘か城之表迄兵烟を立けれハ、豊前邊もぎやうてんして、彦山の坐主坊より御祝言の使僧也、扨人〻の念願者、弓矢八幡大菩薩ニかゝるきどくを再拜して、神宮皇后合掌して西府の宮ニ參り宛、國家太平安樂寺と、梅の宮を礼拜す、本地堂ニ迂步て御池の橋を打渡り、相初メ河ニ着きけらし、角て日數も過き行けハ、寶滿カ城をのり取て、秋月方ニ被下、功成り名遂身退くハ天の道と心得て、豊州入り之支度とて、同九月廿日ニハ開陳を被成宛、本國指て歸鞍也、然處ニ御太將軍ニ義久樣ヲ奉始、義弘樣・年久・家久・右馬頭・薩摩守・椛

山兵部太輔・北郷一雲、此外の士卒者幾千萬共いさ不知、皆八代江御陳ニて、兩筑州の軍勞衆へ御見參被成宛、陳中休息の爲ニとて、天下二番之亂舞者ニ、澁谷与吉と聞得たる、年十八と申せしニ、御能をさせて各が見物の爲ニとて御情不殘、唯世中ニ降る雨の國土を潤すニ相同し、是を能〻尋るに先路ニも珎重也、於我朝者延喜の御門の時代かや、扨太唐ニ到りて者、堯舜の世の例ニも、角やと申ス計り也、

『樺山紹劔自記』

一秋月方申子細有由者、筑前之國ニ岩屋と云る城、豊州家之者高橋紹運罷居候、是ニ陣を付、彼者御手ニ隨候ハヽ、豊筑嶋津殿御進退ニ可罷成、左候へハ九州不殘所とて、彼所へ衆遣なり、圖書頭殿大將にて、筑前三笠之郡岩屋之城ニ押寄、肥後・肥前・筑後・筑前・豊前衆迄在陳也、此人數ニ而彼城二重三重ニ取卷早、八代ニハ　義久樣　武庫樣・右馬頭・中務太輔殿御大將衆各〻御座候、然處ニ日州衆遲陣成故、八代ニ而　上意惡候而不掛御目、日州衆無念之次第也、就夫岩や之城之取添之栫を捨置たる切岸の本ニ責寄、日州衆之陳也、其比規久ハ所労之子細有て、忠助參陳也、城ニハ紹運嫡子ハ立花之城ニ籠、次男ハ寶滿嶽へ籠、宗との者共付遣候間、岩やニ者無人數也、乍去紹運爲聞得もの なれハ、日夜相戰、然者『天正十三年』七月廿七日夜半計より、切岸の下打寄り鳥の聲を待て、吐氣をつくりて岸ニ付、矢場ニ死する者ハ不知數、石打迄也、敵味方之さかひも不見分之処ニ、各〻手負ニ成引退時分、忠助切岸半迄責上る、大石をなけ懸〳〵ふせく、松の木楯の厚をつかせける、其楯と共ニ打着られて甲みちんにくたけれ共、一足も引へからすと下知して不退、鉄炮も身ニ當る事不知數、具足裏かく程もなけれハ身恙なく、日差出るニ芝きわに押寄、巳ノ刻はかりに塀ニ付て、塀越之鑓幾度共なくつき合、鑓被切折者取替〻〻戰、塀きわにて忠助の前ニふさかる者共、椛山宮内少輔・同名刑部左衛門・同新左衛門・同右衛門佐・同六郎兵衛・同大膳・早崎甚右衛門・同名掃部兵衛なんと也、然處ニ塀之上之渡り矢藏ゟ長刀・鑓を以ふせく、其長刀・鑓に當てころひかゝるをおさへ留んとする処ニ、余多之手負とも落重る間、忠助もはるかの谷底江落入早、少し心を直し、をきなをり又塀ニつき、命ハけふ

をかきり、此城責取らすハ、薩州衆壱人も延事不可有、各〻心清く命を捨よと云下知ニ隨ふ悴者共、鑓・長刀・石打ニ合ひ、いたでうすて二三ケ所手負ぬ者なしといへ共、各〻前ニ立て塀を乗越早、午未之刻ニ塀を越て、紹運を初數十人打取、日州衆之請取之詰口ゟ、人衆塀を越初る也、穆佐人衆も數十人手負分取も仕、忠助厄口を聞候事、于今恥入候、彼城秋月江給候、薩州衆筑後かハら山迄ひらかれ候、其しつはらひ日州衆受取也、各〻くましろ河をわたり、高良山の方江被居候得共、穆佐衆計此しつはらひの役可成とて、川を後にして其夜を明し河を渡申候、如此して高良山江參候而ゟ、氣相惡敷候而肥州高瀨ゟ船にて水俣江着船、從夫羽月江參候而堅利江歸候、養生數日を經候也、然者嶋津殿太刀風天下へ吹おほひける間、四國・中國・五畿内之諸侍、島津家ニ心を合ける、然處ニ大友家ハ先年日州於山東、嶋津家を可亡之儀有是、何事そや、數代懇切之爲家之間を、徒ニ思候事思慮淺故也、到九州ニ嶋津・大友とて、廿代ニ及候なとゝ申傳候、其上緣中を結ひ親子兄弟の思ひを被成候爲家之處ニ、左右共ニ無遠慮事口惜次第也、

169

「旧傳集」

一筑前岩屋城主高橋主膳兵衛鑑種入道紹運を攻殺候刻、新納武藏守忠元石ニ而腰を打れ、駄腰ニ乗り下知被致候、城强ふして味方亡たる由候、大形素肌責之由、混甲三百人ハ無之、其砌　秀吉公御馬を被向候付、味方いたし候九州之諸將力を得、敵ニ成候故岩屋之城强候得共、無二責落、其勢ひの中ニ御引取被成候御方便ニ而、無理ニ御責落被成候、紹運辞世、

骸をは岩屋の苔ニ埋てそ雲井の空に名を留むへき

170

「加世田士前田茂右衛門藏」

一鵜戸へ一七日參籠之事、

一八幡宮へ連歌百韻之事、

右旨趣者、今日之城詰ニ致高名、武運長久之御願書也、仍如件、

天正十四年七月廿七日願主白敬

兵部左衛門尉
前田兼政

立願書